

312.22
H42



* 0005210000 *

3

0005210-000

312.22-H42ウ

赤色支那の究明

波多野乾一・著

大東出版社

昭和16

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

205

312.22
H42



波多野乾一著

赤色支那の究明

大東出版社



905

90

目次

目次

一、序 説

共同防共を基調とする日支新條約の締結——國際的大經綸の結實——赤化
 共同防衛論の回顧——西安事件及びその後の展開——支那共產運動の現勢
 ——赤色支那——防共の聖戰は今後に在る

二、中國共產黨略史

成立——マルクス主義研究會——ワートインスキイ渡支——陳獨秀との會
 見——創立大會——一全大會——中共青年團——二全大會——初期の政綱
 ——中國國民黨との提携——支那革命に對するコミンテルンの方針——孫
 文・ヨツフエ宣言——中國國民黨一全大會——合作成立す——容共に因る
 國民黨の内訌——西山派——北伐の進展と國・共分離——中山艦事件——
 黨務整理案——汪・陳獨秀宣言——四・一二事件——南京・武漢兩政府の

對立——國・共分家——八・七會議——廣東コムミュニオン——六全大會——
 紅軍及びソヴェート起る——解黨派除名——李立三路線問題——中蘇臨
 時政府の成立——一九三二年に於ける紅軍とその討伐——第五次討伐——
 二蘇大會——江西赤區の總崩潰——紅軍の西遷——一九三六年の紅軍——
 北支赤化中樞の完成——山西侵入——抗日人民戰線運動——コムンテルン
 の抗日指導——軍事偏重主義の拋棄——コムンテルン七全大會に於ける抗
 日指導理論——八・一宣言——戰線結成の經過——その實踐——對日戰準
 備の一環成る

三、支那事變と中共……………二二

西安事件——國共再婚成る——事變初期に於ける黨の施措——宣傳陣の
 壟斷——コムンテルンの動き——八路軍と新四軍——總結

四、邊區（實質上のソヴェート區）……………二五

邊區とは？——陝甘寧邊區の歴史——範圍・人口——政治機構——各種建

設工作の概況——國民黨側の邊區觀

五、毛澤東——支那の赤い旋風……………二七

東亞の公敵——少年時代——長沙に行く——新民學會——北京生活——湖
 南での運動——中共に加入——廣東時代——秋收暴動——富田事件——獨
 權確立——彼はどんな男か？

六、延安水滸傳（中共領袖群像）……………二七

紅軍の西遷と赤色梁山泊——呼保義宋江・毛澤東——玉麒麟盧俊義・朱德
 ——智多星吳用・周恩來——入雲龍公孫勝・陳紹禹——大刀關勝・彭德懷
 ——豹子頭林冲・張聞天——霹靂火秦明・徐向前——雙鞭呼延灼・項英——
 小李廣花榮・林彪——小旋風柴進・秦邦憲——撲天鵬李應・徐特立——
 美髯公朱同・林祖涵——花和尚魯智深・賀龍——行者武松・蕭克——雙鎗
 將董平・葉劍英——沒羽箭張清・徐海東——青面獸楊志・葉挺——金鎗手徐
 寧・轟天雷——急先鋒索超・蕭勁光——神行太保戴宗・羅炳輝——赤髮鬼

劉唐・任弼時——黑旋風李達・羅邁——九紋龍史進・廖承志——混江龍李俊・董必武——浪子燕青・吳亮平——神機軍師朱武・劉伯承——聖手書生蕭讓・成仿吾——母藥又孫二娘・鄧穎超女士——母大蟲顧大嫂・蔡暢女士——一丈青扈三娘・丁玲女士——その他の女黨員——物故・轉向者——尾聲

七、歐戰後に於ける中共の動向

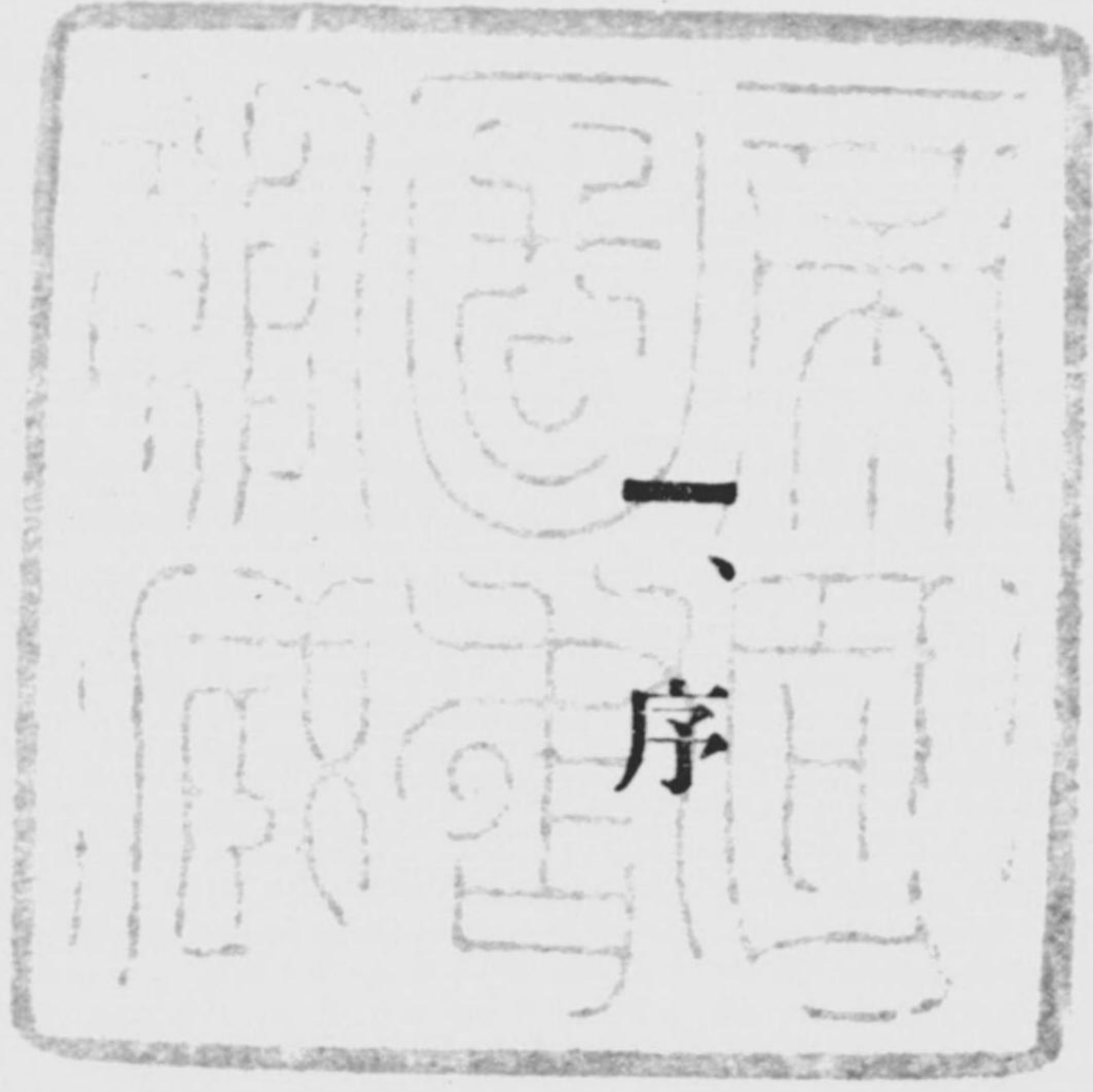
歐戰と蘇聯及びコミンテルン——宣言支那問題を忽略視す——デイミトロフ論文——支那に於いては人戰戰術を拋棄しない——歐戰と中共の動向——毛澤東の第二次帝國主義戰爭講演提綱——延安一〇・一〇決議——抗日戦線繼續に努む

八、抗日戦線の矛盾とその成長

第一次國共分裂の回顧——第二次合作初期の磨擦——第二期(一九三九年)の磨擦——第三期(一九四〇年)の磨擦——軍事衝突の意義——分裂は必至? その時期

九、國共磨擦の事例

イデオロギイ及び合作性質に關する見解の相違——陝西省兩黨黨部衝突事件——新華日報襲撃事件——反共小組織の成立——國民黨のトロツキイスト利用とこれに對する中共の反感——張國燾への除名——邢臺事件——武漢防衛問題に於ける兩黨の對立——徐特立の赤化意圖露説——中共系民衆團體の解散——張蔭梧事件——汪精衛氏の重慶脱出——防制異黨活動辦法——平江事件——毛澤東の爆彈聲明——蔣鼎文陝北掃蕩を豫言——延安一〇・一〇決議の磨擦觀——隴東事件——邊區黨二全大會に於ける磨擦事實の暴露——陳誠の反共言説——山西新軍事件——中共二・一決議——天水行營文書——八路軍小冊・磨擦從何而來——新四軍の解散



說

昭和十五年十一月三十日、善隣友好、共同防共、經濟提携を基調とする日支基本條約が、わが阿部全權大使と國民政府汪行政院長との間に調印されたことは、東亞新秩序建設に一歩を進めたもので、我等の欣喜措く能はざるところであるが、特に『共同防共』の原則が兩國に依つて承認・採用されたことに對しては、多年支那に於ける共產運動の研究に従ひ、支那赤化の危険を警策しつづけた私をして、手の舞ひ、脚の蹈むところを知らざらしめたのである。

序
回顧すれば一九三三・四年の交、支那に於ける共產運動はいよいよ猖獗をきはめ、八大ソヴェート區・三十萬共產軍の實力を以て、支那の約一省半に亘る大地域に占據し、屢次對日宣戰を布告して中外の視聽を驚かしてゐたのであるが、これに對しわが朝野に於いては、東亞に於ける赤化共同防衛といふ國際的大經綸を樹立し、これが實現を意企したのであつた。

説
然しながら當時の日本の認識は、遺憾ながら今日とは隔段の相違があり、支那に於ける共產運動の實情、乃至その恐るべき所以等に關しては、風馬牛相ひ及ばざるものがあつた。

序
たまたま多少の關心を拂ふものがあつても、『支那は共產化する可能性があるであらうか？』といったやうな空論を闘はせるくらゐが關の山で、共產運動がいかなる容相で支那に行はれてゐるかを知らうとしなかつたのである。

説
赤化共同防衛論に於ける一走卒であつた私は、一九三五年夏以來、支那に於いて展開されつつある抗日運動が、それまでとは質を異にしてゐる事實に駭目し、これが眞相を發覺せしむべく、一九三六年夏上海に遊び、多年の同志である日森虎雄君の協力を得て、共產黨抗日運動の實相をつぶさに究明した。その結果彼と私とは、異口同音に叫んだ。『これは「抗日人民戦線」ではないか？ 人民戦線の「支那版」なのではないか？』歸つたらこの問題を提げて、大いに警策しようといふ約束を交して、連絡船で長崎に着いた時、成都事件の發生を新聞で見たのであつた。私は想つた、これこそ抗日人民戦線が完成して、大規模な實踐に移つたのだと。

3
この興奮の下に、私は『抗日思想の諸要因』を中央公論誌上に載せた。原題は『抗日人民戦線の理論と實踐』だつたのを、編輯者が變更したのである。私はこの論文の中で、抗日人民戦線の結成過程を資料的に究明し、最後に對策として、今日から見ると噴飯もので

あるが、支那に於いて人民戦線と相対立してゐる支那ファッシステイを支援すべしと書いたものである。

この論文は、多少反響があつた。然し、これを是とする人は少なかつた。大抵は言、その實に過ぐとして、小題大做を笑ふ批評であつた。『抗日人民戦線なんて、君の製造したものだらう。』といふ人もあつた。成程、その言葉は私の製造したものに相違ないが、戦線そのものまでも私が製造したのではない。私はその存在を、私の眼で見えて來たに過ぎなかつたのだ。

それから間もなく日獨防共協定が締結された。赤化共同防衛の一つの結實であるとして、我等はこれを歓迎したが、論壇はむしろこれに反対であつた。少くとも懐疑的であつた。

そのうちに西安事件が起つた。私はこれを以てテッキリ共産黨のクーデターであると思見、共産黨が一九三五年八月一日の宣言（いはゆる八・一宣言）の趣旨を實行して、『統一的・全國的國防政府』の樹立に進んだのだと論斷したが、これ亦嘲罵のうちに葬られたのであつた。

然しながら、西安事件後の展開はどうであつたか？ 國・共妥協交渉は秘密裡に進められ、國民黨の中央執行委員會は、中共の提議に應じて容共條件を明示したではないか？ さうして最後に、抗日戦線の一翼たる第二十九軍に依つて、蘆溝橋事件の火蓋が切られたのである。引きつづいて政治犯の釋放、共産軍の改編、終に國・共再婚の實現となつたのである。

爾來滿三年半。抗日戦線に於ける中共のリードますます加はり、比重は増加する一方である。第一、陝北に於ける中共の基本ソヴェート區は、陝甘寧邊區なる表現名の下に、儼然たる一獨立國を形成し、領域三十數縣に亘る梁山泊を成してゐる。第二、北支に於ける第十八集團軍（第八路軍）、中支に於ける新編第四軍（新四軍）の合計兵力四十萬、外廓軍隊六十萬に達し、將さに蔣介石直系軍との平衡を獲得しようとしてゐる。第三、共産軍の游撃に因つて、所在に游撃根據地が樹立されてゐる。それは今のところまだ、重慶側との混合政權であり、桃色政權ではあるけれども、そのヘゲモニーは明白に中共に依つて握られてゐる。かかる桃色政權である晋察冀邊區等の五區を連ねると、山西・河南・河北・山東・安徽・江蘇の赤色T字形が完全に成立してゐる。

その他、重慶政府部内への蠶食、コミンテルンの支援を背後にせる對重慶壓力、巧妙深酷なる宣傳陣、憲政問題を提げての民衆獲得工作等、恐るべき容相を露呈してゐるのである。

——これが『赤色支那』である。『抗戰支那』といふうちにも、重慶政權とは全く性質を異にして、煮ても焼いても喰へないシロ物である。全面和平が將來出來ても、『赤色支那』だけはその範圍外の、正に縁なき衆生である。東亞新秩序の唯一の障礙で、その存在する限り、東亞永遠の障礙たるべき『赤色支那』である。

支那事變は防共の聖戰だといはれてゐるが、それは文字通りにさうである。全面和平が出來ても、防共の聖戰は中止することは出來ない。とすれば、『赤色支那』の真相を掴むことは、焦眉の急でなければならぬ。

序

一九三〇年に於いて、支那問題は滿洲と共產黨問題だと歸納し、翌三一年以來官版七卷五千頁を撰述したが、讀まれる範圍が限られてゐて、警策の目的を達し得ないので、堪へ切れず、終にここに本書を編むに至つたのである。赤化共同防衛論が結實して、日支條約の基調としての共同防共となつたことが、その機縁の一つとなつたことは勿論である。

説

二、中國共產黨略史

中國共產黨の成立

ロシア革命の影響を、支那に於いて最も鋭敏に感受したのは、インテリゲンツィアであつた。就中、新文化運動の搖籃として、登高一呼、衆山皆應するの地位に在つた北京大學では、同校教授圖書館主任李大釗が主唱となり、張國燾、韓麟符等の左傾學生數十人がこれに附和し、一九一八年春、『マルクス主義研究會』なる研究團體が、學内に産れた。これが支那に於ける共產主義運動の嚆矢である。

時の北京大學文科學長陳獨秀は、或意味に於いて典型的機會主義者であるので、直ちにこの運動を支持し、ために共產主義的傾向は、北大系統の文化運動中に於いて、顯著なる一潮流となつた。——ところへ起つたのが、一九一九年五月四日の、有名な五・四事件である。これには遠因がある。即ち同年三月の北大事件である。

當時、北京政府國務總理段祺瑞の懐刀である徐樹錚、及び段の私黨安福俱樂部は、國會議員張元奇をして、教育總長傅增祥を弾劾させ、舊禮教破壊の責任者として、陳獨秀及び

胡適（北大文科教授）を辭職させようとした。北大校長蔡元培は、この守舊派の攻撃に對して立場に窮し、一の聲明を發して守舊派の意向を緩和するとともに、學長廢止を名として、理科學長秦汾を教育部に轉任させ、文科學長陳獨秀を平教員にしたが、陳は見切りをつけ辭職してしまつた。これが北大事件であるが、陳に同情せる學生連は、この憤慨の吐け口を排日運動に求め、日支軍事協定反對、ヴェルサイユ條約調印反對に藉口し、三千餘人から成る一大デモを敢行し、親日派曹汝霖邸を焼打ちし、曹及び陸宗輿、章宗祥を負傷させた。

これは豫想外の發展であつた。支那の民衆、その一部である學生が、はじめて集團の威力を發見したといふ意味に於いて。個人は弱いが、集團は強い。この自覺を得て立ち上つた李大釗等のマルクス主義研究會が、單なる研究團體から、一步を實行に移すことは、五・四運動の一役を経てからは、それはただ時機の問題でしかなかつた。さうしてその時機は、意外に早く、翌一九二〇年にはもう到着した。コミンテルン極東部長グレゴリイ・ナウモウィッチ・ワレーインスキイの支那訪問である。彼はザルヒンなる假名の下に、夫妻相携へて來支し、先づ北京に李大釗と會見した。

けだしソヴェート・ロシアは、革命當初の豫期に反して、對歐宣傳意の如くならず、加ふるに國內の經濟的破綻を救ふがため、新經濟政策を採用して、一部資本主義への復歸を餘儀なくされるとともに、歐洲の資本を輸入する必要を生じ、對歐赤化宣傳の鋭鋒を收めて、いはゆる東方迂回政策を採るに至り、特にすでに或程度の黎明運動を経て、帝國主義打倒と、國內軍閥排除とを目標とする國民運動が、やうやく國內青年の信念を形づけつつあつた支那に着目し、ワートインスキイを派遣したのである。

かくて彼は、支那赤化の第一選手として來支し、李大釗と會見した結果、その紹介に依つて、上海にゐる陳獨秀と會ふことになつた。陳は北大辭職後、當時北京の盛り場であつた新世界で、共產主義の宣傳ビラを撒布して檢束されたり、純然たる共產主義者に成り済ましてゐたが、久しからずして上海に潜行し、支那共產黨組織の志を懐いて、東奔西走してゐたのであつた。

かうした環境の陳に取つて、李大釗からのワートインスキイ紹介は、渡りに船であつた。斯くて同年五、六月頃、兩者の歴史的會見が行はれ、その結果同年九月、上海佛租界霞飛路漁津里二號の『新青年』總編輯所に於いて、中國共產黨が成立した。

この創立大會に参加した黨員は、陳獨秀、戴季陶、沈定一、陳望道、李漢俊、施存統、阮嘯仙、楊明齋、張太雷、周佛海、張東蓀、邵力子等の十餘名であつた。コミンテルンを代表して、ワートインスキイが列席したことは勿論である。

私はこの會合を、假りに創立大會と命名したが、實は創立發起人會といふほどのものであつたらしく、政綱の決定もなく、宣言の發表もなく、ただ(一)國內に於ける工作として、工會すなはち労働組合をつくり、黨員を獲得すること。(二)ロシアへの留學生派遣のため外國語學校設立。(三)機關誌『共產黨』創刊等を決議したに止まつた。が、この會合後、陳等は銳意黨勢の擴張を謀り、同年十月陳の廣東行に依つて同地に黨支部成立し、譚平山、陳公博等の入黨を見、北京、漢口、長沙、濟南に支部が出來、東京、巴里への工作にも着手し、機關誌『共產黨』も創刊され、外國語學校も上海に設立された。

一方北京に於いては、ソヴェート・ロシアの表向きの使者として、代表ユーリンが一九二〇年秋入京し、同年春の有名なカラハン通牒を背景とし、支那朝野の好感を買ふとともに、盛んに黃白を散じて學生連を手なづけた。その仲介者が李大釗であつたことはいふまでもない。

翌一九二一年に入り、中國共產黨は、はじめて正式の指導部を持つ組織となつた。同年七月の中國共產黨第一次全國代表大會（以下一全大會と略稱。）が、上海佛租界の某處で開かれ、陳公博、包惠僧（廣東）、李漢俊、李達（上海）、張國燾、劉仁靜（北京）、董必武、陳潭秋（武漢）、毛澤東、何叙衡（長沙）、周佛海（留日）十一代表出席、コミンテルン加入を決議し、陳獨秀を中央委員長に、周佛海を副委員長に、張國燾を組織部長に、李達を宣傳部長に選舉した。

かく一九二〇年の創立大會、一九二一年の一全大會を経て、黨は成立を告げたのであるが、これと關聯して、記載を逸してならないのは、中國共產主義青年團の成立である。すなはちキム支部で、黨の補助機關であるが、その前身である中國社會主義青年團は、一九二〇年八月上海に於いて成立した。

組織の中心は陳獨秀、楊明齋、俞秀松等で、最初の團員は僅かに八名であつたが、工讀互助團を中堅として團員獲得に努めた結果、一月ならずして三十餘名に達し、俞秀松が書記となつて團務を執り、張太雷を代表として莫思科キム二全大會に出席させた外、工人學校を設立し、機器工會、印刷工會を組織する等、相當の活動をすることが出來た。

しかしかうした團體組織の原始時代とて、團員の思想系統一致せず、共產主義、無政府主義、ギルド社會主義、サンデイカリズム等各種各様の主義者を抱擁してゐたので、一向統制が取れない。で、一九二一年五月、陳獨秀の意見で同團は一旦解消、次いで張太雷がキム支部組織の指令を受けて莫思科から歸國するに及び、十一月再建の運びとなり、共產主義者だけ結束し、翌一九二二年五月一全大會を開いた。（一九二五年二月の三全大會で中國共產主義青年團と改稱した。）

黨の成長

一全大會後間もなく、コミンテルンは、當時開會中であつたワシントン會議に對抗の意味で、イルクーツクに極東弱小民族（被壓迫民族）會議を開催したので、黨は代表として張國燾、蔡和森、卞士琦を派遣した。これが黨として國際的に活動した第一歩である。

つづいて一九二二年七月、二全大會を廣東で開いた。この大會で、はじめて黨としての宣言の發表があつた。宣言は三項から成り、第一項は『國際帝國主義宰制下の中國』と題し、帝國主義と世界各植民地との關係、各國の支那侵略史、及び支那無産階級の現状を述

べ、第二項『中國政治經濟の現状と被壓迫大衆の苦境』で、帝國主義の侵略及び軍閥支配下に在る支那無産大衆の被搾取状態を叙し、第三項『中國共產黨の任務及びその目前の大奮闘』に於いて、結黨立黨の趣旨を左の通り闡明してゐるが、これは黨の初期の政綱と見るべきものである。

中國共產黨は無産階級政黨である。その目的は無産階級を組織し、階級闘争の手段に依り、勞農專制の政治を建設し、私有財産制度を破除し、漸次一の共產主義的社會に到達せんとするものである。中國共產黨は、現在に於いては勞働者と貧農との利益の爲めに勞働者を指導して民主主義的革命運動を援助し、勞働者と貧農及び小資産階級に依る民主主義の聯合戦線をつくらなければならない。中國共產黨は、勞働者と貧農との利益のために、この聯合戦線内に在つて、次ぎの目標を定めて奮闘するものである。

- (一) 内亂の消滅、軍閥打倒、國內平和の建設。
- (二) 國際帝國主義の壓迫排除、中華民族の完全なる獨立。
- (三) 中國本部(東三省を含む。)を統一し、眞正なる民主共和國となす。
- (四) 蒙古、西藏、回疆三部の自治を實行し、眞正なる民主共和國となす。
- (五) 自由聯邦制を採用し、中國本部、蒙古、西藏、回疆を統一し、中華聯邦共和國を建設す。

- (六) 勞働者及び農民は、男女を問はず各階級議會市議會に於いて制限なき選舉權を得、言論、出版、集會、結社、罷業の絶對自由を有す。
- (七) 勞働者、農民及び婦女に關する法律を制定す。
 - (A) 勞働者待遇の改善。請負制の廢止。八時間勞働。工場は職工醫院及びその衛生設備を設く。工場保險。女工及び少年工保護。失業勞働者保護。
 - (B) 丁漕等の重税の廢止。全國——城市及び鄉村——の土地税則制定。
 - (C) 厘金及び一切の額外税則の廢止。累進所得税の制定。
 - (D) 田租率を制限する法律の制定。
 - (E) 女子を束縛する一切の法律の廢止。女子に政治上、社會上、教育上すべて平等の權利を享受せしむ。
 - (F) 教育制度の改良。教育普及の實行。

右宣言中注目すべきは、勞働者と貧農との提携を主張してゐる點で、支那全人口を四億と見、そのうちの二百萬人に過ぎない勞働者に對比し、三億三千六百萬人と概算される農民の指導に着目したことは、刮目すべき事實である。學生の指導にはじまり、勞働者の組織に進み、或程度までの成果を獲得してゐた黨は、ここにはじめてその政綱を公表するに

至り、更に一步を進めて農民運動への關心を示したのであつた。

二全大會前後の重なる出来事としては、一九二〇年北京大學共產系分子に依つて設立せられ、黨の補助機關となつてゐた中國勞働組合書記部が、各地勞働組合の聯合を策し、一九二二年五月一日から五日間、廣東に於いて第一回勞働大會を開いたこと、一九二二年一月の香港海員罷業（廣東のマルクス主義研究團體『互助社』指導）、一九二二年十二月の開業炭坑争議（マルクス主義研究會指導）、一九二三年二月の京漢鐵道罷業（有名なる二・七事件を含む。）等である。

かうした情勢のうちに、一九二三年六月三全大會が廣東で開かれた。この大會に於いて、黨綱九箇條を制定し、次いで、爾後黨の運命に多大の關涉を齎らす決定を行つた。すなはち中國國民黨との提携案である。

當時の支那に於いて、民主主義革命を號召しつつあつた中國國民黨との提携は、しかしこの三全大會にはじまつたものではなく、一九二二年七月の二全大會宣言にも、『黨は、現在に於いては勞働者と貧農との利益のために、勞働者を指導して民主主義の革命運動を援助し、勞働者と貧農及び小資産階級に依る民主主義の聯合戦線をつくらなければなら

い。』といつてゐるし、二全大會直後、同年八月杭州で開かれた中央委員全體會議でも、中國國民黨と聯合して、一組織とすることが決議され、右決議に基いて李大釗が、同郷の張繼の紹介で、個人として中國國民黨に入黨してゐる。ロシアに行つて、新訓練と訓令を受取つた陳獨秀が、國民黨參議、黨綱領修正委員になつたのも、たしかこの頃である。

——かくの如く國民黨と提携の傾向は、一九二二年初頭から動いて居り、すでに若干の實際行動に移つてゐたのであるが、三全大會に及んで終に左の宣言となつて現はれた。

中國國民黨は國民革命の中心勢力でなければならない。が、不幸にして從來の國民黨には二つの缺點があつた。一は外國の援助を以て中國の革命事業を成就しようとする依頼心であり、一は軍事的行動を以て革命の唯一手段と考へ、それに勢力を集中し、民衆への宣傳を輕視したことである。前者は國民の獨立自治の信念を失はしめ、國民黨の政治的指導地位を危殆ならしむるものであり、後者は國民の同情を失ひ、むしろその反抗を招く不利がある。故に吾人は、社會上の革命は須らく中國國民黨に集中して國民革命運動の實現を早からしめ、同時に國民黨をして、外力依頼と軍事萬能政策を拋棄せしめ、民衆宣傳政策に依つて國民革命指導者の地位を恢復せしめなければならない。中國共產黨は從來軍閥打倒、國際帝國主義打倒の標的に向つて國民革命を指導して來た。中國の政治經濟状態及び社會各階級の苦痛要求に鑑み、勞働者農民の利益を擁護し、それに對する宣傳と組

織と吾人の特殊の責任とし、彼等を引導して國民革命に参加せしめることが、國民革命成就の重要條件と思惟し、これを以て吾人の活動の中心的使命とする。

これすなはち國・共合作の公約である。爾後半載、中國共產黨はこの公約に従つて國民黨との提携工作をつづけ、一方コミンテルンからもマアリン、ヨッフエ等の來支して、直接國民黨に手を着くるあり、終に一九二四年一月の中國國民黨一全大會に於いて、兩黨の合作が成立した。

國・共兩黨の合作

國・共兩黨の合作を叙するに當つて、第一に考へなければならぬことは、合作が中共の自發的意思でなく、コミンテルンの命令に基くものであるといふ一事である。ではコミンテルンはどうして中共に合作を命じたか？ それを知るためには、レニンの支那觀を檢討しなければならぬ。

有名なロシア通布施勝治氏に據れば、レニンが植民地及び被壓迫民族に對するその政策を、最も明確に表明したのは、前後二回あつた。第一回は歐洲大戰中、彼の流浪當時、ボ

リシエヴィキの或幹部會に於いて、第二回はすでにソヴェト政權を掌握した後、すなはち一九二〇年のコミンテルン二全大會に於いてなされたものである。

第一回は原則的、理論的陳述に止まつたが、第二回では具體的、且つ實行的となつてゐる。すなはちレニンは、「植民地及び被壓迫民族に對する政策を講究するに當つては、先づ支配的帝國主義國、すなはち植民政策の主體國と、植民地及び被壓迫國、すなはち植民政策の目的國との間には、判然たる區別をつけなければならぬ。兩者に對するコミンテルンの政策は、全然別のものでなければならぬ。植民地及び被壓迫國に於いては、或期間少くとも革命の初期には、その國のブルジョア階級の帝國主義に對する反抗運動を扶けなければならぬ。何となれば、植民地及び被壓迫國に於いては、プロレタリア階級の勢力は微弱であり、眞先きに外國（壓迫國）の帝國主義に對して反抗するのはインテリゲンツィア及びブルジョアであるから、コミンテルン及びその國の共產黨はインテリゲンツィア及びブルジョアの民主主義革命を助け、これと共同戦線を張ることに依つて帝國主義國の勢力を滅殺し、一方労働者及び農民に對して、共產主義の運動、訓練をなし得るからである。」といふのである。更に分析すれば、プロレタリア階級の勢力微弱である間は、一時的にブ

ルヂョア・デモクラシイと提携して帝國主義を排除し、その間に實力を培ひ、ブルヂョア・デモクラシイが、その攻撃力をプロレタリアに向けて來たとき、猛然起つてこれに反抗すべきであるといふに歸する。

——これが支那革命に對するレニン及びコミンテルンの根本方針である。この方針を施すに當つて、コミンテルンに利用されるブルヂョア及びインテリゲンツィア階級が、孫文及び中國國民黨であることは説明までもない。

一九一一年の辛亥革命の結果に失望した孫文は、一九一三年の討袁革命失敗とともに日本に亡命し、再革命を目標として中華革命黨を創立、一九一五—一六年の第三革命には、大體傍觀し、一九一六年八月黎元洪に依つて國會復活を見てからも、孫及び中華革命黨は、一部の代表を國會に送つたのみであつたが、一九一七年六月黎元洪が張勳の強要に因つて國會を解散するや、國會議員の一部は護法を叫んで廣東に集合し、國會非常會議を開いて孫を元帥に擧げた。

孫は中華革命黨を中國國民黨と改稱し、任に就いたが、非常國會の多數派たる政學會に制せられ、一九一八年五月辭して上海に歸り、黨の整理に没頭し、黨の總章及び規約をつ

くり、政務會議を組織し、一九一九年本部を上海に、辦事處を廣東に設けた。

一九二〇年秋、廣東に於いて陸榮廷の大廣西主義失敗し、十一月陳炯明が廣西派驅逐の首功を以て省長に推され、廣東軍總司令として全省の軍政を總ぶることとなつたので、孫文は廣東に迎へられた。

一九二一年四月、非常國會は中華民國政府組織大綱を議決し、孫を非常總統に選舉した。孫は九月廣西を平定、北伐案を國會に提出して可決され、十一月廣西の桂林に大本營を組織した。このとき孫を大本營に訪問したのが、コミンテルン代表マアリンだつた。彼は同年七月の中共一全大會に出席した後、南下してここに現はれたのであつた。

この二人の會見が、孫文の聯俄政策の出發點となつたのであるが、効果は即座には現はれなかつた。彼はまだ武力に依る北伐を夢想してゐたからである。間もなく陳炯明の背叛が來た。それは先づ北伐反對となつて現はれたので、孫は一九二二年四月廣東に歸り、陳を免職して廣東軍を孫の直轄とし、今度は北伐軍を韶關から江西に入れ、李烈鈞の手で贛州を占領したが、六月十六日陳炯明終に公然と背叛し、孫これと對峙すること二箇月、八月十三日廣東を去つて上海に隠れた。

雌伏・沈思の孫文は、終に一つの反省に到達した。従来の運動が、主としてその基礎を小ブルジョア、知識階級に置き、將又自己の利害に依り反覆常なき既成軍閥の武力に倚賴して北伐を遂行しようとしたことの錯誤を痛感したのであつた。この反省の結果、これまでの革命理論及び方法を一變し、勞働者及び農民を主として民衆を組織し、全民衆的な組織に依つて國民革命を達することとし、その手段として、勞農組織に一隻眼を具し、すでに『人民のうちへ！』に手を着けてゐた中共と握手することの必要を悟つた。

革命方面に於いては、ロシア革命の展開過程に學び、既成軍閥に頼ることを全廢し、大衆を組織訓練して、黨軍を編成せねばならぬことを知つた。更に又支那に於ける資本主義の勃興が、外國資本に負ふところ多きに鑑み、帝國主義打倒のスローガンを掲げて、民衆の結束を堅めることの必要をも知つた。——以上の諸目的を達成するためには、ソヴェート・ロシアと提携することが、絶對的必要條件であることを確信するに至つた。

孫の心裡にかうした革命が行はれつつある時、一方コミンテルンの命で國民黨割込を策しつゝあつた共產黨員は、終に個人の資格を以て入黨を申込むに至つた。最初の入黨者が李大釗であつた。つづいて陳獨秀も國民黨參議兼黨綱修正委員となつた。これより先、國

民黨の内部に於いては、新時代に適應するため、黨組織改造の議が盛んとなり、着着その準備を整へてゐたが、ここに至つて陳獨秀等もこれに参加し、一九二二年十一月黨の新政策が可決され、一九二二年一月一日、この案に更に一段の調整を加へ、宣言及び政綱として發表された。これが中國國民黨としての政綱發表のはじめである。

時を同じうしてソヴェート・ロシアの代表ヨッフエが上海に現はれた。ソヴェート・ロシアの駐支代表は、一九二〇年ユウリンの來支にはじまり、一九二一年ユウリンの後をバイケスが繼いだが、一九二二年八月右二人以上の聲望と手腕とを有するヨッフエが北京に入り、前任者の方針を更始一新し、北方軍閥の尤たる馮玉祥との提携を策した。彼は次いでわが後藤新平男の招きに應じて日本に赴くべく、途を上海に取つたのである。さうしてそこで孫と會見の結果、一月二十日『孫文ヨッフエ共同宣言』が發表され、露支提携の明晰な發聲が、世人の耳目を驚かした。

宣言發表の翌月、一九二三年二月二十二日孫は廣東に歸つて大元帥となつた。さきに孫を逐うて廣東の主人翁となつた陳炯明が民衆を失し、許崇智等の北伐軍、張開儒等の雲南軍、並びに沈鴻英等の廣西軍のため包圍され、廣東から逐はれたからである。

一方聯俄工作としては、孫の當時最親信してゐた廖仲愷を、ヨッフエと同船熱海に向はしめ、約一箇月に亘り聯俄政策の細目に關し切實討議の後、三月廣東に歸つて孫に一切を報告した。

その結果黨軍編成案が確立され、八月その準備のため參軍長蔣介石がロシアに派遣された。これより先、六月、中共三全大會で國民黨との提携が可決された。十二月ザハリイ・マルコウイチ・ボロディンが廣東に來た。孫ヨッフエ會見の際ヨッフエから推薦されてゐたのである。

かくて聯俄、聯共、農工（工場及び自由労働者、農民並びに都市に於ける無産者の民衆組織に依る反資本主義、反帝國主義革命への展開）三大政策を基調とする目ざましい工作が、廖仲愷、ボロディンを中心として進められた。國・共兩黨の合作條件は今や完全に充足せられ、そのステージたる中國國民黨一全大會は、一九二四年一月十九日から二十八日まで舉行せられ、聯俄聯共政策採擇され、民族ブルジョアジイからプロレタリアート、農民に至るまでの、民族革命的諸階級の共通的要求を網羅した宣言及び政綱が發表され、民主主義革命聯合戦線がここに完成した。

共產黨員の中央委員に指名されたものとしては、李大釗、譚平山、于樹德（以上中執委）、林祖涵、毛澤東、瞿秋白、于方舟、韓麟符、張國燾（以上中執候委）の九人に過ぎぬが（全數の六分の一）、背後にボロディン、陳獨秀あり、聯俄氣分濃厚なるに加へ、廖仲愷等は行掛上共產系を近づけるし、又黨一切の規範をロシア共產黨に取る建前なので、共產系の中委員は、この方面の新知識であるから、數こそ少なければ、いづれも重用され、譚平山組織部長に、林祖涵農民部長に、毛澤東宣傳部長代理に（本任は汪精衛）擧げられ、事實上共產黨出の委員が、新國民黨のムウギング・スピリットとなつたことは争はれない事實であつた。

容共に因る國民黨の内訌

共產黨はかくのごとくにして國民黨内に相當大きい發言權を獲得し、主義の宣傳に努め、黨勢の擴張を謀つた。國民黨が或地方に支部を設立すれば、共產黨も同時にそれ自身の支部若くは區分部を設立するし、國民黨支部委員の任命は、必然的に共產黨支部役員の任命を伴ふといふ風だつた。

コミンテルンの援助も、國民黨改組後ますます積極的となり、軍費、軍需、武器の供給以外、軍事顧問ガレン將軍（ブリュウヘル）以下數十名の軍事及び政治顧問を派遣した。これらの顧問達は、一九二四年一月ロシアから歸國した蔣介石を援けて、五月、黃埔陸軍軍官學校を設立し、蔣を校長とし、汪精衛を黨代表とし、ロシア國軍の組織に倣つて、革命主義的軍事教育を施し、黨軍の中堅たるべき人材を養成した。

共產黨本來の面目である農民運動も、この時期に於いて着手せられた。農民部長林祖涵は、幾くもなく陳公博に取つて代られ（陳はこの時すでに共產黨員でない）たが、その秘書には共產黨切つての農民問題の權威たる羅綺園がこれに當り、彭湃、阮嘯仙が組織幹事となり、七月農民運動講習所（所長毛澤東）を設立し、農民運動指導者に對して共產主義的教育を施し、漸次農民協會の組織に進んだ。國民黨員も農民組織の初期には、これに參加することが出来たが、後にはこの方面は共產黨の中堅闘士を以て堅められ、國民黨員は閉め出しを喰つた形となつた。

斯く共產系が黨の大勢を支配し、諸般の施設がすべてロシア人顧問の方寸に出で、共產系及びこれを支持する廖仲愷、汪精衛等の領袖に依つて執り行はれるやうになつたので、

右派國民黨員張繼、謝持等（ともに中央監察委員）一派はこれを喜ばず、七月中央委員會に向つて共產黨彈劾案を提出した。これより先、一九二三年末、極右派馮自由一派は容共の絶對反對を唱へて、廣東を去つたが、ここに至り張繼等の右派も反共態度を明かにするに至つた。

孫文の北上に連れ、國民黨員も陸續北京に集まつたが、一九二五年一月中旬、極右派は國民黨海内外衛黨同志會を組織、右派は國民黨護黨同志駐京辦事處を設け、兩派は孫文の死の直前、三月八日國民黨同志俱樂部なる形に於いて結束し、盛んに共產系排撃を叫んだ。この策動に對し、汪精衛等の左派は、三月十日中央執行委員會の名義を以て、右同志俱樂部は黨と何等の關係なしと聲明し、馮自由等三百二十名の黨籍を削除した。

三月十二日孫文死去、ために内訌は一時中止されたが、久しからずして再燃し、左派及び共產系は、極右派及び右派を北京に置去りにし、結束して廣東に歸り、六月三日聯俄容共政策は、決して黨の共產化を意味するものでないと聲明し、同二十四日委員制に依る政府組織法を發布し、七月一日大本營を廢し、汪精衛、廖仲愷、胡漢民等十六名が政治委員となり、汪が委員長となつたが、共產系の黨内に於ける勢力ますます増大し、實權はボロ

デインと廖仲愷に歸したので、北京に於ける同志俱樂部は、(一) 共產黨員が黨内に在る間は、廣東政府一切の行動は無効であり、(二) 共產黨問題の解決するまで、中央執行委員會一切の職務は、同志俱樂部に於いて代理する旨決議した。——これが第一回分裂である。その後左右兩派の嫉視反目目を逐うて激しく、八月二十日左派中心人物廖仲愷暗殺、その結果意外にも左派に與みせる蔣介石のクーデターとなり、胡漢民監禁（後外遊す。）を見、九月二十日許崇智の失脚を見た。次いで十月二十三日北京西山に於いて有名な西山會議が開かれ、新右派の分裂となつた。新右派は又理論的右派と稱せられ、戴季陶がその理論的指導者である。

孫文死後間もなく一九二五年五月、彼は『孫文主義の哲學的基礎』といふ小冊子を出し、續いて『國民革命と中國國民黨』を刊行し、三民主義とマルキシズムとの差異及び不一致の點を指摘して、反共產の烽火を擧げた。新右派は彼を中心とし、一九二五年九月以來北京西山碧雪寺に會議し、十月二十三日四中全會の名を以て反共宣言を發表し、共產黨員の國民黨籍削除、政治委員會取消、ボロデイン解職、汪兆銘六箇月間黨籍削除を決議し、共產黨籍中央委員九名を除名した。この西山會議に列席したのは、林森、張繼、戴季陶、

居正等十餘名で、爾後彼等は西山派と呼ばれた。

西山會議派の行動に對し、廣東に於ける左派はこれを否認し、實際的政治手段として、二全大會を廣東に開くべく準備を進めてこれに成功し、一九二六年一月一日から十九日まで二全大會を舉行し、(一) 總理遺囑接受、(二) 一全大會所定政綱の完全繼承、(三) 黨規修正、(四) 宣言發布、(五) 規律問題（西山派に對する制裁）等を議し、最後に(六) 委員選舉を行つたが、右派及び新右派の参加なきため、共產系及び左派の進出著るしく、譚平山、李大釗、林祖涵、于樹德、毛澤東、韓麟符、路友于、高語罕、惲代英、彭澤民、江浩、謝晉、詹大悲等當選し、譚平山組織部長に、林祖涵農民部長に、彭澤民海外部長に、李大釗北京政治分會委員に擧げられた。右派も負けずに上海に二全大會を開き、林森、居正等を委員に擧げたが、それだけのことで繼續して活動出來ず、そのうちの或者は廣東に復歸し、大部分は政界の失意派として、復活の機會をねらふこととなつた。

國民黨内訌期間（一九二四年一月—一九二六年一月）に於いて、共產系は國民黨左派を支持したこと勿論であるが、大體に於いて内訌よりも黨勢擴張に力を注いだ。第一、一九二五年一月廣東に四全大會を開いた。第二、一九二五年二月、中社青年團三全大會開會、

團名を中國共產主義青年團と改稱した。第三、同年五月廣東に第二回全國勞働大會を開き、組合員五十四萬人を有する百六十五組合の代表二百七十八名出席、全國組合を統一して中華全國總工會を組織し、爾後プロフィンテルン及び中共指導下に動くこととなり、一九二〇年以來この方面に活躍した中國勞働組合書記部を解消した。

『全總』の創立は、支那勞働運動史上の創舉であるが、結成間もなき五月三十日、上海に有名な五・三〇事件が起り、黨及び全總のために好個の實驗場を現出し、勞働運動としては結局失敗したに拘はらず、反帝國主義運動としては恐るべき成功を告げ、支那社會革命史上に一新紀元を劃した。わが支那研究者の左翼は、この事件を以て支那革命の眞の出発點としてゐるが、それほど重大な事件であつた。さうしてこの上海ゼネ・ストを指導したのは、外ならぬ中共で、後一時『支那のスタアリン』と呼ばれた李立三が、はじめて頭角を露はしたのも、全くこの一役に於いてであつた。

北伐進展と國・共分離

一九二六年七月九日蔣介石は國民革命軍總司令に就任し第三次北伐の首途に就いた(第

一次は前述した。第二次北伐は一九二四年第二奉直戰當時で、蔣介石の學生軍、許崇智の廣東軍を以て江西方面を壓迫したのであつた)。さうして幾多の経緯はあつたが、結局一九二八年七月に北伐を完成した。僅か二箇年足らずで全支那を席捲したことは、民國史上の一大驚異である。

北方に残存せる封建軍閥に對して、國民黨がその掃蕩を志したことは自明の理であるが、孫文在世當時、二度まで企てて二度とも失敗した北伐が、どうして蔣介石に依つて完成されたか？ その成功の依つて來るところはどこに在るか？ 民主主義革命聯合戰線の完成、國民黨勢力の充實(客軍の掃蕩等)、北方に於ける馮玉祥、閻錫山兩軍の國民革命參加等を、その原因として算へなければならぬが、それにも増して重要なのは、國民革命軍の組織である。

客軍の跋扈に手を焼いた孫文は、最後に『既成軍隊の改造は絶望だ。革命軍は新造さるべき或物だ。』と考へつき、範をロシアに求めて蔣介石を派し、その結果黃埔軍官學校の設立となり、革命の花たる學生軍を産むに至つた。比較的純情な青年に、軍事教育は二の次ぎにして革命教育を注入し、一種の革命狂信者をつくり上げ、卒業後はこれを軍官として

各隊に配屬させ、或は宣傳員として各省に潜入させ、特に出來のいいものは、政治部員に任じて各隊のコミッサルとし、革命狂信者の網を全革命軍に張つたことが、北伐成功の重要な原因である。

コミッサル組織のことをもう少し説明すると、國民革命軍の各司令部本部には、黨代表と政治委員とが添置される。その任務は、武力をして革命及び革命政府に絶対的服従の實を擧げさせるために、武力を監視、鞭撻、激勵するに在る。黨代表は、上は總司令部、軍師から、下は連、排、班に配置され、政治委員は各隊の幹部と略同數で、軍隊と行動をとるにす外、兵卒の教育もやり、宣傳もやる。コミッサルには有力な黨員が任命される例で、總黨代表には汪精衛自づから、これに當つてゐたほどである。黨代表——政治委員——軍官學校出身の軍官、のトリオが相結んで鞏固な細胞網をなし、革命軍の『精神』を形づくつてゐる。革命の目的のためには、これ以上の組織はあるまい。この組織を外にしては、兵卒そのものは北方軍閥の私兵に比して、さまで優秀でないとは、軍事専門家の意見が一致してゐた。偉大なる組織！これこそはロシアの金、武器、知恵の三段援助中、知恵に相當する部分であり、この組織の樹立に際しては、ポロディン、ガレンが心血を注い

だところである。

かうした支那では前代未聞の組織を持つ國民革命軍の戦績は、果然目ざましいものがあり、出師後二箇月にして、孫文時代の北伐軍が、終に達し得なかつた長江の線を占領した。八箇月の後には、上海南京までも略取した。ところが、國・共兩黨の關係は、國民革命軍の武漢占領までは、ともかく平衡を保つてゐたが、しかし『合せ物は離れ物』の譬へに洩れず、一九二七年四月に至つて分離の傾向を顯著にし、七月、國・共終に分家した。分離の原因は複雑で、その徴候はすでは一九二六年三月頃から現はれてゐた。

遡つて説明する。一九二六年一月の二全大會で、汪精衛に次ぐ得票で中央執行委員に當選した蔣介石は、二月國民革命軍總監に任じ、軍事上の實權を掌握してしまつた。彼の思想上の立場は中央派とも稱すべく、右派、新右派ではないが、左派、極左派でもない。が、結局、共產派の願使に甘んずる男ではないので、共產派では今のうちに蔣を倒して、軍事の實權を横奪りたいといふ考へがあつたものと見え、三月二十日海軍局長李之龍（共產派）は、黃埔軍官學校に中山、寶璧二艦を廻し、不穩の舉動があつたので、前から共產派の一二幹部に不快の感を懷いてゐた蔣介石はこれを機會に李之龍を捕縛し、軍官學校の黨

代表高語罕（共產派、中委）等を監禁し、共產系糾察隊の武装を解除し、東山に在るロシア人顧問の邸宅を包圍した。これがいはゆる『中山艦事件』である。

事後調査に依つて共產派の陰謀ではないといふことになり、捕縛者はそれぞれ釋放された。この事件の真相は、今だに不明である。蔣は當時全然誤解であるといつてゐたが、後には共產派の陰謀だといつてゐるし、一方李之龍は、蔣が當時政權を握つてゐた汪精衛を逐ひ出す爲めに打つた芝居だといつてゐる。いづれにせよこの事件に因つて、汪精衛は佛國に亡命し、軍政兩權が蔣に歸した。一見小さい事件だが、蔣と共產派との關係を一變させた點に於いて注目の價值がある。蔣の方では極度に共產派を警戒するやうになり、共產派の方でも結局國民黨は國民黨、共產黨は共產黨だと悟るに至つた。

蔣と共產派との間には、この事件以來大きな溝が出来た。その現はれは蔣が五月二十五日の中央執行委員會に提出した黨務整理案で、（一）他黨員にして黨に加入せるものは、總理及び三民主義に對して懷疑批評を加ふるを得ず。（二）他黨にして黨に加入せる各該黨は、その加入黨員名簿を黨中執委主席に提出すべし。（三）他黨員にして黨の高級機關執委に任ずるものは、その總員の三分の一を超過するを得ず。（四）他黨員にして黨に加入せる

ものは、黨中央機關の部長たるを得ず。（五）黨に加入せる他黨員に對する各該黨所發の訓令は聯席會議の承認を要す。といつたやうな内容である。

蔣が共產派の黨内侵蝕を防がうとする用意は實に周到なもので、流石細胞侵入を以て唯一の能事とする共產派も、これに依つて一時活動を緩めざるを得なくなり、國民黨組織の最大動脈を握つてゐた組織部長譚平山も辭職した。共產黨は、あまりに勢威を振ふときは、却つて右派の逆襲を捲き起すべきを悟り、涙を飲んでこの案に服従した。これが蔣と共產派との間に出来た第二の溝である。

つづいて蔣は、新右派の戴季陶、邵元沖、葉楚傖等を登庸してますます右派的色彩を濃厚にし、ほぼ内部の統一が出来たところで北伐を主張したが、共產派はこれに反對した。その理由は現在國民政府内部の政情、實力及び革命意識等から見て、北伐の時期が到来したとは思はれぬ。むしろ今日は廣東の内政を整頓し、土匪を肅清し、革命根據地たる廣東を擁護すべきだといふに在つたが、實は軍の實權が蔣に握られ、共產黨軍の組織が完成してゐず、北伐もし成功せば、國民黨の勢力いよいよ増大すべきを恐れたからである。この底意を藏して、陳獨秀は黨外から北伐反對を唱へ、ボロディンもこれを支持したので、蔣



は極度に憤慨した。これが蔣と共産派の間に生じた第三の溝である。しかし北伐が大勢となり到底制し切れずと見ると、共産派はむしろこれを利用して黨勢の擴張を謀らうといふことに決意した。黨軍の未完成は氣懸りであるけれども、それはそれとし、むしろ積極的に農民運動（廣東、湖南、江西、湖北）及び労働運動（上海、漢口）に全力を注ぎ、一舉にして國民革命の領導權を握るに如かずと思惟するに至つた。かく黨の方針一變するとともに、黨員は踴躍して北伐軍の先頭に立ち、所在に農民運動及び労働運動を起して軍を導いた。その努力の一般を數字に求める。

	労働組合員	黨員	農民協會員
一九二五年	四五〇、〇〇〇	九九四	二〇〇、〇〇〇
一九二六年	一、二〇〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
一九二七年	二、八〇〇、〇〇〇	五七、九〇〇	九、八〇〇、〇〇〇

右の表を見て感ぜられるのは、農民組織の異常な發展であり、五・三〇事件が農民の響應を缺いたため失敗した點に鑑み、黨がいかに爾後農民運動に努力したかが窺はれる。しかもその農民運動の擴大深化に連れ、終にブルジョアジイとの衝突を來し、國・共分離を

見るに至つたのだが、それを叙するに先だち平面的に武漢（共産派、極左派及び左派）、南京（右派）兩政府對立までの經過を述べなければならぬ。

北伐進展し、共産黨勢増大するや、共産派は國民黨内に於いては總政治部の實權を握れる極左派と提携し、外は武漢地方の最大軍閥唐生智と握手し、このまま進めば、豫ねての希望である支那勞農政府樹立の段階も遠くないと思惟しはじめた。彼等は喜びのあまり有頂天となつた。さうして蔣一派の攻撃を開始し、先づ黨の元老張靜江を、昏庸老朽として排撃した。張が武力を以て廣東の共産黨支部を解散したからだ。次いで蔣の西山派（戴季陶等）及び舊官僚（王正廷、黃郛等）起用を攻撃し、更に國民政府の北遷問題に關し、蔣一派の南昌説を押し切つて武漢移轉を決議し（九月二十五日）た。これに對し右派は、中央黨部と國民政府を南昌に置き、武漢に外交、交通、財政三部を設けることを主張したが、妥協の結果一九二七年二月武漢政府の成立を見た。蔣派は暫らく屈し、上海南京地方攻略に専念し、別に生面を開かうとしたのである。

武漢政府成立の報は、コミンテルンを狂喜せしめた。コミンテルンの支那革命援助は、既述の通り熱心、親切であつたが、その効果に至つては大して期待をかけてゐなかつたら

しい。ところが五・三〇事件に於いて、上海労働者の示した奮闘振りは、コミンテルンの注目を惹いた。これは物になるわいといふ考へが、コミンテルンにも起つたらしい。しかし當時のコミンテルンは、西歐革命先行論者たるジノヴィエフの掌中に在つたので、支那労働者の活動には動かされながらも、それ以上積極的に出る考へは生じなかつたが、間もなくジノヴィエフ失脚、コミンテルンの實権が、西守東進論のスターリン一派に歸したので、コミンテルンの對支方針は、俄然積極的となつた。

それと相應じて支那國民革命が一大發展を遂げ、長江一帯を占領したので、彼等は先見の明を誇りつつ、十一月二十二日ブハーリン議長の下に第七次擴大幹部會議を開き、爾後十二月十六日まで、支那問題を主題とし、ブハーリン、ロイ（印度共產黨員）、譚平山等を中心として討論した結果、『國際共產黨執行委員會擴大會第七回會議對支決議事項』として發表さるるに至つた。

この十二月決議が中共に傳へられると、さなきだに思ひ上つた黨幹部は、かかる絶大の支援を得てますます興奮した。見よ、十二月決議は『支那革命は資本主義を倒し、社會主義を建設する一般的闘争の一部でなければならぬ。革命に依つて建設さるべき國家は、勞

働者、農民及びその他の被搾取階級の民主的獨裁制たるを要し、社會主義の政府をつくらねばならぬ。』となし、無産階級獨裁の社會主義國家を建設すべしと命じ、土地國有を慫慂してゐるのではないか！ 武漢派の行動が、その後ますます過激となつたのは、十二月決議の必然の結果である。

さうしてその第一の現はれは、一九二七年三月十一日武漢で開かれた中委全體會議で可決された國民黨組織の改造である。これに依つて國民革命軍總司令廢され、蔣は軍事委員の一人にされ、實権を剝奪された。同日舉行された委員改選に於いて、共產派及び左派が中樞を獨占した。常委九名中蔣派と目すべきは譚延闓及び蔣のみ、政治委員は右九名に加ふるに陳友仁等六名を以てしたものであるが、蔣派は依然譚、蔣二人。執行機關は組織部長汪精衛以下八人全部共產派と左派である。

これに對し蔣は恰も杭州攻撃中だったので、すぐには手段を講ずることは出来なかつたが、三月二十一日上海、二十二日南京占領、二十四日南京入城とともに、共產系軍隊に依つて有名な南京事件を惹起し、蔣の對外地位を極度に困難ならしめたので、蔣は共產派及び左派と決裂の決心を定めた。

恰かもこの時左派の總帥汪精衛が歸國したので、四月三日蔣・汪會見し、汪が或程度まで共産派を抑へる諒解を與へたので、蔣は四日黨權を汪に譲り、自分は北伐に専念する旨通電した。ところが汪は同夜陳獨秀と會見、五日兩人聯名で有名な共同宣言を發した。この宣言は蔣派を激怒させた。

黨の元老吳敬恒は、六日汪に向つて『これで見ると兩黨が今後の中國を共同治理するやうだが、眞意はどうか？ 統治權は國民黨に在つて共産黨にはない。聯俄容共はロシアと共産黨が國民革命に忠誠を盡す間だけの話で、ロシアと共産黨に中國を統治して呉れと頼んだのではない。一體君の眞意はどこに在るのだ？』と難詰し、汪は返答に窮し、『共産黨問題は、南京で純國民黨員を會同して解決したい。』と逃げ、同夜漢口に潜行した。

蔣派は堪忍袋の緒を切り、白崇禧を上海戒嚴司令とし、四月十二日上海に盤據してゐた共産派に對し、クーデターを敢行した。これが中共側でいふ『四・一二反動』である。つづいて十八日、武漢政府に對抗して南京に國民政府を樹立、吳敬恒提出の共産派懲罰案を可決し、徹底的に清黨することになつた。これに對し武漢政府は、十七日蔣の黨籍を削除して逮捕令を發した。ここに兩政府對立時代がはじまるのである。

四・一二反動の報に接し、コミンテルンは震駭した。そこで五月十八日から三十日まで中委會で討論した結果、いはゆる五月決議を發表し、今後の方針として農民運動の徹底を主張し、土地の沒收及び國有まで漕ぎつけること、中共がその領導權を握ることを決議した。この決議に基き六月初旬コミンテルンから、當時漢口滞在中の印度共産黨首領ロイに宛て、有名な農民武裝密電が發せられ、十五日ロイがこれを汪精衛に内示したことに因つて、武漢政府の反共産決定を見るに至つたのであるが、それは後述することとし、ここには、これまで叙述を怠つてゐた農民運動の展開を一瞥しよう。農民運動こそ、國・共分離の最重要な原因であるから。

國・共兩黨が農民運動に着眼したのは五・三〇事件以後であるが、一九二六年十月になると、中共中央はコミンテルン代表指導の下に、黨最初の農業綱領を制定した。これがコミンテルン十二月決議中に採擇され、その影響の下に、一九二七年三月の國民黨三中全會で、鄧演達提出の農民問題採擇、それに依つて土地委員會が出來た。これには譚平山、毛澤東（共産派）、鄧演達、徐謙（極左派）、顧孟餘（左派）等が委員として相當仕事をしたが、具體的分析の上に立つ農業綱領は、一九二七年四月二十七日から五月六日までの中共

五全大會で、はじめて制定せられたといつていい。

この大會で陳獨秀、譚平山等は右傾的意見を持ち、コミンテルン十二月決議の指摘せる、反革命者の土地沒收以上に進む必要なしとなし、根本的改革は北方攻略後、全國農民階級を闘争に誘引した後にすべしと主張し、『はじめに擴大、後に深化。』の標語を唱へ、これに對し羅綺園、彭湃等の中共左翼分子は小地主をも含む一切の土地收奪を主張したが、結局右傾派勝を制し、大地主のみの土地沒收を主眼とする綱領が作成せられた。

陳獨秀、譚平山、ボロディン、ロイ等は、國民黨左派との決裂を恐れ、農民闘争を組織し、革命勢力を強化することを考へず、日和見主義の過誤に陥つてゐる間に、湖南農民の一部は小地主を含めて土地沒收を實行してゐた。彼等は農業綱領に頓着せず、まつしぐらに直接行動に走つたのである。

ところが湖南での被害者中には、湖南派軍人の縁故者が多かつたので、彼等は一致して反共産の態度に出で、五月十八日唐生智部下の夏斗寅が、武昌附近で兵變を起し、廿一日夜、同じく唐の部下、長沙團長許克祥これに應じて起ち共産派を一掃した。これが『長沙馬夜事件』で、共産派は躍起となつて許の處罰を叫んだが、左派の牽制と、湖南派の武力

威壓で有耶無耶の間に葬られた。六月一日の政治委員會は、ボロディン、ガレン以下ロシア人顧問全部の解雇を決議した。ついで共産系の工會を解散し、勞資協調を目的とする右傾的工會組織に着手した。

コミンテルンは櫛の齒を引くやうな武漢白化の報に接して氣が氣でなく、六月初旬ロイに宛て、(一)土地國有即時實行、(二)中共黨員二萬、勞農五萬を武装せよといふ密電を發した。ボロディンはこれに基づき、秘密工作を進めてゐたが、支那事情に通ぜず、武漢白化の形勢に盲目で、左派の態度を認識しない印度人ロイは、六月十五日これを汪精衛に内示した。汪も終に目が覺めた。二十三日彼は國民革命の領導權は國民黨に在りとの宣言を發し、七月九日以後の中委擴大會議では、譚延闓とともに國・共分離を強硬に主張した。刻刻變化する情勢を知つて、コミンテルンは方針變更のやむなきに至り、七月中委會を開き、中共黨員の武漢政府示威退出を指令した(コミンテルン七月決議)。これを奉じて、七月十日頃から譚平山、蘇兆徵、向忠發等は武漢政府を退出し、中共中委(臨時政治局は張國燾、李維漢、李立三、周恩來、張太雷五人で組織)は十三日對局時宣言を發し、示威退出を試みた。

二十七日汪兆銘一派は反共宣言を發し、八月五日共產黨取締令を、八日譚平山、林祖涵、向忠發逮捕令を發するに及んで、國・共完全に分裂し、一九二四年一月以來の縁が切れた。一九二七年四月六日、張作霖のロシア大使館手入れに依つて逮捕刑死した李大釗が、個人の資格で國民黨に入黨した一九二二年八月から算ふれば、正に滿五年の間、國民黨内に在つて革命領導權を争つた中共は、ここに完全に敗北し、爾後潜行運動に移つた。

八・七會議から六全大會まで

中共成立の一九二〇年九月から、國共合作成立の一九二四年一月末までの三年三箇月を中共の雌伏時代とすれば、それから一九二七年七月の國共分離までの三年七箇月が昂揚時代に當る。昂揚時代終焉の後、黨は本來の面目に立ち歸り、一時機宜の策である民主主義革命聯合戦線から退ぞき純然たる共產革命の遂行を志してゐたから、これを甦生時代と稱して差支へない。さうしてその出發點となつたのが一九二七年八月七日の九江緊急會議、すなはち普通いはゆる八・七會議である。

武漢政府を退出した中共黨員は七月末南昌に集合し、賀龍、葉挺（ともに張發奎麾下）、

朱德（朱培德麾下）三軍を煽動し、三十一日南昌占領、八月一日革命委員會を組織したが（八・一南昌暴動）、張發奎、朱培德の討伐に會ひ、六日南昌を抛棄して、江西南部から廣東に出た。黨員は九江に集合し、コミンテルン新代表（ボロヂンとロイは、日和見主義の故を以て召喚。）ロミナーゼ指導下に緊急擴大會議を開き、日和見主義の克服と今後の方針樹立について協議した。

この會議は『コミンテルンの支持に基づき日和見主義の過誤を矯正したものであり、黨の歴史に於ける轉化の鍵であり、ボルシェヴィキ化の開始である。それは土地革命の中心スローガンを××し、プロレタリアート及び農民の反動的國民黨中央政權××の目標を支持し、武装暴動の全方針を決定し、黨員大衆が指導機關に於ける日和見主義的分子を一掃し、古き指導機關を變更する闘争開始の機會となつた。かくして黨を日和見主義の泥沼から救ひ上げ、新たな革命の大道を前進せしめた。』ものである。

出席者は瞿秋白、李立三、張國燾、向忠發、蘇兆徵、毛澤東、方志敏、鄧中夏等だといはれてゐる。さうしてそれまで陳獨秀の擔任してゐた中共總書記の職は、この會議に於いて瞿秋白に取つて代られた。

會議の決議に據り黨員は各地に潜入して勞農運動を煽動した。上海では黨中央の指令に據り、江蘇省委指導下に八月中旬から十二月にかけ、外支人經營企業に罷業を頻發せしめた。宜興、無錫、長沙等には、農民及び勞働者の暴動、罷業があり、農民運動方面では湖南に於ける毛澤東が最も優れた指導者であつた。秋の收穫を目指しての暴動なので、これを四省秋收暴動といふ。

しかしこれらの暴動は、結局失敗に終つたので、黨中央は十一月九日擴大會議を開き、政治決議、土地問題黨綱を決議し、右傾派譚平山を除名した。政治決議に於いて、はじめてソヴェート建設を呼號し、土地問題黨綱に於いて、はじめて小地主をも含む一切の土地所有權を否認したことは注目の價値がある。決議の趣旨は實行せられ、十一月十七日彭湃指導の下に、海陸豊ソヴェートが樹立せられ、翌年三月まで持ちこたへた。これが支那最初のソヴェートである。

つづいて十二月十一日有名な廣東コムミュン（廣州暴動又は廣暴）が勃發した。八・七會議後廣東の左傾勞働者は、黨南方局及び廣東省委（主席張太雷）指導下に、廣東の武力奪取を計畫してゐたが、十月武漢から歸還した張發奎軍が、十一月十七日廣東にクーデ

ターを斷行して李濟深を驅逐し、李の廣東奪回に備へるため多くの軍を戦線に送り、市内の防備手薄となつたに乘じ太雷は甘言を以て發奎に説き、發奎軍援助を條件として入獄中の罷工勞働者一萬二千、黨員七百を釋放させ（十二月四日）、準備整ふや、十二月十一日武装暴動を以て公安局を占領して工農聯合辦事處とし、引續き各機關を占領、十二月中央公園に工農兵大會を開き、ソヴェート委員として主席蘇兆徴、内務兼外交黃平、勞働周文雍、司法陳郁、經濟何來、土地彭湃、海陸軍張太雷、秘書長惲代英、工農紅軍總司令葉挺を選學し、ソヴェート政府を樹立したが、十三日李福林軍に撃破され、張太雷戦死、僅か五六百名が海陸豊に逃げただけで、全部武装解除、五千餘名銃殺された。ロシア領事館捜査の結果、背後にロシアがあつたことが判明、南京政府は十二月十五日ロシアと斷交した。

この『革命退潮期の殿戦』を最後の一闪光とし、黨は地底に没し去り、一九二八年上半期では、僅かに四月、朱德、毛澤東に依つて紅軍第四軍が、五月彭德懷の叛變に依つて第五軍が成立したくらいのことであつたが、コミンテルンは二月第九回執委プレナムを開き、同廿五日支那問題決議を採擇した。原案提出者はスターリン、ブハーリン、李立三、向忠發で、過去半載の經驗に照し、（一）勞農運動の並進を期し、（二）近き將來の革命高漲に

備へ、機會主義的闘争を避け、大衆獲得に全力を注ぎ、これをソヴェートに組織し、(三)ソヴェート區域では紅軍支隊組織を主務とすべしと述べてゐる。右決議の趣旨は、八月莫思科で開かれたコミンテルン六全大會で展開深化された。同時に中共六全大會、中共青年團五全大會も同じく莫思科で開かれた。

中共六全大會は、黨あつて以來最大規模の大會で、政治、組織、ソヴェート政治組織、宣傳、軍事、農民、職工、共產青年、婦女各決議案及び黨章を決議した。中心課題は、(一)八・七會議以後の革命の敗北及び闘争の經驗に基づき、右翼的及び極左的偏向を克服すること。(二)革命の一時退却時期を正しく評價し、新時期に於けるレニン主義的方针を確立すること。(三)眞に革命的な農業綱領を作成すること。の三つだったが、大會は熱烈な討論の末、完全にこの課題を解決し、根本任務として、(一)地主階級の排除、徹底的土地革命の實行。(二)帝國主義を驅逐して支那の統一を完成する。(三)武装暴動に依つて反革命資産階級たる國民黨政權を推翻し、ソヴェート制を建設する。の三つを、又政綱として次ぎの十項を決議した。

(一) 帝國主義打倒

- (二) 外資に依る銀行等一切の企業の沒收
- (三) 支那統一、民族自決權承認
- (四) 軍閥、國民黨政權打倒
- (五) ソヴェート制の建設
- (六) 八時間労働制、賃銀増加、失業者救済、社會保險實行
- (七) 一切の地主の土地沒收、耕地を農民へ
- (八) 兵士生活の改善、土地と職業を兵士へ
- (九) 一切の軍閥課税の廢止、統一累進税法實施
- (一〇) プロレタリアート及びソヴェート同盟との聯合

紅軍及びソヴェート起る

六全大會から一九三〇年五月まで、約二年間の中共の活動は紅軍の結成及びソヴェートの樹立に盡きる。南昌暴動に参加した賀龍、葉挺、朱德三軍は、嚴正な意味では紅軍といへない。新意識の下に結成された紅軍としては朱德、毛澤東の『工農紅軍第四軍』が最初のものである。郷里湘潭で農民暴動を指導した毛澤東は、農民軍組織の必要を痛感し三千

を組織して江西に入つたが、一方朱徳は、雲南軍軍長范石生の部下となり、一團長として、砵石鎮に駐屯してゐたが、廣暴後兵變を起し、湖南南部から江西南部に遊撃し、毛澤東と合し、有名な井崗山（江西、湖南の七縣に跨がる高山）に據つた。これが後に紅軍の主力として、世界的に知られた朱・毛軍である。

つづいて彭徳懷の第五軍、賀龍の第二軍、黃公略の第八軍、鄺繼勛の第六軍、許繼慎の第一軍、方志敏の獨立第一團等、概算十二軍一團、兵數七萬五千、銃器四五萬挺の紅軍が、一九三〇年四月頃まで、約二箇年間に成立した。

一方ソヴェートはどうかといふに、一九二七年十一月の擴大會議で、はじめてソヴェート建設が叫ばれ、同月十七日海陸豊ソヴェートが成立し、三日天下ではあつたが、同十二日に廣東ソヴェートが出来た。一九二八年二月のコミンテルン決議、同八月の六全大會決議、一九二九年七月の二中全會議、いづれもソヴェート建設の急務を叫んでゐる。

紅軍の發展、その游撃下に、縣以下のソヴェートの建設せられるもの多く、その大なるものとしては、江西全省ソヴェート（江西東固）、閩西ソヴェート（福建龍巖）、湘鄂革命委員會（湖南平江）、東江革命委員會（廣東海豐）四政府をはじめ、相當基礎鞏固なものも

少くないので、一九三〇年五月五日、これら政權及びソヴェート區域の聯絡のため、上海郊外に於いて『中國ソヴェート區域代表大會』（ソ區大會と略稱）を開いた。五日から六日間豫備會議、同月二十日日本會議を開き、中共、各地工會、革命團體、紅軍、ソヴェート區域からの代表四十九名出席、（一）全國の政治形勢及びソヴェート區域の任務（大會宣言）、（二）土地暫行法、（三）紅軍及び武裝農民擴大計畫案、（四）ソヴェート組織法、（五）告農民書、（六）勞働保護法、（七）告全國工人書、（八）告勞働婦人青年書、（九）東方被壓迫民族革命援助決議案を採擇した。

紅軍及びソヴェートに關する工作を深化する一方、黨は一九二七年十一月の擴大會議の趣旨を繼承して、黨内に於ける日和見主義者、トロツキースト、解消派である陳獨秀一派を除名した（一九二九年十一月）。彼と一緒に除名された連中には、彭述之、高語罕、劉仁靜等がある。

除名理由は、『一九二五——七年の革命高漲期に於ける機會主義的指導の錯誤を認識する誠意なく、その必然の結果として、尙も過去の錯誤的コースを繼續しようとした。コミンテルンの意見に不満を懷き、莫思科に行つて訓練を受けることを欲しない。資産階級の矛

盾はなくなつたとか、革命は衰落しつつあるとか主張し、合法的手段の採用を支持し、國民會議召集を以て眼前の一般的スローガンとし、これを以て國民政府打倒、ソヴェート建設のスローガンに代替しようとした。』といふに在るが、要するに陳一派がコミンテルンの命を奉ぜず、トロツキーに共鳴し、コミンテルンの直接行動政策に反対したからである。彼等は一九二七年五月のコミンテルン決議で激しく叱責せられて以來、ほとんど黨外に抛り出され、八・七會議以後一切の黨の會議に出席を許されず、如何なる任務をも與へられず、出て行けがしの待遇を受け、譚平山は除名される。陳は不平の持つて行きやうがないので、度度中央に警告的意見書を突きつけ、コミンテルン・コースを攻撃した。これが幹部派（總書記向忠發以下李立三、周恩來等）をして除名處分に出でしめた所以である。これに對し陳獨秀は、一九二九年十二月十日『告全黨同志書』を、陳、彭述之等八十一名は、同十五日附で『宣言』を發表し、漸やく『解消派』の結成に進んだ。その運命は後に説述する機會もあらう。

李立三路線の問題

一九三〇年五月のソ區大會（前述）から、一九三一年八月頃までの間の最大特徴は、六全大會後黨の實權を掌握した李立三の政策、いはゆる『李立三コース』が、一九三〇年七月の長沙占領に於いて、その最昂揚期に達し、しかも長沙コムミュニンの失敗が彼の責任となり、コミンテルンの叱責を惹起し、一九三〇年十一月から、一九三一年一月にかけて、終にその清算を見るに至つたこと、これである。

八・七會議後、黨の實權は一時瞿秋白に歸したが、廣東コムミュニン失敗後は、李立三の勢力が増加し、一九二八年八月の六全大會で、向忠發（李立三のロポット）が罷に代つて總書記となり、その下に李立三（宣傳部長）、周恩來（組織部長、後軍事部長に轉）、李維漢、劉少奇、羅綺園等がゐたが、實權は李立三に歸してゐた。

一方毛澤東を中心とする紅軍及びソヴェート工作意想外に進捗し、黨は廣東コムミュニン以來の革命退潮期から、漸次高漲期に進みつつあるとの幻想が李立三の腦裏に描かれ、得意時代にありがちな思ひあがりから、一九三〇年初頭以來、盛んに機會到來を叫んだ。ソ區大會の成功は、更に彼を有頂天ならしめた。大會の翌月、一九三〇年六月十一日、彼は中央政治局を指導して、『黨の現下の政治的任務に關する決議』を採擇させた。有名な

『新的革命高潮與一省或幾省的首先勝利』といふ名前で永久に記憶される決議である。革命軍事委員會主席毛澤東は、朱德、彭德懷等十五委員を率ゐて連名通電を發してこれに響應し、軍閥混戦を一擧に革命戦争に變ぜしむべく、長沙及び武漢占領を企圖した。

六月末、湖南省政府主席何鍵は、山西軍攻撃のため軍の一部を山東に派遣し（當時は閻馮の蒋介石反對戦争中）、省内警備手薄となつたので、第十五師長危宿鐘を平劉岳勳匪總指揮に任じ、第十九師を省南部に、第十六師を西南部に、第三十一師を西北部（紅軍第二軍賀龍の游擊區域）に、第十五師を東北部（紅軍第五軍彭德懷の游擊區域）に派遣した。ところが危宿鐘は七月二十一日平江で彭德懷と戦つて大敗したので、彭は得たりと第五軍及び黃公略の第八軍、並に李燦等の軍約三萬を率ゐて長沙に進撃し、二十七日夕便衣隊を放つて總指揮部を襲ひ、同九時長沙を占領、何鍵は身を以て遁れた。

二十八日紅軍第五軍彭德懷、政治委員鄧代遠、第八軍長黃公略、政治委員鄧乾元及び李燦、何長工の名で湖南全省ソヴェート樹立等の十スローガンを掲げ、李立三を主席とする長沙ソヴェート政府を樹立し、土地法と勞働法を發布した。然るに何鍵はその後各方面の援軍を得て奪回を策し、八月五日湘江強行渡河に成功し、同日終に長沙を恢復した。長沙

ソヴェート政府は、かくて僅か十日で倒壊した。

長沙コムミュニンの失敗は、必然の結果として李立三路線に影響した。四月頃から黨内の一部（陳紹禹、秦邦憲等のロシア留學生派、即ち上海駐在コムメンテルン代表ミフの系統）に李立三コースに對する反對論があり、六月十一日の政治局會議が、李の指導下に前記の歴史的決議を採擇するや、陳は猛然これに反對したが、長沙コムミュニン失敗するや、彼等はますますその勢を盛んにした。

李立三、ミフ兩派の争ひは、結局勞働者出身の首領に對するインテリの反抗だが、それに最後の決裁を下し得るものは、コムメンテルンの外にはないので、周恩來が最近の形勢報告のために莫斯科に行くと、それより前にコムメンテルンはミフから報告を得て真相を知つて居り、駐露代表瞿秋白を周につけて歸國させ、三中全會を開いて李立三コース及びその工作成績の審査を命じた。

三中全會は九月下旬廬山で開かれ、政治情勢と黨の全任務に關する決議を採擇し、李立三路線に對して多少の批判と解剖とを試みたが、この場合最大の發言權を握つてゐる瞿の瞿秋白が調和的態度に出でたため、且又中委の大部分が李派であるので、ミフ派の反對理

論は一蹴された。ミフはこの成行きを快しとせず、陳紹禹等を援助して依然反對運動をつづけ、十月一日ミフ派の沈澤民は、三中全會決議を不正確だとする提案を中央工作人員會議に提出したが、それは向忠發、周恩來等に握りつぶされた。

そのうちに詳しい報告がミフから届いたと見え、十一月十六日着でコミンテルン來翰が李立三コースの誤謬を指摘し、黨の任務として、(一)即時、團結ある真正の勞農紅軍を訓練編成すること。(二)即時鞏固にして工作能力あるソヴェート政府を建設すること。(三)ボリシエヴィキ主義の下にソヴェート區域の大衆を組織すること。(四)非ソヴェート區域に於いては、大衆の政治的、經濟的闘争の組織に努力すること。(五)帝國主義者間の矛盾を利用し、反革命との聯絡を微弱ならしむること。黨の或程度に發展するまで、勝敗を決する底の衝突は避けるが、それまでに反帝任務を徹底的に宣傳すること。を指令するに及んで、勝利はミフ派の上に来た。

十一月二十五日の政治局決議はこの指令服従を決議し、李立三は政治局から退いた。しかし政治局は尙少なからず李立三コースを辯明し、從來の方針を急轉換する必要なしとしたので、ミフ派の沈澤民等は四中全會を召集し、新方針を決定すべしと攻め立てた。政治

局もこれに屈し、十二月二十三日附で、四中全會召集を宣言した。

全會は一九三一年一月八日上海に開會、李はその誤謬を承認する聲明書を寄せ(間もなく駐露代表團の一員として露都に去つた)、李立三コースの誤謬は糾正され、コミンテルン・コースが謳歌された。全會後瞿秋白、李維漢等責任の地位から去り、向忠發、周恩來、陳紹禹、沈澤民等を以て新幹部を形成したが、李派の潜勢力は消滅せず項英、何孟雄、羅章龍(全總主席)等起つて陳紹禹に反抗し内訌一層擴大したが、二月羅章龍一派七名除名、六月二十一日總書記向忠發逮捕銃殺されるとともに、陳紹禹がそれを繼任、組織部長張聞天、軍事部長周恩來、宣傳部長沈澤民、婦女部長孟慶樹、政治局書記秦邦憲等の顔ぶれで新中央が組織され、ミフ派が終に天下を取つた。これが中華ソヴェート第一次全國代表大會(以下中蘇大會或は一蘇大會と略稱する)召集前に於ける中共の黨情である。

中蘇臨時政府の成立

一九三一年十一月七日、江西ソヴェート區の中心なる瑞金に於いて、一蘇大會が開かれ、二十日まで繼續、憲法、勞働法、土地法等の決議を採擇し、中華ソヴェート共和國臨時中

中央政府（以下中蘇臨時政府或は中蘇政府と略稱する）を樹立した。黨成立以來滿十一年にして、はじめて中央政府を樹立し得たわけで、黨の歴史に於いて、六全大會と併稱するに足るエポック・メイキングの出来事である。

一蘇大會は久しい以前から準備されてゐた。準備委員會が黨中央指導下に成立したのが一九三〇年秋。事務所を上海共同租界三馬路（漢口路）中山旅舍内に設けてゐたが、工部局警察に探知され、一九三一年一月多數の警官に踏み込まれ、一切の文書押収、選出済みとなつてゐた大會代表數名、事務員全部銃殺された。

中央は二月七日の二・七紀念日に上海で大會を開く心算だつたのだが、事務所手入れで無期延期、一月八日の四中全會は上海では開會覺束なしと見、江西ソ区内で開くに決し、臨時政府準備委員會を組織し、中央政治局委員項英を主席に任命、江西に潜行させた。

同年秋、陳紹禹、周恩來、張國燾等瑞金に入り、十月二十五日までに代表齊集、十一月七日からいよいよ開會の運びとなつた。

江西中央區、福建西部區、河南安徽省境區、湖南江西省境區、湖南湖北西部省境區、海南島及び紅軍代表並びに全總、海員代表等二百九十名出席、七日朝紅軍檢閱午後開會主席

團三十七人、名譽主席團四人を選舉し、議事に入り、（一）憲法、（二）勞働法、（三）土地法、（四）經濟政策決議、（五）紅軍決議、（六）國境内少數民族に關する決議、（七）工農検査決議、（八）政治決議、（九）對外宣言、（一〇）對時局宣言、（一一）告工人及勤勞大衆書、（一二）全支革命團體への通電、（一三）全國紅軍兵士への通電、（一四）全世界無産階級への通電、（一五）米國勞働者への通電を採擇した。

中央執行委員は毛澤東（主席）、項英、張國燾（副主席）以下六十一人當選、十一月二十七日第一回中執委會を開き、人民委員會を組織し、毛澤東を主席、項英、張國燾を副主席、王稼嚮を外交、張鼎丞を土地、瞿秋白を教育、周以粟を内務、張國燾を司法、項英を勞働、朱德を軍事、鄧子恢を財政各人民委員に、何叔衡を工農監査委員長に、鄧發を國家政治保衛局長に任じた。

一九三二年に於ける紅軍の活動及びその討伐

中蘇政府の成立は、中共史上劃期的出来事だが、これより先、一九三一年九月二十日附黨中央軍事指令の趣旨を遵奉して、各ソヴェート區間の聯撃を圖りつつあつた紅軍はこの

精神的支援を得て更にその活動を強化し、一九三二年初頭に於いては、左のごとき廣大な地域を、ソヴェート區として掩有するに至つた。

- (一) 中央區 赤色首都瑞金を中心とする江西東南部地域で、江西の瑞金、石城、寧都、會昌を包んで尋鄔、安遠、信豐、南康、雩都、興國、樂安、臨川、黎川、福建の建寧、清流、連城、汀州、武平、上杭の各縣に及ぶ。いはゆる朱・毛軍の遊撃區である。
- (二) 贛湘區 江西西南部地域で、江西の寧岡、遂川、上猶、崇義、湖南の汝城、桂東各縣を包含する。彭德懷・李天柱軍の遊撃區域である。
- (三) 贛東北區 江西東北部地域で、江西、浙江、福建、安徽四省に跨がる。江西の橫峰、弋陽、上饒、貴溪、德興、餘江、萬年、樂平、玉山、鉛山、福建の崇安、浙江の常山、安徽の婺源を包含する。方志敏・邵式平・周建屏軍の遊撃區域である。
- (四) 鄂豫皖區 湖北東部地域(鄂東區)で、江西中央區に次ぐ大ソヴェート區である。安徽の霍邱、六安、舒城、霍山、英山、湖北の廣濟、黃坡、花園、廣水、羅田、麻城、黃安、河南の羅山、光山、潢川、固始、商城一帯を含む。鄭繼勛・徐向前軍の遊撃區域である。
- (五) 湘鄂西區 湖北中部地(鄂中區)で、洪湖、沔陽、潛江、岳口、漢川、天門、京山、鍾祥、荊門、沙洋、監利を含む。賀龍、段德昌軍の遊撃區域である。

(六) 鄂南區 湖北東南部地域で、陽新、通山、崇陽、通城、蒲圻、咸寧、大冶地方を含む。孔荷寵軍の遊撃區域である。

(七) 鄂西區 湖北西部地域で、巴東、建始、鶴峯、長陽地方を含む。王炳南軍の遊撃區域である。

以上はその重なるものを擧げたので、この外まだ小ソヴェート區は澤山ある。

各ソ區を遊撃する紅軍の兵力に關しては、種種の情報があつて、適從に苦しむが、鄭繼勛軍八萬、朱德・彭德懷軍四萬、賀龍軍、李明瑞(天柱?)軍各一萬、孔荷寵軍六千、方志敏軍五千として、主力軍だけで十五萬一千に及ぶとすれば、『チャイナ・フォーラム誌』一九三二年五月號)誇張していふとき三十餘萬と號するのは、支那式に考ふれば當然だし、少くも二十萬とはいへるだらう。六大赤區(小赤區は暫く措く)二十萬紅軍、さうして滿洲事變のために、政府軍の圍剿は不可能に近い。正に黨及び軍に取つての好機である。

ここに於いて黨中央は、一月軍事決議をなし(一)ソヴェート革命の客觀的情勢は、ますます成熟しつつある。(二)過去に於ける『大都市不進出』の政策を改めて、政治的中心都市の占領を期しなければならぬ。(三)各ソヴェート區を聯繫して一丸となすべし。と命じたが、これこそ一九三二年に於ける黨及び軍を律する根本的方針であつた。

江西中央區に盤據する紅軍は、一・九軍事決議に接して先づ行動を起した。小手調べに、一月十六日會昌を占領し、二月二十三日には福建に侵入し、武平を占領した。ここに於いて第一方面軍を組織し、革命軍事委員會主席朱德が總司令となり、第一軍總指揮林彪、第五軍團總指揮董振堂、第十二軍長羅炳輝、その他獨立第三師等、五萬餘を率ゐて福建入りを決行した。

四月以後、軍の行動はいよいよ活潑となり、十四日第四十九師長張貞を逐うて龍巖を占領した。かつて閩西ソヴェート政府のあつたところである。つづいて十八日には長驅して南靖龍山を占領し、十九日終に漳州を占領し、ここに閩南ソヴェート政府を樹立し、毛澤東を主席に任命した。軍は引きつゞき漳州附近の掃蕩に従事し、長泰、安溪、石碼、漳浦、楊郷、石美を四日二十五日頃までに占領し、厦門包圍の形勢となつた。

南京政府は形勢重大と見、四月十九日軍政部長何應欽を贛粵閩邊區剿匪總司令に、廣東軍總司令陳濟棠を同副司令に任じ、更に五月二十五日上海事件で勇名を揚げた十九路軍の福建移駐を命じ、その總指揮蔣光鼐を駐閩綏靖公署主任にした。

すると紅軍は皮肉にも、『十九路軍の上海に於ける抗日闘争に敬意を表し、且つ軍を以て

廣東に侵入するため自動的に撤退を開始』する旨を聲明し、五月二十八日以来、一部は詔安に入り、大部隊は龍巖に集結した。十九路軍は七月福建移駐完了、二十六日蔡廷鍇を同軍總指揮兼駐閩綏靖公署主任代理に任命、八月上旬龍巖を恢復、一應福建全省を肅清した。福建を去つた紅軍は、六萬の兵を以て廣東に侵入した。總司令朱德、參謀長葉劍英の下に、彭德懷、林彪、董振堂三總指揮あり、六月中旬行動を起し、有名な梅嶺にさしかかつた。廣東側で防戦に當つたのは、第一軍長余漢謀で、三月から八月まで、六ヶ月に亘つて江西南部に戦ひ、大小六七十戦を経過し、ことに七月一杯は、紅軍主力と大いに南雄に戦ひ、終にこれを撃退した。七月三十一日江西信豐が廣東軍の手に入り、紅軍はもとの古巢に逐ひ込まれてしまつた。四月十四日の龍巖占領から七月三十一日の信豐陥落まで、三ヶ月半に亘つて福建、廣東兩省を闊がした紅軍は、かくて全幅的に失敗した。

轉じて武漢方面を見る。五月二十二日蔣介石鄂豫皖剿匪總司令に、李濟深副司令に任命、蔣は六月九日江西廬山に着いた。これが第四次討伐の出發點である。

前三次の討伐を簡單に回顧する。第一次討伐は、一九三〇年十一月から一九三一年一月まで、第二次討伐は一九三一年三月から五月まで、第三次討伐は同年七月から九月まで行

はれたが、いづれも成功とは稱しがたく、ただ江西方面に於いて、若干の勝利が獲られたのみで、紅軍蔓延の勢を多少阻止し得たにとどまり、致命的打撃を與へ得なかつたに加へて、一九三一年九月滿洲事變の勃發に因つて討伐を中止し、重なるに一九三二年一月の上海事件を以てし、紅軍に八ヶ月の休養期間を與へたために、赤化の勢燎原の火のごとく、本項冒頭に記したやうな廣大な赤區を形成せしめるに至つた。就中蔣をして憂慮せしめたのは、鄂東、鄂中、鄂南三赤區に依つて、中支の樞紐たる武漢が半永久的に包圍されたことである。

蔣は驟然として起ち、總司令に就任、六月十二日から十七日まで剿匪會議を廬山に開き、二十七日九江發二十八日漢口着、三十日左のごとく部署を決定した。

中路總指揮	蔣介石	副	劉峙
左路同	何成濬	副	徐源泉
右路同	李濟深	副	王均

七月からいよいよ政撃開始、八十一師、二十九旅、三十九團、兵力六十三萬以上といふ大掛りである。さうして十月中旬までに、鄂東、鄂中、鄂南三區を一先づ肅清した。その

經過は左のごとくである。

- (一) 鄂中區 すなはち賀龍軍に對しては、七月十五日總攻撃が開始され、八月下旬この區の總根據地である洪湖を包圍、九月三四日頃洪湖周圍の要害を取り、同八日洪湖を占領した。
- (二) 鄂東區 すなはち鄺繼助、徐向前軍に對しては、七月上旬總攻撃開始、十二日霍邱恢復、八月十日河口鎮、十三日六安奪回、つづいて七里坪克復、九月九日新集恢復、十四日河南商城奪回、二十日根據地金家寨を收復した。
- (三) 鄂南區 すなはち孔荷龍軍に對しては、五月頃から攻撃開始、九月中旬三溪口克復、十月初旬根據地龍港、燕厦を收復した。

右三區で討ち洩らされた紅軍の行方を探ると、鄂豫皖區の鄺繼助は、失敗の責任を問はれて軍權を解かれ、徐向前が代つて統率者となり、十月六日湖北黃岡から黃陂、中旬廣水、隨縣、棗陽、河南の新野、鄧縣を経て二十八日浙川、十一月初旬陝西南南、龍駒寨を経て十六日商縣に入り、十二月上旬まで陝南各地を荒した。十一月二十四日には、西安南方五十支里の子南鎮を占領したりなどした。十一月下旬柞水、十二月五日頃佛坪、九日漢中を過ぎて四川境に入り、二十六日頃南江、通江、萬源、綏定に入り、すぐに巴中を占領した。

この游撃線一千二百哩、さうして終に川陝ソヴェート區を打開し來つたのである。

湘鄂西區の賀龍は殘軍を率ゐて洪湖を出發し、京山、鍾祥、隨縣、棗陽から河南に入り、桐柏、嵩縣に長驅し、陝西龍駒寨に南下、十二月中旬四川巫溪から渡河、廿二日頃湖北巴東に着いた。ここ一帯は紅軍教導師長王炳南の游撃區域である。二十八日賀龍は五峯に入り、一九三二年一月十三日湖南桑植を占領した。ここは彼の産れ故都である。鄂南區を立ち退いた孔荷龍軍は、江西の修水、銅鼓一帯に入り、贛鄂湘區を形成した。

紅軍の活躍を外にして、黨そのものに就いて記すべきこと少なく、僅かに解消派首領陳獨秀、彭述之等の就縛（十月十五日）、有力黨員黃平の就縛轉向、徐錫根、余飛、胡均鶴等の轉向、黨中央の浦鹽移轉（一時）、上海事件に際し、對日宣戰を布告し（四月二十六日）、リットン報告反對を呼號したくらのことである。總書記は依然陳紹禹であつたが、政治局書記秦邦憲に實權が移り、陳は莫思料に代表として行き、秦が總書記を代理してゐたとも傳へられた。

第五次討伐の第一年（一九三三年に於ける紅軍）

武漢を半永久的に包圍してゐた三大ソヴェート區の潰滅に因つて、一九三三年初頭に於ける赤區及び紅軍は、相當の苦境に立たされてゐた。一九三二年五月、第四次討伐開始直前の、赤區、紅軍の極盛時代を距ること、僅かに半歳餘ではあるが、全く隔世の感があつた。徐向前は四川東部に追ひ込まれ、賀龍は湖北、湖南極西部の古巢に逐ひ込まれ、孔荷龍は江西北部に遁れ、今や彼等の頼みとするところは、江西四赤區即ち中央區、東北區、贛湘區、贛鄂湘區あるのみ。これを最後の根據地として、蔣介石の第五次討伐に對抗を餘儀なくされたのである。

必然彼等は機先戦法に出で、廣東、湖南の兩フロントに守勢を取り、江西北部福建西北部に向つて主力を集中し、決死の奮闘を試みた。北路（江西北部）の要衝たる金谿のごときは、六回の争奪を見たといふのだから、その激烈さが想像される。

かかる紅軍の奮戦に對し、蔣介石は三十萬以上の大軍を動かし、宋子文の税警團までも繰出し、經濟封鎖、公路政策（自動車路構築）、碉堡政策（堡壘の構築）を併用しつつ、チリヂリに押しして行つた。一方剿匪事業の協力者たる廣東、湖南との聯絡も割合ひにうまく行き、年末までに十三縣を恢復した。江西四赤區の五分の一乃至四分の一に當る。

しかし剿匪協力者の一たる福建に、李濟深、陳銘樞等の革命起り、紅軍と妥協して反蔣の旗を掲げ、經濟封鎖の底を破つてしまつた。幸ひにしてその根基堅からず、二ヶ月足らずで潰滅し去つたからよかつたもの、もしさうでなかつたならば、由由しい大事となるところであつた。

第五次討伐目標の江西（毛澤東、朱德、彭德懷、方志敏、孔荷寵）では、かく多少の成功を見たけれども、その他の方面では、國民政府の苦痛の種が一層多くなつた。徐向前の川陝區（徐、張國燾、陳昌浩）が、二縣から十數縣に成長したのを筆頭に、賀龍の湘鄂西區（賀、夏曦）が強化され、陝甘區（紅第二十六軍）が創成され、鄂豫皖區（吳煥先、沈澤民）も再建された。差引き江西區で失つたところを、川陝區と湘鄂西區で取り返し、陝甘區、鄂豫皖區だけ儲け物をしたといふ勘定になる。ただ黨の中心活動地たる上海（陳紹禹、秦邦憲）では、流石に國民政府の壓力よく延び、黨中央をして雌伏を餘儀なくさせたが、それでさへ反戰・反ファシスト會議のやうな軒然たる大波を湧起せしめたのである。蔣介石の苦衷察すべく、『匪あれば我なし、我あれば匪なし。』と獨語しつつ、第五次討伐の第一年を送つたのである。

細説に入る。江西四區に對しては、蔣自づから江西北路を督し、南昌に坐鎮し、撫州を前敵總根據地として紅軍の北を壓し、東路福建は蔡廷鍇を總帥とし、南路廣東は陳濟棠を代表せる余漢謀大庾に駐し、西路湖南は何鍵總帥として萍鄉に駐し、四面圍攻の方策に出た。

これに對し紅軍側は、南路に對しては贛粵軍區總指揮第二十軍長陳毅をして守勢を取らしめ、西路に對しても消極的で、時時平江、瀏陽を犯したくらのことで、この方面の總帥たる孔荷寵これに副たる蔡會文、蕭克、及び贛湘區の李天柱は、鄂南の張燾、葉金波との聯絡に重きを置き、時に九江を目標として武寧、瑞昌に出で、時に南昌を目標として新淦、樟樹鎮、豐城を衝く等、大體に於いて北に向つて身構へしてゐたものごとくである。

朱德、林彪、彭德懷、董振堂、羅炳輝等の主力軍は、江西北路に於いては金谿、潯陽、南城、宜黄を、福建北部に於いては光澤、邵武、泰寧、建寧を、南部に於いては寧化、清流、連城を目標とし、屢次延平、順昌、將樂、沙縣方面に進出した。贛東北區の方志敏、邵式平、周建屏等は、主力軍と聯絡する外、時に浙江西部に游撃した。惡戰苦闘の一年間を経て、中央區は年初の二十五縣から十九縣に、東北區は七縣から六縣に、贛鄂湘區は十

縣から七縣に、贛湘區は六縣から三縣に、四區總計に於いて四十八縣から三十五縣に減じ、差引き十三縣が政府軍に恢復された勘定になる。

湘鄂西區に於いては賀龍が第二方面軍總司令、夏曦が總政委でソ區主席を兼ね、第七師長廬東生、第八師長賀英の陣容で、最初洪湖の恢復を志し、孫大志軍を派遣したりしたが、後河岸を變へて四川の徐向前との聯絡を取りにかかった。即ち酉陽、黔江から利川、石碇に出で、終には長江對岸の雲陽にまで出沒したが、結局政府軍（湘鄂邊區剿匪軍總司令徐源泉の下に、二師三旅一隊がある）に追ひ返へされた。ソ區の範圍は年初の七縣から年末の十一縣に増加した。

徐向前の川陝區の成立したのは、一九三三年の一月中旬であつた。このときの勢圍は僅かに通江、南江の二縣であつたが、總指揮徐向前、ソ區主席張國燾、總政委陳昌浩、第六軍長何畏、第二十五軍長王樹聲等の奮闘に依つて、年末には十三縣を包擁する大ソ區となつた。一月から二月までは、通江、巴中、南江三縣の根據を堅めるのに費され、三月から五月までは、田頌堯軍に壓迫され、一時三根據地全部を失つたが、六月四日までに右を恢復して田軍をノックアウトしたのみならず、十月上旬までに廣元、儀隴等の七縣を取り、

嘉陵江以東を赤化した。ついで、黨中央から『由巴峽穿巫峽』の指令が達し、賀龍軍の北上に應じ、徐軍も南下して劉存厚を衝き、十月二十一日までに萬源等の五縣を取つた。劉湘に依る討伐軍陣容整備の結果、年末には勢やや衰へたが、それでも十三縣を保持し、實に十一縣を増加した勘定となる。

甘肅、陝西方面には、紅第二十六軍の活躍があり、陝甘ソヴェト區が樹立されたとの報道があつた。その範圍は十三縣に及んでゐたことであるが、これは少しく誇大に失するやうで、三縣くらゐと見るが妥當のやうである。

鄂豫皖區は吳煥先、沈澤民を武文の首領として再建された。その範圍は約六縣。以上を總結すると、八大ソ區的消長左のやうになる。

區名	年初ソヴェト縣數	年末
中央區	二五	一九
東北區	七	六
贛湘區	一〇	七
贛湘區	六	三

湘鄂西區	七	一一
川 陝 區	二	一三
陝 甘 區	〇	三
鄂 豫 皖 區	六	六
計	六三	六八

即ちソヴェート縣數の増加五縣となる。——第五次討伐第一年は、かかる貧弱な成績を以て終つたが、これは紅軍決死の奮戦と、蒋介石が緩進策を取り、第二年の準備に重きを置いたためである。

黨の活動としては、九月三十日上海で開かれた反戦・反ファッシスト會議を最とする。英のマレー卿主宰の下に、宋慶齡、各地代表五十九名參集し、ソ區代表、福州代表、滿洲義勇軍、十九路軍、紗廠、海員、埠頭労働者代表の報告を聴取し、世界戦争反對、獨逸のファッショ化反對、白色恐怖反對、第五次討伐反對、ソヴェート・ロシアに對する進撃反對等の決議、抗議書を可決し『世界反帝同盟極東分會組織大綱』、『中國民衆の友の會』組織を決定し、極東反帝同盟執委を選出した。

ソ區に於ける經濟建設大會も、注目に値ひする。南部十七縣經濟建設大會は、八月十二日から十五日まで瑞金に開會、瑞金の十七縣代表三百餘名出席、毛澤東の政治報告の外、經濟建設公債三百萬元の件、合作社（組合）、糧食調節の件等を決議した。これと併行し、東北區でも北部十一縣經濟建設大會が舉行された。

二 蘇 大 會

中蘇政府を成立せしめた一蘇大會（中華工農兵蘇維埃第一次全國代表大會）を距ること一年半、一九三三年六月十七日、黨中央は會議を開き、同年十二月十一日の廣暴紀念日を以て、二蘇大會を召集することを決議し、それに基づき八月一日、中蘇政府の名を以て大會召集宣言を發した。

しかし政府軍の討伐は、各地代表の選舉運動遂行を妨げたので、黨中央は、十二月十一日を更に一ヶ月延期する旨の緊急通告を發した。果して開會し得るや否や、疑問とせられてゐたが、結局四十日遅れ、一九三四年一月二十二日から二月七日まで、赤都瑞金に於いて舉行せられた。經過左の如し。

(第一日) 一月二十二日午前五時紅軍檢閲、八時慶祝運動會、午後二時開會、代表六百九十三名、候補代表八十三名出席、中蘇政府主席毛澤東の開會の辭に次ぎ、主席團七十五名を選出後、黨中央代表秦邦憲、全總同劉少奇、共青同凱豐、紅軍總司令朱德の祝辭あり、次いで各種委員會人員を選出し、梁柏臺を大會祕書長に任じ、議事日程を決定した。

(第二日) 二十四日午後開會、中蘇執委會主席毛澤東から二年來工作報告があつた。

(第三日) 二十五日午前及び午後、前日に引續き毛の報告あり、この報告は中執委工作報告決議委員會に移される旨決定。

(第四日) 二十六日開會、毛澤東報告の分組討議。

(第五日) 二十七日午前及び午後開會、毛澤東報告討論、後、毛澤東登壇、その報告に關する結語を演述。

(第六日) 二十八日午前及び夜間、朱德の紅軍建設報告及びその討論。

(第七日) 二十九日午前及び夜間、朱德報告討論、朱德の結語、林伯渠のソヴェート經濟建設報告及びその討論。

(第八日) 三十日午前及び午後、林伯渠報告の討論、林の結語、吳亮平のソヴェート建設報告及びその討論。

(第九日) 三十一日、吳亮平報告討論、吳の結論、劉少奇、『二年來ソ區勞働組合運動概要』報告。

(第十日) 二月一日、各地代表提案。

(第十一日) 二月七日、大會宣言發表可決。中執委改選。これを以て閉會。

新中央執行委員は百七十二名、候補委員三十六名。主席毛澤東、副主席項英、張國燾。主席團毛澤東、項英、張國燾、張聞天、朱德、秦邦憲、周恩來、瞿秋白、劉少奇、陳雲、林伯渠、鄧振詢、朱地元、鄧發、方志敏、羅邁、周月林。中委の重なるものを擧ぐれば、右記、諸人の外、陳紹禹、吳亮平、曾山、王稼齋、劉伯承、賀昌、何長工、董振堂、滕代遠、彭德懷、林彪、聶榮臻、周建屏、陳毅、孔荷籠、陳昌浩、賀龍、葉劍英、蕭克、徐彥剛、徐向前、張琴秋(女)、夏曦、羅炳輝、古大存、成仿吾、高俊亭、邵式平、潘漢年、張鼎丞、陳潭秋、任弼時、何畏、吳玉章、何叔衡、梁柏臺、阮嘯仙、董必武、鄧穎超(女)、袁國平。候委に鄧子恢がある。

人民委員會も改選せられた。主席張聞天の下に、王稼齋(外交)、朱德(軍事)、鄧振詢(勞働)、高自立(土地)、林伯渠(財政)、吳亮平(國民經濟)、陳潭秋(糧食)、梁柏臺(司法)、曾山(内務)、瞿秋白(教育)、項英(農工檢察)の十一委員があり、各『何何人民部』と稱し、人民委員の下に有力中委十數名宛が配屬されてゐた。尙中央審計院長に阮嘯



仙、臨時法院長に董必武が任ぜられた。

江西赤區の總崩壊

前項で述べた通り、黨、區、軍は、一九三三年一年間よく蒋介石の討伐を支へ、八大ソヴェート區、七十縣を擁し、一九三二年五月、第四次討伐開始直前の極盛時代に及ばずとするも、尙ほ自から豪とするに足るものがあつた。

ここに於いて一九三四年に入るや居然二蘇大會を開くことを得て、萬丈の氣を吐いたのであるが、——そのアトがいけない。經濟封鎖、碉堡政策、公路政策を併用し、急進せず、永追ひせず、取るよりは失ふまいとする新討伐方針は、一九三三年一ケ年間の準備を経て、ここにやうやくその効果を現はし來り、紅軍の反撃が、以前ほど利かなくなつて來た。一九三三年までは、例へば金谿の六回に互る爭奪といふやうに、取りつ取られつといふ關係だつたが、碉堡政策のために、一旦政府軍に取られた地點は、紅軍側ではなかなか取返せないといふことになつた。これはいかんと狼狽してゐるうちに、中央ソヴェート區の北の關門たる廣昌と、南の關門たる筠門嶺が、四月二十八日に陥落した。就中廣昌の陥落は、

紅軍の最苦痛とするところで、その精神的打撃は並大抵のことではなかつた。必然動搖を生じ、中央ソヴェート區を抛棄して大舉西漸し、四川に徐向前と會すべしといふ議論が毛澤東、周恩來の必死の反對にも拘はらず、やうやく大勢を支配しかけた。

この説は、討伐軍側に降服した第六軍團總指揮孔荷寵が、最先きにこれを主張し、第九軍團總指揮羅炳輝がこれに附和してゐたといふ。だが毛澤東等は、中樞の威力と壓力とを以て西漸説を抑制し、中央ソヴェート區死守の我を通したのである。——我を通した結果がどうだつたか？ 後に説き進めることとし、叙述の便宜上、ここで一九三四年六月に於ける各ソヴェート區の状態を示す。

(一) 中央區 赤都瑞金を中心に、江西五縣(石城、寧都、興國、雩都、會昌)福建四縣(汀州、清流、歸化、寧化)に縮まつた。

(二) 東北區 首都橫峰を討伐軍に奪はれ(五月二十三日)全ソヴェート區潰滅、方志敏軍は一部は江西、九江附近の彭澤、都昌方面に、一部は福建北部地方に游撃してゐた。

(三) 贛鄂湘區 西路何鍵軍に依つて根據地小源を奪はれ(五月下旬)、猛將高詠生逮捕銃殺、總指揮孔荷寵はこれより先き行方をくらし、實は投降してゐたので、蕭克殘軍の大部を率ゐて、湖南

南部への侵行動を起さうとする姿勢に在つた。毛澤東等の反對に拘はらず蕭は最先きに西漸を實行しようとしてゐたのである。

(四) 贛湘區 内訌の結果(といはれてゐる。)ほとんど自滅し去つた。

(五) 湘鄂西區 賀龍軍は舊根據地を失ひ、貴州の後坪、沿河、婺川方面に游撃しつつあつた。

(六) 川陝區 徐向前の努力に依り、一九三三年末に於いて十三縣以上に亘る大ソヴェート區を形成してゐたが、四川各路の討伐軍勢を盛り返し、僅かに萬源を保つのみとなつてゐた。

(七) 鄂豫皖區。吳煥先、成仿吾(沈澤民死後の繼承者)に依つて、湖北、河南の四五縣を保つてゐた。

中央區死守の決心をつけた紅軍は、福建汀州に全力を注ぎ、總帥朱德精銳三萬を率ゐて出馬し、『性別を問はず、十五歳以上の全人民の總動員』を號召した。

この方面への討伐軍は、龍巖、連城(六月一日討伐軍に歸す。)から蔣鼎文、延平から衛立煌、それに廣東軍の一部が侵入するものと推測せられたので、右三軍の迅速なる集中を妨げ、且つ經濟封鎖に因つて欠乏を訴へつつあつた食糧を補充するため、衛、蔣兩軍の間を縫うて、牽制作戰部隊として劉仇西軍を進出させた。これが八月上旬。

幸ひにして福建側の措置よろしきを得、白沙、水口(福州)の紅軍を撃破し、福州陥落を見るに至らなかつたが、紅軍の一部は轉じて福州北方に向ひ、八月十五日羅源縣を占領し、江西東北區の殘黨たる方志敏軍と合し、同月末浙江南部の龍泉、江山、開化、遂安方面に游撃し去つた。

紅軍の他の一部は、福建西部の尤溪、大田、永安地方に殘留してゐたが、討伐軍に壓迫され、歸化、清流に追ひ詰められ、十月下旬汀州の東南數里の河田が討伐軍の手中に入つた。紅軍の福建進出は、かうして失敗した。

一應中央區死守の勢を示しつつも、紅軍首腦部は、後圖を策することを忘れず、西漸論者の蕭克をして、湖南入りを決行せしめた。蕭は、徐彥剛(第三軍長)軍三千を贛鄂湘區に残し、八月中旬、即ち福建侵入紅軍が福州攻略に失敗した頃、一萬の兵を率ゐて、湖南に入り、一路西進、一時廣西に入つたが跳ね出され、九月下旬貴州の天柱一帯を占領し、沿河(貴州)から南下した賀龍軍と、銅仁、印江(以上貴州)に於いて合體した。

かかる間に中央區の形勢益々危急を告げ、北路では十月六日石城、十四日興國、二十六日寧都陥落。東路でも前述せる河田の陥落は汀州の運命を決し、十一月一日汀州亦東路軍

の手に歸した。これより先、興國陥落するや、流石の紅軍首脳部も、中央區拋棄、大舉西漸を最終的に決心したものの如く、十月二十二日紅軍の一隊は筠門嶺を衝き、二十三日には優勢部隊を以て安遠、信豐を占領し、一時は廣東省境を突破するかと思はれたが、廣東軍これを南雄、大庾、南康、信豐に防ぎ、安遠、信豐を奪回し、紅軍を南康、新城の間から湖南に追ひ送ることが出来た。

今や中央區を形成するもの、歸化（福建）、瑞金、雩都、會昌（以上江西）四縣に過ぎず、しかも紅軍西漸を決意して固守の意がないので、東路軍は無人の野を行くが如く、十一月十日李默庵師踴躍して瑞金に入城した。次いで同十九日歸化、雩都、二十四日會昌奪回。

瑞金陥落は、第五次討伐のクライマックスで、同時に赤白對抗史上の一大轉機である。その影響は隨處に現はれ、廣東、湖南、廣西、四川各省は、一陣又一陣長蛇のごとき紅軍の西進に悩まされ、奔命に勞れてゐたが、久しく沈黙してゐた鄂豫皖區の吳煥先軍、亦江西友軍と相應じて西北進を開始し、その他江西の居残り部隊、浙江に游撃せる方志敏、劉仇西軍の北上等、目まぐるしいばかりである。

かくて孔荷寵が眞先きに唱へ、中頃蕭克が勇敢に實行し、羅炳輝が最後に力説した大舉

西漸説は、終に毛澤東、周恩來等の中央固守説を覆へし、空前の大游撃戦がここに展開せられた。

紅軍の西遷

瑞金の陥落は、赤白對抗史上の一轉機であり、本據を失つた紅軍は、數條の游撃線を描いて、西の方湖南へ、貴州へ、又四川へと移動しはじめたのであるが、その移動は、瑞金の陥落を待つて行はれたものではなく、二ヶ月も前に、先發隊はすでに出發してゐたのである。即ち江西西北にゐた蕭克軍は、一九三四年八月上旬根據地を離れ、湖南南部から貴州東部に出で、十月下旬、湘鄂西區から出て來た賀龍軍と合流して、湖南極西部に落ち着いた。これが賀・蕭軍である。

主力である朱・毛軍は、十月十六日西進を開始し、蕭軍コースの少し南側を通り、同じく貴州の東部に出で、一九三五年一月四日頃、貴州の大河烏江を渡り、遵義一帯を占領した。この外に、東北區の殘黨方志敏軍は、劉仇西、尋淮洲軍と一緒にたつて、北上抗日の旗印しの下に、福建北部から浙江南部、つづいて安徽南部に游撃したが、方と劉は捕縛さ

れ、尋は討死し、残軍は劉英、粟裕が率ゐて、浙江南部に分散し去つた。それから鄂豫皖區の再建者たる吳煥先、徐海東軍は、朱・毛軍の西遷開始とほとんど同時に行動を起し、かつての徐向前コースをたどつて河南から陝西に入り、陝南の鎮安、柞水地方に入った。次ぎに、江西の殘匪は、項英、陳毅、徐彥剛の指揮下に三萬五千と稱せられた。最後に、四川東北の張國燾・徐向前軍は、依然として川陝區を固守し、陝北（陝甘區）の劉子丹軍（紅二六軍）も、亦その勢圏を保つてゐた。

かかるは、一九三五年初頭に於ける紅軍の態勢で、八游擊區、十三萬紅軍と要略されるのであるが、一年後の一九三六年初頭に於いては、それが四游擊區、九萬紅軍となつた。さうした變化が、どうして生じたか？ 以下、それを明かにする。

遵義を占領した朱・毛軍に對しては、或はこの地方にソヴェート區を建設するのではないかとの觀測もあつたが、さもなくして、一月下旬貴州西北隅の赤水、土城、仁懷一帯に集中した。討伐軍これを尾して、一月二十九日土城大戰、朱・毛軍大敗して四川屬の古宋、叙永へ逃れ、二月十二日雲南の威信、牛街、鎮雄地方に入る。これから筠連、鹽沖に出で、金沙江渡河も一法だつたが、意外にも再び貴州に引返し、二月十七日遵義一帯を再占領し

た（ここまでが第一回雲南侵入）。

この地方の爭奪戰が、三月中旬までかかつた。形勢重大の報に接し、重慶の蔣介石が、貴陽に飛ぶ（三・二四）より早く、十二日遵義を抛棄した朱毛軍は、遵義—貴陽大道を南下し、二十七八日頃までに朱・毛軍が貴陽東北の息烽に、彭德懷軍が西北の修文に、合計五萬を集中した。これに對し蔣は、薛岳の中央軍、王家烈の貴州軍計七萬五千を集め、飛行機も三十臺あり、戰は四月三日から五日まで行はれたが紅軍敗北、貴陽東南の龍里、貴定に退却。九日頃貴陽再攻をやつたが、モ、ハにならず、貴陽南部を西進し、十四日頃までに、普安附近八縣占領、二十四日朱德の名で雲南入り宣言を發し、二十七八日頃平彝、羅平、曲靖、馬龍、陸良、師宗の線を占めた。雲南主席龍雲の軍は宜良、路南を固守し、必死防衛の結果、省城昆明の陥落を免かれ、紅軍は嵩明、尋甸に轉じ、五月上旬富民、武定、祿勸、元謀、東川、巧家に遊撃、十日金沙口で金沙江渡河（ここまでが第二回雲南侵入）。

十四日會理を攻めたが抜けず、さらばと、徳昌所、西昌、冕寧と北上し、六月上旬西康省に侵入、瀘定を圍んだが、ここもなかなか抜けないので、大渡河に沿うて南下且つ東進し、漢源南方の安順場で渡江した。それから漢源、榮經、天全、蘆山、名山を席捲し、六

月十五日懋功、天全一帯で、徐向前軍と合流した。江西出發以來八ヶ月で、彼等は四川集中の宿題を果したのだ。では徐向前軍の動きはどうだつたか？ 一九三五年初頭徐軍はちよつと腐つてゐた。陝西入りを企て、寧羌、沔縣から甘肅の白馬關まで押し出したが、徐の苦手の胡宗南軍に追ひ返され、三月上旬古巢へ歸つた。そこへ新指令、『西進して朱・毛軍と合せよ。』だ。直ちに行動、三月八日閬中猛攻、二十八日田頌堯軍を撃破して嘉陵江突破、四月二日劍閣、三日西充、鹽亭、それから江油、安縣、二十一日茂縣占領、それから暫らく停頓したが、六月上旬理番、汶川、懋功を取り、責任を果して朱・毛軍と合流した。

合流はしたが、朱・毛軍の疲労は甚しかつた。江西を出た時の六萬が、一萬そこそこになつてゐた。で、徐軍から二團を補充し、軍團制を廢して四軍とし、林彪、彭德懷、董振堂、羅炳輝が軍長となつた。そのうち討伐進捗し、懋功も守れず、北上して毛兒蓋（松潘西方の一市鎮）に集中した。今後の進路をどうするか？ 最高幹部會席上、毛澤東の北進論、即ち甘肅に入り、肅・甘・涼路線を経て新疆に入るべしといふ論と、張國燾の南下論、即ち川・康省境に據るべしといふ説が對立したが、一應毛の言分が通り、白龍江の南岸、包座——亞西茸の線まで行つた時、毛兒蓋以來の爭論再燃、今度は妥協出來ず、合流三ヶ

月足らずで軍は再び分裂した。北進派は毛澤東、朱德、林彪、彭德懷、羅炳輝、董振堂、鄧發等で、南下派は張國燾、徐向前、陳昌浩、何畏であつた。間もなく朱德、羅炳輝、董振堂も毛を離れ、徐向前軍の後を逐うて南下したので、兵力からいふと南下派の方が優勢になつた。

分裂後、毛等は白龍江を渡つて甘肅に入り、岷縣、漳縣を略したが、肅・甘・涼路線突破の難を思つて針路を東に轉じ、通渭、靜寧から慶陽に出で、橋山を越えて陝北保安に入つた。十月上旬のことであつた。ここから東北にかけては、劉子丹軍の拱衛する陝甘ソヴエート區で、同時に徐海東軍の新根據地だ。徐海東軍の入陝は九月上旬、その動きは、年初の根據地たる陝南の鎮安、柞水から陝西中部に流れ、雒南、商縣間を突破して藍田、鄠縣、佛坪、留壩、鳳縣を経て、七月下旬甘肅に入り、兩當、徽縣、天水、秦安、靜寧、劉德、平涼、崇信、靈臺、涇川（ここで吳煥先戰死）を経て陝北に入つたのだ。

かくて毛・徐・劉三軍合流し、北支赤化中樞確立したが、その陣容は、毛軍は陝甘支隊と稱し、總指揮彭德懷、政委毛澤東の下に第一——三縱隊あり、その司令が林彪、彭德懷、鄧發だ。紅二六軍は軍長劉子丹の下に謝浩如、楊森、楊祺三師。徐海東の紅二五軍の編成

は不明だが、三軍想定兵力約三萬。

一方南下隊は、朱德總司令、徐向前副、張國燾政委の下に董振堂、羅炳輝、何畏、王宏坤、王維周等七軍三萬餘を有し、一旦毛兒蓋に到着いた後、休養一ヶ月、十一月上旬來南下して川・康省境を指さし、十二月末までに懋功、天全、蘆山、名山、榮經、丹巴等を占據した。これに合流すべく、行動を起したのが賀・蕭軍で、十一月淑浦、新化、安化、武岡、沅州（芷江）に游撃し、一九三六年一月貴州に侵入して銅仁、江口、省溪、石阡、思縣に進み、甕安から二隊に分れ、賀軍は貴定、蕭軍は開州、扎佐、修文（一・三一）に出で、二月初め合一して黔西に入り、一時貴陽攻撃の噂があつたが、そのことなく、三月に入つて大定から畢節に達した。——以上が一九三五年から三六年初頭にかけての游撃狀況である。

かくて一九三六年初頭に於ける紅軍の態勢は、ほぼ左表のごとくである。

區・軍名	領 導 者	想定兵力
陝 甘 區	毛澤東・彭德懷・林彪・鄧發・徐海東・劉子丹・謝浩如・楊森・楊琪	三〇、〇〇〇

川 康 區	朱德・張國燾・徐向前・陳昌浩・羅炳輝・董振堂・何畏・王維周・王宏坤・張琴秋	三〇、〇〇〇
賀・蕭軍	賀龍・蕭克・夏曦・任弼時	二〇、〇〇〇
殘 匪	項英・陳毅・徐彥剛・劉英・粟裕・黃立貴	一〇、〇〇〇

即ち四游撃區、九萬紅軍となるのである。

陝西北部に集結して、北支赤化の中樞を形成してゐた毛澤東、徐海東軍は、一九三六年二月山西に侵入し、騷擾約三ヶ月、五月再び陝北の古巢に歸つた。侵入軍は總數二萬二千、そのうちの五十パーセントが基本共產軍で、三十パーセントが陝西土着の急ごしらへ部隊、残り二十パーセントが舊東北軍からの投降部隊であつた。

二月十七日山西石樓縣の、黄河を挟んだ對岸に、二百餘の先鋒隊が現れたと見る間に、忽ち結氷を渡つて山西側に入つて來た。同二十一日頃までに約六千、石樓、中陽、離石三縣が先づ陥落。三月十日頃には、兵力二萬二三千となり、占據地域も十三縣からになつてゐた。同二十日頃が最も猖獗した時期で、占據地域約三十縣。山西西南部の富饒の地を、ほとんど全部取られたといつても過言でなく、省の約三分の一が赤化された。

防衛する側の山西軍は、總數五萬だが、省城の太原や、同蒲鐵道守備のために、多少の兵力は残さねばならず、前方作戰には三萬しか使へない。これではとても共產軍討滅は望めない。といふのは、精銳を誇る中央軍ですら、少くも五六倍の兵力を持たねば、討伐出來なかつたくらゐだから、山西軍を以てしては十倍以上なければ駄目なのだ。

そこでどこからかの救援が必要になつたが、冀察政權には餘力なく、山東の韓復榘も長鞭馬腹に及ばないので結局中央軍の山西入りとなつた。その數七ヶ師四萬、これに商震軍二ヶ師一萬、合せて五萬が入つて來、江西での討伐で勇名を擧げた陳誠が、武漢から飛んで來て第一路軍（中央軍）總指揮になり、山西軍と商震軍とで第二路軍をつくり、山西の楊愛源が總指揮になつた。飛行機が十九臺（中央十三、山西三、綏遠三）。

かうした御膳立てが、三月十日頃までに出來上つたが、流石にそれから共產軍の勢ひも下火となり、三月末には大部分の共產軍が陝西に歸り、南部に五千、太原西北地區に二千、合計約七千が残留するだけになつた。一方討伐軍は、その十倍以上になつたのだから、もはや大勢は決したといつてよく、果然五月上旬までに、共產軍はほとんど全部山西を引揚げてしまつた。

山西侵入の顛末はこれくらゐとし、その後の各軍の動きを見よう。一九三六年二月貴州畢節地方に達した賀・蕭軍は、二十六日同地を拋棄して雲南に入り、三月十二日鎮雄、南下して宣威、馬龍、尋甸、嵩明を経て、雲南省城・昆明の北を通り、四月中旬祿豊に達した。これから尙西進し、下旬賓州に着、月末金沙江を渡り、五月五日頃西康省に侵入し、七月上旬には裏塘、巴安地方に現はれ、懷柔附近で朱德・徐向前軍と合流した。それから甘孜に進んだが、そこで朱・徐軍と別れ、大雪山、大金川を越えて青海省白衣寺に達した（七月二十五日）。しかし馬步芳軍に撃破されて、一旦四川に退き、九月中旬甘肅岷縣を攻撃、東進して同月下旬甘肅東南部の成縣、徽縣、兩當地方に落附いた。

甘孜で賀・蕭軍と別れた朱・徐軍は、甘肅岷縣から臨洮を占領し（九月十日）、ただちに蘭州攻撃に移つたがモノにならず、臨洮に引返し、十月上旬甘肅中部の鞏昌、通渭一帯に進出した。

山西から逐はれた毛澤東、徐海東、林彪、彭德懷各軍及び陝北の劉子丹軍は、五月下旬までに陝西の安塞地方に集中し、それから西進して寧夏に侵入し、中衛、金積、靈武、鹽池一帯に占據した（六月）。九月、毛澤東軍は甘肅の海原、會寧に南下して、朱・徐軍と合

流しようとしたが、討伐軍に阻止され、十月上旬甘肅東部の豫旺、環縣一帶に集結した。徐海東軍も同じ頃環縣に着いた。

かくて一九三六年末に於ける共産軍は、甘肅西北部、同中部、同東南部の三地方に分駐し、小規模の游撃をつづけてゐる状況で、あまり活潑な動きを見せてゐなかつた。

抗日人民戦線成る

瑞金陥落後に於ける中共の動向は、軍事上に於いて、いかにして實力を保存しつつ新根據地を發見するかの一點に努力を集中すると同時に、軍事偏重主義を抛棄し、政治方面に於いて、何とかしてこの窮境を打開せねばならぬと、その新方針の發見に、軍事より以上の努力を傾注した。その結果コミンテルン及び中共（主としてその駐莫斯科代表團陳紹禹等）の案出したのが、抗日人民戦線の結成といふ新方針である。

然し、かくのごとき方針轉換は、決して素地なくしては行はれない。ところが彼等に取つて幸ひなことには、彼等はずもともと抗日の立役者として、一九二五年以來活躍してゐたのである。故に轉換は大なる困難なくして行はれたのであつた。その然る所以を納得する

ために、以下少しくコミンテルンの抗日指導の歴史を回顧して見よう。

コミンテルンが對歐赤化宣傳の難關に逢着し、所謂東方迂回主義を採用するに當り、何故に支那に着目したか？ その理由の一として、諸々の研究者が、揆を一にして擧げてゐるのは、當時の支那が、現に或程度の黎明運動を開し、國民主義運動から反帝國主義運動にまで進んでゐたといふ一點である。かくのごときはコミンテルンに取つて、奇貨措くべきのチャンスであつたに相違なく、これを見逸がす筈はなかつたのである。進んでこの反帝運動を指導、援助し、以て民衆を獲得し、これを組織するといふことが、コミンテルンの行動綱領をなすに至つたのは、かくて必然の順序であるが、支那の所謂反帝運動は、排日運動を主たる内容としてゐたのである。コミンテルンと抗日運動とは實にかかる宿命を持つてゐるのである。

反帝運動の最も顯著なるものとして、全國的ボイコットがあるが、一九〇五年から一九三一年まで、十一回のボイコット中、九回までは日本に對するものである。

年 次

對象國

原因

一九〇五

米 國

排支移民法

一九〇八	日	本	第二辰丸事件
一九〇九	日	本	安奉線改築問題
一九一五	日	本	所謂二十一ヶ條問題
一九一九	日	本	山東問題
一九二三	日	本	旅大回收問題
一九二五	日	本	五・三〇事件
一九二五	英	國	五・三〇事件
一九二七	日	本	山東出兵
一九二八―九	日	本	濟南事件
一九三一―二	日	本	萬寶山事件及び瀋洲事變

カラハン宣言は、一九一九年の五・四運動の最中に發せられたのであり、その以後累次の排日運動の蔭には、コミンテルンの魔手が動いてゐたことは争はれぬ。殊に一九二五年の五・三〇事件はコミンテルンの訓令に基き準備された上海赤化暴動計畫の一部で、抵抗力最も弱しと見られた日本を血祭に擧げたものであることは、上海駐在コミンテルン宣傳部主任チエルカソフが、内外棉争議に關する北京からの問合せに對し發した回答に依つて

明白である。すなはちチエルカソフ指導の下に罷業委員會を組織し、プロフィンテルン提供の資金をも支出してゐる。その額は六月中旬迄に四十三萬弗に上つてゐるが、内二十萬弗は、六月十一日總領事オゾルニンが北京に潜行し、カラハンから受取つて來たもので、四十三萬弗中三萬弗を學生代表、二十四萬弗を工商學聯合會に支給したことまで判明してゐる。この外カラハンは北京に於いて、支那民族の要望を支持せる回章を北京外交團に發したりしてゐるし、プロフィンテルンはその世界各地支部で寄附金を募集させ、それを罷業團に交附してゐる。又中共側の策動としては、陳獨秀、李立三等が動き、恰かも成立したばかりの全國總工會が罷業の主動者となつたことはいふまでもなく、コミンテルン系の私立大廈大學はじめ同系の各學校は、教授學生を擧げて罷業に参加してゐるし、反帝聯盟も寄附金募集に奔走してゐる。——證據は、これで充分であらう。

五・三〇事件に示された抗日指導の熱情を、コミンテルンはその後ずつと持ち續けたのみならず、北支問題の起るや絶好の方便として抗日を取上げ、その旗幟の下に民衆を再組織しようとした。否、組織は終に成功し抗日人民戦線ともいふべきものが出来上つた。事態は、最早單なる罷業煽動といふやうなものではなく、公然對日戦備を名目として政府官

憲、軍憲、コミンテルン系、プロフィンテルン系、ヴォックス系の總動員を以て支那及び滿洲國の民衆に働らき掛け、その全面的赤化に猛進しようといふまでになつた。いかにしてかかる事態が打開され來つたか？ 以下編年的に敘述を進める。

(一) 中國ソヴェート中央政府の對日宣戰。滿洲事變勃發するや中共は逸早く宣言を發し、中國ソヴェート臨時中央政府成立とともに、對外宣言を發表したが、上海事件後の新局面に對し、彼等は果して如何なる態度に出るか注目されてゐたところ、一九三二年四月二十六日附、對日宣戰通電となつて現れた。『中華ソヴェート共和國臨時中央政府はここに對日宣戰を布告し、全中國勞農赤軍と廣汎なる被壓迫民衆とを指導し、民族革命戰爭を以て日本帝國主義を中國より驅逐し、一切帝國主義の中國分割遂行に反對し、中國民族の徹底的解放と獨立とを要求するものである。中華ソヴェート共和國臨時中央政府は、全國の勞働者、農民、士兵及び一切の被壓迫勤勞大衆に向つて、直ちに民族革命戰爭を實行し、直ちに日本帝國主義と戦ひ、先づ第一に、帝國主義を援けて民族革命運動を壓迫し、民族革命戰爭を阻止するところの國民黨の反動統治を顛覆することを宣言するものである。かくて直接に何等の障碍なく日本帝國主義と戦ふことが出來、民族革命戰爭を全國的に發展

させることが出来るのである。』これが該通電の最扼要的な一項である。所謂抗日人民戦線の萌芽らしいものがここに發見せられぬでもないが、各階層との聯合戦線と云ふやうなアイデアは、まだハッキリしてゐない。それもその筈、當時は中蘇政府成立間もなくであり、三回に互る蔣介石の圍剿を跳ね返し、ソヴェート運動並びに軍事依存主義全盛時代であつたからである。

(二) 中共中央九・一八通電。同年九月十八日中共中央は通電を發し、『中蘇政府の對日宣戰通電に對し、大衆は有力なる回答を與へよ。』と強調した。別に新意なく、中蘇政府通電の繰返しである。

(三) 一九三三年の宣言。一九三三年に入つて、一月十五日、三月四日、四月十五日の三回に互つて、中蘇政府の抗日宣言が發表せられた。四月十五日宣言に、次ぎのやうな一節を含んでゐたことが注目される。『左の條件の下に、紅軍は、如何なる武装隊伍とも作戦協定を訂立し、日本帝國主義の侵略に反對する準備を有してゐる。一、即刻ソヴェート區の攻撃を停止すること。二、即刻民衆の民主的權利(集會、結社、言論、出版、示威の自由と政治犯釋放等)を保障すること。三、即刻民衆を武装し、武装的義勇軍隊伍を創立し、

以て中國を保衛し、中國の獨立、統一と領土保全を争ひ取ること。』

(四) 國民禦侮自救會。三月四日宣言の直後孫文未亡人宋慶齡女史を會長とし、中共尖鋭分子をムーヴィング・スピリットとする國民禦侮自救會なるものが三月八日産れた。中國民權保障同盟、反日非戰大同盟等の七系統の分子の大同團結で、反帝抗日、蘇聯擁護、露支提携を叫び、終には全く共產黨化してしまつたので、五月一日終に解散せられた。

(五) 反戰・反ファッシスト大會開かる。反帝抗日の空氣濃厚なるさ中に、九月三十日第二回世界反戰・反ファッシスト大會が上海某處に開かれた。代表團長マレー卿以下四名、支那側宋慶齡女史、各地代表五十九名參集し、世界戰爭反對、獨逸ファッショ化反對、支那共產軍に對する第五次圍剿反對等の決議を採擇した。

(六) 福州人民政府、瑞金中蘇政府抗日合作協定。李濟深、陳銘樞、十九路軍及び社會民主黨に依つて反蔣革命が十一月福建に勃發するや、同月二十六日瑞金中蘇政府は潘健行を、福州人民政府は徐名鴻を各全權代表とし、抗日反蔣初步協定十一ヶ條を締結した。中共屢次の宣言を實行したといふ意味で注目される。

(七) 民族武装自衛運動。一九三四年に入ると、前年の國民禦侮自救會及反戰・反ファ

ツシスト會議の脈を引く反帝運動が、中國民族武装自衛委員會を表現機關として再燃し、約一年間繼續した。會は反帝・反ファッシスト同盟、全總、上海工會聯合會を中心とし、例に依て宋慶齡を看板にし、五月三日『對日作戰宣言』及『中國人民對日作戰基本綱領』を發出した。綱領の要項は、(イ) 陸海空軍總動員に依る對日作戰、(ロ) 全體人民總動員、(ハ) 全人民武装、(ニ) 抗日軍費として日本の在支一切の財産沒收、賣國賊の財産沒收等を實行すること、(ホ) 日本壓下の弱小民族と聯合すること等である。本運動に對する中共の援助工作は、七月十五日附『中國工農紅軍北上抗日宣言』をはじめ、約一打の宣言となつて現はれた。

(八) 軍事偏重主義の放棄と新方針、新戰術の案出。一九三四年十一月十日、中蘇政府所在地の瑞金は終に討伐軍の手に歸し、共產軍は西漸を餘儀なくされることになつた。ここに於いてコミンテルン及び中共は、共產運動本來の面目に歸り、都市に於ける大衆の獲得、即ちインテリゲンツィア及び小ブルジョア、勞働者の各階層を再組織するといふ方針に復歸することの賢なることに覺醒した。換言すれば、對日宣戰通電——國民禦侮自救會——反戰・反ファッシスト大會——國民武装自衛委員會といふ一系の反帝抗日運動を擴大

強化し、國民黨をして容共を餘儀なくさせ、再び一九二五——七年の民族革命聯合戦線の時代を實現させよう。——莫斯科駐在の中共代表團主席陳紹禹（王明の假名を用ふ）、團員康生、周和生、史平、李廣、徐杰、康容、李明は、一九三五年七月のコミンテルン七全大會を眼前に控へて、かくの如く新方針、新戦術を決定したのであつた。

（九）七全大會に於ける抗日指導理論。コミンテルン七全大會は一九三五年七月二十五日から八月二十日迄莫斯科で舉行された。六十五支部代表五一〇名（表決権三七一、評議權一三九）出席、八月二日大會の最重要題目と看做された『ファッシズムの勃興、及びファッシズムに對する労働階級統一のための闘争に於けるコミンテルンの任務に關する報告』がデイミトロフに依つて行はれ、十二日まで討論、七十六代表の演説があり、十二日これに對してデイミトロフ結論を述べ、二十日大會決議として採擇された。この報告及びこれに對する大會の決議こそ、コミンテルン抗日指導の最高原理、根本方針である。報告中『植民地及び半植民地に於ける反帝統一戦線』の項に於てデイミトロフは左の通り演説した。『國際情勢及び國內情勢の變化に關聯し、すべての植民地國及半植民地に於いて、非常なる重大性を獲得したのは、反帝統一戦線問題である。この戦線の創設に當つては、先づ大

衆の反帝闘争の行はるる事情の多種多様なること、民族解放運動の成熟程度、同運動に於けるプロレタリアートの役割、及び一般大衆に對する共產黨の影響相異なることを考慮に容れなければならぬ。支那では、その民族運動に依つて廣大な地域のソヴェート區が創建せられ、強力な赤軍が組織せられてゐるが、日本帝國主義の掠奪的侵略及び南京政府の賣國行動に依り、支那國民の民族的存立が脅威せられつつある。この時に當り、帝國主義諸國に依る支那の奴隸化、及び分割に對する闘争の統合的中心となり、支那國民の民族闘争のため、すべての反帝國主義的勢力を糾合する統合的中心となつて活動し得るはただ支那ソヴェートがあるのみである。故に我等は、苟くも自己の國土、及び自己の國民を救ふための闘争をなす用意ある、支那領土内現存の組織勢力全部を糾合し、以て日本帝國主義及びその手先たる支那人に對する廣汎なる反帝統一戦線の結成を提言したる中國共產黨に、全然同意するものである。我等は幾多の戦闘で試練せられた英雄的支那赤軍に熱烈親愛な挨拶を送るとともに、すべての帝國主義的侵略國、及びその手先支那人から支那國民を完全に解放する闘争を支持する堅き決意あることを、支那國民に確言するものである。』

右に對する決議第五項に、左の如く掲記されてゐる。

『植民地國及半植民地國に於ける共產黨員の最重要任務は、反帝人民戦線の創設作業である。これがためには、最も廣大なる民衆を、ますます増大する帝國主義的搾取反對、残酷なる奴隸化反對、帝國主義諸國驅逐及び國土獨立の民族解放運動に誘引し、民族放良主義派の指導する反帝大衆運動に積極的に参加し、具體的反帝的綱領に基き、民族革命及民族改良主義的諸團體との共同動作を達成しなければならない。支那に於いては、ソヴェート運動の擴大、及び赤軍戦闘能力の強化を、全國に於ける人民反帝運動の展開と結合しなければならぬ。この運動は、帝國主義的壓迫者、就中日本帝國主義及びその支那従僕に對する民族解放闘争なるスローガンに依つて、これを遂行しなければならない。諸ソヴェートは、解放闘争に於ける全支那國民の統合的中心たるべきである。帝國主義諸國のプロレタリアートは、各自その解放闘争のため、帝國主義的侵略者に對する植民地及半植民地國民の解放闘争を、百方支持しなければならない。』

デIMITROフ報告の討論に際し中共前總書記、當時莫斯科駐在代表團主席で、黨隨一の理論家である陳紹禹は、八月七日『植民地半植民地に於ける革命運動、並びに共產黨の戦術に就いて』と題し長廣舌を振つたが、その中で、反帝國民運動の必要に關し、左の如く

演述した。

『民族的危機のますます増大する今日、全國民を、帝國主義に對する決然たる且つ容赦なき闘争に總動員する以外、支那を救ふ手段はない。同時に、反帝統一人民戦線以外、帝國主義との神聖民族革命闘争のため、全國を總動員する手段はないのである。中國共產黨は、國民が黨の援助に依り、速かに救國闘争のため、眞に結合し得るやう、反帝人民戦線を最も廣汎且つ強力に展開しなければならない。黨中央の意見に據れば、右戦術は支那の全國民、政黨、團體、軍隊、大衆團體、有力なる政治的、社會的活動家をして、支那ソヴェート政府と共同して、統一的防衛人民政府を組織せしむるに在る。』

これを要するに新方針、新戦術は、(イ)コミンテルンの側に於いては、第二インターとの間に、反ファッシズム戦線統一を行ふと同時に、(ロ)その支部たる各國共產黨の側に於いては各その國情に應じ、その國の社會民主黨との間に戦線の統一を圖るべきのみならず職業組合、コーペラティヴ、スポーツ團體、文化團體等、苟くも反ファッショ闘争上利害を同じうする改良主義諸團體との間に労働階級の戦線統一を行ふべく、反帝運動に關しても右と同様の團體、國民解放運動者、平和主義者、宗教的民主主義者等と、人民統一戦線

を張るべきであると規制し、(ハ)特に支那に於いては反帝運動に重きを置き、統一的國防政府の樹立と、抗日聯合軍の組織を必要とすとなし、(ニ)而して、以上所謂戰線統一は、單なる提携でなく、對手團體の内部に浸潤し、その内部に在つて活動するものであるとし、浸潤主義を工作の基調してゐる等の諸點に於いて、その特徴を見るに足る。一見第二インターに叩頭したかの如き觀を呈し、又本質に於て防禦的、消極的方針、戰術であることは争はれないが、浸潤主義的工作方法は、むしろ甚だ實際的、救果的で、成功の可能性が多く、頭から、共產黨に引張り込む戰術でないだけに、大衆誘引の可能性が増大したともいへる。恐るべき方針、戰術といはなければならぬ。

(一〇) 中共の八・一抗日宣言。コミンテルン七全大會の行はれてゐる最中、中共は八月一日附を以て長文の抗日救國宣言を發した。一九三二年四月二十六日の對日宣戰通電に胚胎した中共の抗日指導原理は、中間幾多の修正的宣言、並びに若干の實踐を経て、ここに統合、調整せられたのである。爾後、支那に於ける抗日運動は、國防政府樹立、抗日聯軍組織を絶叫せるこの宣言を樞軸として、活潑に展開せられて行つた。その扼要の一節は次ぎのごとくである。

各黨派が過去に於いて、又現在に於いて、政見・利害を同じくしないにせよ、各軍隊が過去及び現在に於いて、敵對行動を執つてゐるにせよ、均しくすべての人は、『兄弟鬩に闘げど、外、侮りを防ぐ。』といふ、眞の自覺が必要である。先づ一切の内戦を停止し、あらゆる國力(人力・物力・財力等)を集中して、抗日救國の神聖な事業のために闘はねばならぬ。國民黨軍は、即時ソヴェート區攻撃を中止し、對日戦を準備すべきだ。紅軍は國民黨軍との舊仇・宿怨にこだはず、彼等と親密な提携の下に、協同救國を希望する。同胞、軍官、士兵、諸黨派、諸團體、國民黨及び藍衣社内の民族意識ある青年、被壓迫少數民族よ、起ち上つて日寇及び蔣賊の壓迫を破り、中國ソヴェート政府と東北の抗日政權を單一的・全國的國防政府に組織し、紅軍と東北人民革命軍及び各地反日義勇軍を單一的・全國的抗日義勇軍に組織しようではないか。黨及びソヴェート政府は國防政府の發起人たることを希望し、直ちに各黨派・團體・地方軍政機關と國防政府共同樹立を討議しよう。國防政府は救亡圖存の臨時指導機關、全國同胞の代表機關として、抗日救國の具體辦法を討論すべく、その重要責任は抗日救國に在り、その下に抗日聯合軍が組織されねばならぬ。統一ある國防政府指導下に、單一的抗日聯軍が先驅するならば、必ずや日本帝國主義に打ち勝つことが出来よう。

(一一) 『救亡抗日聯合陣綫』の完成。抗日運動は、一九三四年の所謂民族武装自衛運動以後半年餘り割合に不振であつたが、中共の八・一宣言を契機として、又もや再燃の勢を

呈し、九月成立した中共系の抗日團體『抗日救國大同盟』を皮切りに、各種の反日組織が陸續として産れ、終に一九三六年六月までに、コミンテルン及び中共の期望するやうな抗日人民戦線が完成された。コミンテルン七全大會後約一ケ年にして、その支那の黨——中共は、課題を果したわけである。浸潤工作の強烈なる、寧ろ驚くべきものがあるといへよう。今、順を逐うて戦線結成の経過を略述しよう。

一九三五年十月二十五日に、中蘇文化協會が成立した。これはヴォツクス系の運動の成功である。十一月十六日には、鄒韜奮に依つて抗日雜誌『大衆生活』が創刊され、一躍抗日雜誌界の代表的存在となつた。日本皇室に對する不敬記事に因つて、日支間の外交交渉を惹起した『新生』誌の後身である本誌は、章乃器等のアヂテーターを論壇に送り出したことに依つて、抗日運動史上に記憶せられる。十二月に入ると、陶行知の『國難教育社』が産れた。反日教育運動の一機關で、恐らくヴォツクス系であらうと思はれる。陶はこの社に據つて雜誌『國難教育』を出し、『國難教育方案』などいふものを編み出した。十二月十五日頃、上海では『抗日先鋒』、巴里では『救國時報』が創刊された。救國時報はコミンテルン及び中共莫斯科代表團が、特に抗日運動及び人民戦線結成指導のために創刊した雜誌

誌で、陳紹禹はじめ、黨の理論家總動員で強硬な指導理論を毎號發表した。二十五日中共中央政治局は、『現下の政治情勢と黨の任務』決議を發表して、再び國防政府樹立、抗日聯軍組織を強調したが、更に一步を進めて(イ)革命的プチ・ブル分子に選舉、被選舉權を與へ、(ロ)同様に革命的インテリゲンツィアを優待し、(ハ)抗日に参加する白軍將兵を優待し、(ニ)富農の土地を沒收しないこと、等を宣明したことは注目し値ひする。

十二月二十八日には、章乃器(前浙江實業銀行副經理)、沈鈞儒(上海律師公會會長)等を幹部とする上海文化界救國會が成立した。上海方面での抗日運動の主力團體で、婦女界、職業界、各大學教授の各救國會を聯ねて上海各界救國聯合會を形成した。

抗日宣傳の充實昂揚は、終に北平に於ける學生運動を誘起した。北支自治反對を呼號する同地學生のデモは十二月九日、同十六日の二回行はれ、それが各省に飛火して、一九三九年の五・四運動に彷彿たる情勢を示現した。就中最秩序整然たるデモを敢行し、五・四運動のやうな原始的なものでなく、恐る可き態様を見せたのは北平學生の一二・九及び一二・一六游行であつた。北平學生聯合會の水も洩らさぬ事前布置の下に一切が計畫され、清華、燕京兩大學生を中心とする一大示威隊は、騎車糾察隊、講演隊、口號隊、散發傳單

隊の四隊に分れ、北平の淺草である天橋地方に、十萬の民衆を集中することに成功し、反日、反漢奸、民衆武裝の三決議をなし、餘力を近郊に押し、農民への宣傳をすら決行したのである。この大デモは多大の影響を全國に與へた。

豫想以上に盛り上つて來る抗日人民戦線の波に乗つて、中共は一九三六年二月十一日、『全國抗日救國代表大會召集通電』を發出して、『即時全國抗日救國代表大會を召集して、正式に國防政府と抗日聯軍とを組織し、抗日戦争準備の具體的方針を決定せんことを主張』したが、引きつづき三月十日、中共中央北方局の名を以て、左のごとく抗日救國宣言を發出した。

『亡國滅種の危機に際し、各政黨、政派、團體、軍隊が、如何にソヴェート制度と土地革命に不同意であらうと、その他の問題に於いて不同の主張と意見があらうと、苟くも自己の實際行動を以て反日を表示し、漢奸、賣國奴反對の鬭争をなすならば、黨、蘇府はただちにこれと聯合し、抗日、反漢奸、反賣國奴の聯合陣營を結成するであらう。例へば紅軍、ソヴェートが過去に於いて十九路軍と抗日反蔣協定を締結したのと同様である。然し紅軍は當時直に實力を以て同軍を援助し得ず、蔣を攻撃し得なかつた（同軍亦これを積極的に

希望しなかつた)が、これは極めて重大な錯誤であつた。今後軍、府は、あらゆる可能な方法を以て同盟の友軍を援助するであらう。』

これと相應じて戦線結成運動は一段と活潑になり、北平學生救國會宣言(四・二六)、上海文化界、婦女界、職業界各大學教授の各救國會、及び國難教育社の共同機關誌『救亡情報』創刊(五・六)を経て、五月二十九日『全國學生救國聯合會』六月一日『全國各界救國聯合會』が成立した。就中『全救聯』の成立は、救亡運動史上に一エポックを劃するもので、參加團體は平津民族解放先鋒隊、南京救國協進會、上海文化界、婦女界、職業界、各大學教授各救國會、廈門抗救會、香港同、廣東教育會、廣西學聯會、武漢文化界救國會、上海工人救國會、天津同、十九路軍等六十餘團體。抗日聯合戦線促進、即時抗日作戰、民衆武裝、防共協定反對、日本華北増兵反對、密輸武力制止、國民救亡大會召集、平津學生救國運動援助、義勇軍組織の各案を採擇し、長文の大會宣言を可決したが、その中で(イ)對日經濟絶交。(ロ)各黨各派の即時軍事衝突停止。(ハ)各黨各派の政治犯即時釋放。(ニ)各黨各派は、人民救國陣線紹介下に、即時正式代表を派遣し、共同抗敵綱領を制定し、統一的抗敵政權を建立すること。(ホ)人民救國陣線は、各黨各派の共同抗敵綱領の忠實なる

履行を、全部の力量を以て保障する。(へ) 人民救國陣線は、各黨各派の共同抗敵綱領違背、並に抗敵力量削弱の行動を、全部の力量を以て制裁するといふ重大な提議を試みてゐる。全救聯に續いて、茅盾、洪深、葉聖陶、鄭振鐸、歐陽予倩等が『文藝家協會』を結んで人民戦線参加を聲明し(六・七)、魯迅、巴金等も『文藝工作者宣言』を發してこれに應じ、更に沈鈞儒、章乃器、王造時等は『著作人協會』を組織して戦線に加入(六・二八)し、かくて抗日人民戦線は、一九三六年六月に於いて、左のごとき廣汎なる層を獲得した。

(A) 中共。(B) 中蘇。(C) 紅軍。(D) 中華民族革命同盟(舊社會民主黨系で、陳銘樞とコミンテルンの聯絡に依り、今一步中共に接近してゐる)。(E) 十九路軍(同上の擁する武力)。(F) 廣西軍。(G) 全學聯。(H) 全救聯。(I) 著作人協會。(J) 文藝家協會。(K) 文藝工作者一派。(L) 二九軍。(M) 東北軍。(N) 東北僞勇軍。

國民政府部内に於いても、中蘇文化協會會長であり、その代表を莫斯科に常駐させてゐた立法院長孫科、監察院長于右任、曾つては蘇聯の援助を受け、抗日反蔣軍事を起し、後屢次反日的言論を中外に發表した軍事委員副委員長馮玉祥、並びにC・C團の一部(これを親露派組織分子とする)等は、人民戦線のシムパと目して差支へない。かかる廣汎な

る階層が存在し(第一條件)、對手方としてファッショ政權たる蔣介石政府を持ち(第二條件)、背後にコミンテルン及び中共の有力なる領導(第三條件)を控えてゐる情勢は、支那に於ける人民戦線既に成れりと斷ぜざるを得なかつた。然り、抗日人民戦線は成立した。結成すでに成り、實踐これに次ぐ。七月十日の菅生鑛作暗殺事件は、一九三五年十一月九日の中山秀雄兵曹暗殺事件と同じく、西南派の使喚を受けた殺人請負ギャング紅幫の仕業であり、八月二十四日の成都事件(渡邊洗三郎、深川經二死亡、田中武夫、瀬戸尙、負傷)は、一月二十一日の油頭角田進巡查暗殺事件と同じ脈を引く學生の主動で、學聯系のテロと見做すことが出来、九月三日の北海事件(中野順三死亡)は、明白に十九路軍の蠻行、九月二十三日の上海海寧路事件(田港朝光兵曹死亡、八幡良胤、由利葉義巳兩水兵負傷)と、九月十九日の漢口吉岡巡查射殺事件とは、背後關係不明であるが、前者は中山、菅生兩事件の脈を引くものと想像せられる。以上、約一年間に八名の犠牲を出した抗日テロは、何れもコミンテルンの操る抗日戦線の策動と見られ一面南京政府の取締り不徹底を語るものであつた。十一月の上海邦人紡績罷業は、經濟的原因は勿論あるが、全學聯系(大夏大學等)の策動、並びに全救聯(章乃器、沈鈞儒、史良等)の煽動が原因の一つとなつてゐる。

る。章沈等七巨頭が、このために捕縛されたことは、今尙世人の記憶に存してゐる。

要するに、(イ)コミンテルンは七全大會決議を以て反ファッシズム、反帝統一戦線の結成を各國支部に命じ、(ロ)支那支部—中共は、これを奉じて各階層に働き掛け、抗日を旗幟として戦線統一に努力し、巧妙なる侵潤工作を以て終にこれに成功し、(ハ)一方在支蘇聯官憲はコミンテルン、プロフィンテルン、ヴォツクスと一體となつて中共に側面援助を與へ、自らはヴォツクス系工作に乗り出し、支那政界に親露派を擁立し、(ニ)各方の工作完成するや、必然の結果として抗日テロ續出し、日支兩合の關係日に險惡を加ふるに至つて、コミンテルンの抗日指導はここにその目的を達し、對日戦争準備の一環、ここに成るの觀を呈したのである。

三、支那事變と中共

西安事件

一九三六年の中頃までに、廣汎なる階層を含む抗日人民戦線が成立し、引きつづいて戦線各翼に依る實踐が行はれたことは前述したが、かく動いてゐるうちに、終に一大爆發が起つた。戦線の一翼である張學良の東北軍に依つて起された『西安事件』である。すなはち一九三六年十二月十二日、西北剿匪副司令張學良が西安に於いて、滞在中の同總司令蔣介石を監禁した事件である。この事件は、同月二十五日蔣の南京歸還に依つて第一段の解決を見、一九三七年二月八日南京政府軍の西安入城に依つて、第二段の解決を告げた。かく、事件の外貌が割合ひに簡單であつたため、『單なる軍閥の取引』であるとする説が、當時盛行したものであるが、それだけでは割り切れない何物かがあつた。事件の背景に潜んでゐた中共乃至人民戦線派の策動がそれである。これらの背景が、學良をしてクーデターを決行せしめたのだ。

どうしてこんな『背景』が形成せられたか？

共産軍討伐の第一線に立つといふことは、換言すれば赤化宣傳の矢面に暴露されるといふことである。共産軍に對して一發の彈丸を放つことは、報酬として一聯の赤化宣傳文を貰ふといふことである。蔣介石直屬の精銳部隊でも、共産軍討伐に従事してゐるうちに、いつの間にも赤化したといふ例もある。況んや東北軍の如き、蔣の巧妙な雜軍整理策の犠牲となり、軍費は削られ、給養は悪く、往年の華麗な軍隊が、一變して尾羽打ち枯したルムペン軍になつたといふやうな情勢に於いては、共産黨・軍からの士兵工作（下層兵士赤化工作）は奏功の可能性が多いのである。しかもコミンテルンの新戦術は、支那人としては誰も反對出来ない抗日を旗印とするものであり、強いて頭から共産黨に引張り込まうとするものでないだけに、浸潤の度がひどいのである。そこで下層兵士先づ赤化し（下層戦線統一工作）、それが上層將校に及び、終には學良その人さへ、半ば赤化するに至つた。彼が赤化したといふのが可笑しければ、彼の軍閥的打算と、部下の赤化とが、利害關係上一致したといふことに訂正してもいい。中共中央委員潘漢年を主とする工作は、學良の機要秘書黎天才の協助を得て、東北軍陝西移駐（一九三五年十月）後半歳を出でずして、東北軍の赤化に成功したのである。潘以外に何人がゐたか、終に判明しなかつたが、恐らく

彼を首領とする黨の精銳が、久しい以前から軍の中に入り込んでゐたことは想像出来る。一方學良の側近にゐて、赤化宣傳隊を手引きする役目を勤めた黎天才は、もと李大釗に屬してゐた共產黨員で、李大釗が北京ロシア大使館で捕縛された時、一緒に逮捕された男だが、張作霖と同郷の奉天といふ點で運動が效き、許されて學良の秘書となり、その後ズツト彼に従つてゐたのである。

共產青年團の影響もある。滿洲事變後北京に移轉した東北大學は、團の影響を最も多く受け、その卒業生は群を成して東北軍に入つた。西安事件で背後に在つて最も活躍した苗劍秋（東北大學社會科學科出身）、粟又文は、その代表である。

かつて福建革命の理論的指導者であつた黃琪翔は、その後『中華民族解放行動委員會』を組織し、抗日人民戦線内の一陣營を成してゐたが、この黄が一九三六年十月張と會見し、人民戦線への移行を熱心に勸説したことは、當時我等の聽いたところであつた。

雑誌『新生』に據つて抗日宣傳に努め、『閒話皇帝』の一文に依つてわが皇室に對する不敬事件を惹起した杜重遠は、上海に於ける抗日人民戦線の大立物の一人である鄒韜奮の弟分に當る男であるが、いつのほどからか、人民戦線の特派員として西安に現はれ、『西北救

國聯合會』を牛耳り、事件直前、七千人の大デモを指揮したと傳へられてゐる。

黨・軍・團・解放行動委員會、人民戦線の周到な事前布置を伴ひつつ、赤化の網はヒシヒシと學良を押しつつんでゐた。これと同床異夢の學良と、この形勢に盲目でないまでも、頗るこれを輕視した蔣とは、軍閥的打算に餘念もなかつた。『軍費をやりさへすればいいのだらう。』と蔣が打算すれば、『それで何とか片附きませう。』と張が相槌を打つ。『軍閥の取引』はわけもなく成立した。その金額も判つてゐるが、ともかく大した額ではなかつた。後の『最後の解決』の條件となつた金額に比ぶれば、いふに足りない額ではあつたが、弱氣の張はそれで納得したのである。

一帆風順の蔣介石である。西安にいくらか不穩の風説があつたとて、彼には一小雲片としか感じなかつた。『おれが行つて、話せば判る。』と、孔祥熙あたりの忠告を蹴飛ばして、乗り込んだ彼である。『見る、チャンと片が附いたではないか。』と豫想の誤まつてゐなかつたことを自負しつつ、張との『軍閥的取引』を完了した日、明日は出發といふ十二月十一日、彼は楊貴妃の夢の跡、華清地溫泉にひたつてゐたのである。

しかし、この時の西安を支配したものは、蔣でもなく、學良でもなく、黎天才であり、

苗劍秋であり、潘漢年であり、甚だしきは杜重遠でもあつたのである。もう一ついへば、毛澤東であり、周恩來であつたのだ。進退谷まつた學良は、——今や全く彼等から遊離してゐることを自覺した學良は、自己の立場が、蔣と少しも相違してゐないことを知つた。彼は一面部下のクーデター決行論を容認し、一方蔣のために最善を盡した。すなはちその衛隊長をして、衆にいはしめた。「蔣を殺しては何もならぬ。あくまで生擒すること。」これが彼の命令であつた。

周到な包圍準備が、驪山を中心として、十一日の深夜に完成された。十二日の明け方、蔣の衛隊長蔣孝先が、西安から歸つて來ると、盛んに小銃の音がする。何事かと思つて、その中心に飛び込んで一喝すると、イキリ立つた學良軍は、彼を血祭りにあげてしまつた。西安事件の犠牲者二人のうちの一人の、最期の真相はかうであつた。「おれは委員長の衛隊長だ。貴様等は一體何をするんだ！」この一喝が彼の生命を奪ふ結果となつたのだ。一方蔣介石は、寢衣のまま背後の山に登つたが、そこにも包圍陣が張られてゐるのを見て、取つて返す途中墜落して負傷した身を、一石洞に隠した。そこに山下からの包圍が迫り、終に監禁の運命となつたのである。蔣の生來はじめて遭つた奇耻大辱である。

——これ以上、事件の経過をたどる必要を見ない。ただどうしても逸してならないものだけを挙げると、第一に、張學良、楊虎城の八要求である。國民黨三中全會第四次大會（二月十九日）で、蔣の提出した事件経過報告書に據るとそれは次ぎの八項である。

- (一) 國民政府を改組し、各黨各派を交へ救國に當ること。
- (二) 一切の内戦を停止すること。
- (三) 上海に於いて逮捕の愛國領袖を釋放すること。
- (四) 全國の政治犯を釋放すること。
- (五) 人民の集會、結社その他一切の自由を保護すること。
- (六) 民衆の愛國運動を解放すること。
- (七) 孫總理の遺囑を確實に履行すること。
- (八) 救國會議を即刻召集すること。

明かに「容共」をいつてないからといつて、この八要求を輕視する向きがあつたが、飛んでもないことだ。どの項を検べて見ても、「容共」、「聯露」、「抗日」の臭ひがする。

(一)の各黨各派の中に、共產黨を含んでゐることは勿論で、「八・一宣言」以後の共產

黨の文獻は、『容共』をいふ時、必ずこの文句を使ふのだ。(二)の内戦停止は、すなはち共産軍討伐中止だし、(三)は人民戦線の立役者、沈鈞儒、章乃器等を釋放せよといふのである。(四)の政治犯の大多数は共産黨員だし、(六)の愛國運動とは抗日運動のこと。(七)の孫總理遺囑とは、『世界上、平等を以て我を待つ國家と聯合し……』といふ例の有名な文句を指し、すなはち聯露の主張で、(八)の救國會議は、中共文獻の用語例では抗日會議である。ただ僅かに(五)が、臭味が薄いだけのことで、その他の七項はいづれも『聯露』、『容共』、『抗日』に觸れないものはない。輕視するのは以ての外、實は歴史的要求であり、西安事件の指導的原理であるのみならず、爾後の政治情勢を規制する根本原則であつただ。

第二に擧げなくてはならないのは、共産黨領袖の西安入り、並びにそれと蔣との接衝である。アグネス・スモデレー女史、——アメリカ共産黨員で、『チャイナス・レッド・アミー・マーチス』の著者、『赤色マタ・ハリ』といはれる彼女の西安入りも、コミンテルンの動きを語る一指標だが、それよりも、毛澤東、周恩來二巨頭の入城は意味重大である。毛がはじめて西安の民衆の前に姿を現はし、尺餘の長髯を終南山嵐風に吹きなびかして、

熱烈な煽動演説をやつたといふことは、小説的に面白いが、實際に於いて、重要な役割を勤めたのは周恩來であつた。彼は入城と同時に『紅中社』といふ通信社を組織し、宣傳に大童であつたが、終に機會を得て蔣と會見し、次ぎの要求を提出した。

- (一) 共産軍攻撃を中止するならば、共産軍は蔣の指揮下に入り、抗日戦線に参加するであらう。
- (二) 黨は反國民政府的活動を停止し、國民黨と協同して抗日に専心するであらう。
- (三) 黨はソヴェート區に於ける土地政策を拋棄し、ソヴェート區を『社會主義實驗區』と改稱するであらう。
- (四) 國民政府を改組し、人民戦線派を参加させられたい。

蔣の回答は次のやうであつた。

- (一) 共産軍を武装解除の形式で中央軍に改編し、毛澤東、朱德を外遊させ、共産軍幹部將校は、現在と同一資格で中央の軍籍に入れる。
- (二) 黨は『大衆黨』と改稱せよ。併し合法的存在は許さぬ。統一破壞工作は許容せぬ。
- (三) ソヴェート區を解消し、省縣制にする。現在のソ區職員は中央から省縣職員に任命する。實際上の社會主義實驗工作には干渉せぬ。

(四) 國民政府改組については、南京歸還後政府當局と協議する。

この報道は、當時勿論コンファームし得なかつたが、私は有り得べきことだと信じてゐる。

第三に、抗日聯軍が實際に組織されたこと。これは楊虎城が、一九三七年元旦發表した『將兵に告ぐる書』に、西北抗日聯軍副司令といふ肩書きをつけてゐることでも判る。その他西安が『西京』と改稱されたことなど、一小事であるが、西安赤化の状況を彷彿せしめる。

第四に、最後の妥協條件。叛軍機關紙『解放日報』に據れば、蔣は西安出發に際し、例の八要求を容れた上、左の六項を承認したといふ。

- (一) 中央軍を十二月二十五日から潼關外に撤收させる。以後の内戦責任は蔣に歸する。
- (二) 内戦停止、國力集結、一致外敵に向ふ。
- (三) 國民政府改組、各方の人材を集めて抗日主張を容納。
- (四) 外交政策改變、支那の解放に同情する國家との聯繫。
- (五) 沈章等釋放。

(六) 陝甘軍事は張揚に委託。

この外に金の問題があることは勿論で、これは可成りの額である。宋子文の出馬が絶対必要だつた所以である。

ここでちよつとコミンテルン及び中共の底意を揣摩して見る。事件は正にコミンテルン及び中共の思ふ壺にはまつたものである。然し同じく『思ふ壺にはまつた』と考へたにせよ、中共の内部には、事件の利用方法に關して、二様の見解が行はれたのである。一は、直ちに蔣を血祭りにあげ、あくまで國民黨及び國民政府を打倒すべしといふ見解であり、張國燾及びその影響下の在西安急進派(苗劍秋、孫銘九等)、在上海の急進派がこれを主張した。これを『内戦政策』といふ。二は蔣をして聯蘇・容共・抗日を容認せしめ、戦線内に牽引し、協力抗日しようといふ見解で、毛澤東、朱德、周恩來等がこれを主張した。これがいはゆる『和平政策』である。だが、コミンテルンの意向は、左翼小兒病的な内戦政策をよしとせず、蔣に利用價值を認める和平政策に左袒したので、兩派の争ひはテンで勝負にもならず、和平派の代表である周恩來の西安入り、その擒縦自在を極めた活躍に依つ

て、周知のやうな結着を告げたのであつた。即ち西安事件の一幕は、蔣のコミンテルン及び中共への完全なる屈服に結果し、抗日人民戦線を變じて、抗日民族戦線（全國的抗日態勢）たらしめる、その出發點として、事件に意義づけることになつたのである。

國・共再婚成る

かくて、西安事件の際、張學良、楊虎城から蔣介石に提示されたいはゆる張・楊八大要求は、爾後の支那政局を規制する指導原理となり、蔣・張妥協條件、及び蔣・周恩來會談を前奏曲として、國・共合作交渉は徐徐に進められて行つた。周恩來の奉化潛入説、國民黨中央執行委員張冲の西安入り、顧祝同と中共黨代表との交渉説等、溶暗、溶明の幾幕かを経て、一九三七年二月に入ると、中共は歴史的の提議を國民黨に對して試みた。即ち二月十日附を以て、大意左のごとき通電を、國民黨三中全會宛で發したのである。

西安事件の和平解決は、舉國慶幸とするところ、これに依つて和平統一、團結禦侮を實行し得るならば、それは國家民族無上の幸福であらう。日寇猖獗、中華民族の存亡千鈞一髮の秋、本黨は貴黨三中全會が次ぎの各項を國家根本方策として採擇されんことを切望する。

- (一) 内亂を停止し、國力を集中して一致外敵に對する。
- (二) 言論、集會、結社の自由と政治犯の釋放。
- (三) 各黨各派各界各軍の代表會議を召集し、全國人材を集中し、共同救國を實行すること。
- (四) 抗日抗戰準備工作の急速完成。
- (五) 人民生活狀態の改善。——貴全會が、この國策を確定せらるるに對して、本黨は次ぎの保障を提供する。

- (A) 反國民政府的武裝暴動方策を全國的に停止する。
- (B) ソヴェート政府を中華民國特別區政府と改稱、紅軍は國民革命軍と改名、國民政府及び軍事委員會に從屬させる。
- (C) 特別區内に普選に依る徹底的民主制度を實施。
- (D) 地主土地沒收を停止。
- (E) 抗日民族統一戦線綱領實行。

この通電は上海の英字紙ノース・チャイナ・デイリー・ニュースその他に掲載されたものであつて、從來暗黙の間に進行中であつた國・共合作交渉を、俄然明るみへ持ち出し、對手方たる國民黨を、退引きならぬ立場に追ひ込んだところの一種の表曝工作で、正にタ

イムリ・ヒットであつた。西安事件の影響下に在る國民黨は、換言すれば張・楊八大要求に規制されつつあつた國民政府は、何等かの形式に於いて、公的に『回答』せざるを得なくなつた。即ち三中全會に於いて、『根絶赤禍案』を採擇し（二月二十一日第六次大會）、『全會宣言』（二月二十二日）中に於いても亦この問題に言及した。全會宣言は抽象的なものであるが、『根絶赤禍案』に於いては、左のごとく明白に『容共條件』を提示してゐる。

今や共產黨人は邊隅に窮し、輸誠受命の説を唱へてゐる。本黨は博愛を旨としてゐるから、決して人の自新の路を斷つものではない。然し誤まりは再びしてはならぬ。彼等が眞に悔悟し、三民主義に服従し、國法を守り、軍令を嚴守し、束身して中華民國の良善なる國民となるに非ざれば、中央は國家の治安を保持し、全國人民の生命財産を維護するために、億萬人永久の利害を顧みずして、少數巧言暴行の徒を赦すわけには行かないのである。目前最低限度の辦法についていへば

第一、一國の軍隊には統一の編制と號令とがあるべきである。一國家内に主義絶對相容れない軍隊が並存すべきではない。故に徹底的に『紅軍』その他の名義を假借する武力を取消さなければならぬ。

第二、政權統一は國家統一の必要條件であり、如何なる國家でも一國內に兩種政權の存在を許すものはない。故に徹底的にいはいゆる『ソヴェート政府』及びその他統一を破壊する一切の組織

を取消さなければならぬ。

第三、赤化宣傳は、救國救民を職志とする三民主義と絶對に相容れないのみならず、わが國民の生命、社會生活と極端に相背してゐる。故に須からく根本的に赤化宣傳を停止しなければならぬ。

第四、階級闘争は一階級の利益を以て本位とし、その方法は整個（全、全體）の社會を以て種種對立の階級に分成し、これをして相仇視せしめるものである。故に民衆奪取と武装暴動の手段に出で、社會に不安を與へるのである。根本的に階級闘争を停止せねばならぬ。

ここに擧げられた最低限度の辦法四ヶ條、即ち（一）共產軍の取消、（二）ソヴェート政府の取消、（三）赤化宣傳停止、（四）階級闘争の停止の四つと、その前にいつてゐるところの（五）三民主義への服従、合せて五つが、國民黨としての『容共條件』であるのだ。以上の五條件が共產黨に依つて充足されるならば、國民黨は彼等を容納しようといふのである。ところが、一九三五年の新戦術採用後の中共は、もはや昔日の中共ではないし、それに、何よりも先きに蘇聯邦が、否コミンテルンが、どんな代價を支拂つても、支那をその側に牽引することを決心してゐたのだから、そこには『容れ得ざる條件』などはなかつ

たのである。かうした情勢下に於いては、『根絶赤禍案』は、充分に張・楊八要求及び共産黨の二月十日附『致國民黨三中全会書』への回答たり得るのである。そのことを印證するものは、蔣介石が二月二十二日の閉會式後、中央通訊社をしてキャリイせしめた個人談話である。その中の『言論開放』は、張・楊八要求の第五、六項に、『人材の集中』は第一項に、『政治犯釋放』は第三、四項に、いづれも相呼應するものだからである。換言すれば根絶赤禍案は、張・楊八要求並びに致國民黨三中全会書に對する公的答であり、蔣介石個人談話は、その私的答なのである。

西安事件を善後するステージである國民黨三中全会は、同時に國・共合作の重大楔機となつたのである。かくて合作交渉はここに具體化され、國民黨は中央執行委員張冲、藍衣社幹部賀衷寒等を西安に派遣して、周恩來等と交渉せしめた結果、(一) 共產黨側はソヴェート政府を廢し、新たに特別政務委員會を組織し、(二) 共產軍を國民政府直轄軍に收編することに、三月四日決定したとの情報があつた一方、共產黨側でも李慕飛、石佛遵等を代表として南京に派遣し、孫科等と協議したといふ。この種の情報は拾へばまだあるし、合作條件についても、色色のことが傳へられてゐるけれども、いづれも確實性を缺くから省

略するが、要するに三中全会後の四ヶ月間に於いては、兩黨ともに黨内異論の説得に大童であつたものごとく、唯一つ共產軍討伐中止の實行を除いては、合作條件は一も成立してゐなかつたと見られる。このことは、中共がこの期間内に於いて發表した、次ぎの諸文獻を通じて明白に看取されるのである。

- (一) 陳紹禹(中共駐蘇代表團主席)『中國人民救済の鍵』。
- (二) 毛澤東『中國抗日民族統一戰線在目前階級の任務』。
- (三) 黨中央『救國會中に於ける我等今後の工作と黨の具體的任務』。
- (四) 黨中央宣傳部『國民黨三中全会後に於ける我等の任務に關する宣傳大綱』。
- (五) 黨中央『國內の和平を鞏固にし民主權利を爭取し對日抗戰を實現する鬭争のために全黨同志に告ぐる書』。

かくのごとく、國・共合作交渉が、猶未だ爐火純青の境に達してゐなかつた一九三七年七月七日、抗日戰線の一翼たる第二十九軍に依つて、蘆溝橋事件が起されたのである。抗日民族戰線未だ完成せず、國・共合作未だ成立せざるに、戰線の一翼はシビレを切らして、直接的抗日實踐に一步を踏み出したのであるが、これが拍車となつて、合作は急速度に進

展した。即ち政治犯の釋放、共產軍の改編が實行され、九月下旬に至つて兩黨の合作宣言を見たのである。

七月から八月にかけて、政治犯三百餘名の釋放を見たが、その主なものは郭沫若、陳獨秀、ヌーラン夫妻、並びに沈鈞儒、章乃器等人民戦線派七領袖である。郭は支那左翼作家の尤であり、蔣介石から捕縛令を發せられて、日本に十年の亡命生活を送つてゐた男である。事變發生後捕縛令を取消されると巧みに日本を脱出し、七月二十七日上海着、人民戦線派と一緒になつて、『救亡日報』その他に宣傳陣を張り、上海陥落後香港に遁れ、次いで武漢に現はれ、一九三八年五月湖北教育廳長になつたといふ。陳獨秀は中國共產黨組織の張本人だが、後コミンテルンの御機嫌を損じて除名され、中國トロツキーストの首領となつた男で、一九三二年就縛服役中だつた。八月二十三日釋放後は、武漢を根據として蔣と結び、中共とは反對の立場を採つてゐた。ヌーラン夫妻はコミンテルン極東局書記として一九三〇年三月上海に現はれ、東洋赤化の總元締をやつてゐたが、一九三一年六月就縛、無期徒刑服役中だつたのが、九月三日釋放された。沈鈞儒・章乃器等人民戦線派七領袖は、一九三六年十一月上海日本人紡績罷業煽動の廉に因つて捕縛されてゐた連中である（七月

三十一日釋放。）

共產軍の改編は八月二十二日實行せられた。名稱は國民革命軍第八路軍で、朱德を總指揮に、彭德懷を副指揮に任命、同二十五日朱・彭就職通電を發して抗日戦線に参加した。かくして（一）内戦停止、（二）共產軍改編、（三）政治犯釋放の三條件が充足されたので、中共は九月二十二日附を以て陝西省の延安から、『精誠團結・一致抗敵宣言』を發出し、國民黨は同二十五日、蔣介石の名を以て、右に對する談話を發表した。これが兩黨の第二次合作宣言であり、抗日民族戦線はここに至つて完全に成立したのである。中共宣言及び蔣介石談話の内容は左の通りである。

（中共宣言） 親愛なる同胞よ。中共中央は謹んで誠意を披瀝し、わが全國父老兄弟姉妹に宣言する。この未曾有の國難に會し、民族の存亡千鈞一髮の秋、我等は祖國の危機を救ふため、和平統一團結禦侮の基礎に立ち、すでに國民黨の諒解を得て、ともに國難に赴く決心をなした。これは偉大なる中華民族の前途に、重大なる意義を附與したものである。危急存亡の現狀に於いては、民族の内部的團結に依つてのみ日本帝國主義の侵略に戦勝し得ることを知る。現在既に全民族團結の基礎は下された。民族の獨立、自由解放の前提もまた創設された。中共中央は特に我等民族の光明燦爛

たる前途を慶賀するものである。ただ我等はこの民族の光輝ある前途を現実的に獨立自由幸福な新中國とするためには、全國同胞各一人一人の熱血ある黃帝の子孫が堅忍不拔の努力奮闘を要することを要する。中國共産黨はこの時機に當つて全國同胞に向つて我等奮闘の總目標を提出せんことを願ふものである。即ち、

- 一、中華民族の獨立自由と解放を爭取するためには先づ切實迅速に民族革命抗戦を準備し、發動し、以て失地を恢復し、領土主權を完整す。
- 二、民權政治を實現し、國民大會を開き、以て憲法を制定し、救國方針を規定す。
- 三、中國人民の幸福と愉快な生活を實現するために先づ切實に災荒を救済し、民生を安定し、國防經濟を發展せしめ、人民の痛苦を解除し、その生活を改善す。

凡そこれらの諸項は均しく中國の直ちに必要とするところにして、奮闘の標的となるものにして我等は必ず全國同胞の熱烈な賛助を獲得するものと信じてゐる。中共はこの總目標の下に全國同胞と手をとつて一致努力せんことを願ふものである。中共はこの崇高なる目標を實現するための途上には幾多の障礙と困難を克服せねばならないことを知る。先づ日本帝國主義の阻碍と破壊に遭遇する。茲において敵人陰謀の口實を取消し一切の善意の懷疑者の誤解を解除するために中國共産黨中央委員會は自己の民族解放事業に對する赤誠を披瀝する必要がある。これがために中共中央は特に全國に向つて宣告する。

- 一、中山先生の三民主義は中國今日の必需のものであるから本黨はその徹底的實現のために奮闘することを願ふ。
- 二、中國國民黨政權を推翻する一切の暴動政策及び赤化運動を取消し、暴力をもつて地主の土地を沒收する政策を停止す。
- 四、紅軍の名義及び番號を取消して國民革命軍に改編し、國民政府軍事委員會の統轄を受け、出動の命を待ち、前線における抗戦の職責を擔任す。

親愛なる同胞達よ、本黨のこの光明磊落にして大公無私、委曲求全の態度は早くより全國同胞に向つて言論上明白に表明し、早くより同胞達の賛許を獲得してゐたのであつたが、現に中國國民黨と精誠團結を謀り全國の和平統一を鞏固にし神聖なる民族革命戰爭を執行するために我等の準備せるこの種約束のうちには形式上ではなほ實行しない部分即ちソヴェト區の取消紅軍の改編等を直ちに實行し以て統一團結の全國的力量を用ひて強敵の侵略に抵抗せんとするものである。寇深く、且急である。同胞達起てよ。全國四億の同胞は更に親密に團結して起て。我等偉大にして悠久なる民族は戦勝すべからざるか？ 起つて民族的團結を鞏固に日本帝國主義の壓迫を推翻するために奮闘せば勝利は我が中華民族に屬する。抗日戦争勝利萬歳。獨立自由幸福の新中國萬歳。中共中央委員會。

(蔣介石談話) 國民革命の目的は、中國の自由平等を求めることに在る。孫總理は、三民主義を

以つて、救國主義であると説明した。即ち全國一致を以つて、國家の急亡を挽救するために奮闘すべきであると云ふ希望を有した。不幸にして十年以來一般國民は三民主義に對して、眞誠に一致的信仰をなす能はず、民族意識に對しても亦深刻なる認識がなく、革命建國の過程中、少からぬ阻礙を受けしめた。國力は固よりこれによつて消耗され、人民は飽くまで犠牲に供せられ、外侮をして日に深からしめ國家は益々危殆に瀕した。この數年間、中央政府は、常に精誠團結共に國難に赴くべきことを強調し、而して國民は昔日の三民主義に對する懷疑を離れて、民族の利益を重ずるに至つた。異見を放棄して共同一致して來た。これは一般國民が亡ぶれば共に亡び、存すれば共に存すると云ふ意義を感ずる來た證明である。全民族の利益には、個人や團體の利益を超越すべきものであることを悟つた證據である。今回中國共產黨の發表せる宣言は民族意識が一切に打ち勝つた例證である。宣言中に擧げてゐる諸項例へば暴動政策と赤化運動の放棄、ソヴェート區と紅軍の取消等は、皆「力量集中」「救亡禦侮」の主要條件であり、且つ本黨三中全会の宣言及決議案と相合してゐる。更に「三民主義のため奮闘」すると宣言してゐることは、中國今日の努力の方向が只一つしかないことを證明するものである。思ふに我等の革命が争ふ所のものは、個人の意氣と私見に非らずして、三民主義の實行のためである。危急存亡の秋に於いては過去のことについて論争してはいけない。全國人民を徹底的に更新せしめ團結せしめ、共に國家の生命と生存を計らねばならぬ。凡そ中國國民にして、三民主義を信奉し、救國に努力するものは政府はその過去如何を問はず、忠を

國家に盡すチャンスと與へるであらう。國內の如何なる派別に論なく凡そ國民革命抗敵禦侮の旗幟の下に共同救國奮闘する者は、政府はこれを國民黨の指導下に集中し、一致努力を容許するであらう。中國共產黨は、既にその成見を棄て、國家の獨立と民族利益の重要性を確認した。我等は只中國共產黨が、誠意を以つて、その宣言中に列擧せる諸點を實行せんことを望む。また禦侮、救亡、統一指揮の下に、その能力を國家に貢獻し、全國同胞と一致努力し以つて國民革命の使命を達成せんことを望む。これを要するに中國立國の原則は、總理創製の三民主義である。これは動搖、移易せしむべきものではない。中國民族は既に一致覺醒して來た。絶對的に團結して來た。自ら不偏不倚の國策を堅守するであらう。全民族の力量を集中し、自衛、自助、以つて暴力に抗し危亡を挽救せねばならぬ。中國は單に國家民族の生存を保證するため抗戦するのではなく、世界の和平と國際信義のために奮闘するものである。これは世界の明達之士の深く諒解してゐる所である。

事變初期に於ける黨の措施

一九三七年七月七日、抗日戦線の一翼である第二十九軍に依つて、蘆溝橋事件が起された。それは『他の西安事件』である。といふのは、この兩事件の背後に、ともに中共側の『士兵工作』があつたからである。

蘆溝橋事件に於いては、士兵工作は舊中共青年團系及び學生を通じて行はれた。北京は學問の都であり、學生がその重要な社會層を成してゐる。尖鋭なインテリゲンツィアである彼等は、文學革命、五・四運動（一九一九年）以來、常に反帝國主義運動の先頭に立つて來た。抗日人民戰線運動に於いても、眞に全國を湧き上らせたのは、彼等であつた。一九三五年十二月の彼等の大デモは、全國的に大影響を與へたものであつた。かうした學生の背後に、舊中共青年團系があつた。彼等は清華大學、北京大學、交通大學を根據として、民族解放先鋒隊、學生救國聯合會、文藝座談會、新文字研究會、北平文化界救國會、北平婦女救國會等の組織が出來、抗日宣傳に努力してゐたが、就中その主力を傾注したのは、第二十九軍將兵の抗日情緒を煽動する工作で、そのために軍事委員會が設けられ、それに屬する尖鋭分子は、嚴重な警戒を潜つて、盛んな活躍を續けて來たのである。上層幹部はとにかく、兵士及び下層幹部が、この煽動に乗つてゐたことは疑ふべくもない。

第二十九軍そのものの特殊事情も見のがしてはならない。軍長は宋哲元だが、精神的には馮玉祥の軍隊である。馮は嘗つては蘇聯の支援を受けたことがあり、實際に抗日戰爭

をやつたこともあり、後には南京政府内に於ける聯蘇抗日派の巨頭として、又人民戰線派のシムパとして、時々臆面もなき抗日演説をやつてゐた男である。その影響を受けてゐた第二十九軍である。反日的なのは怪しむに足りない。のみならず宋哲元でさへも、一再ならず反日滿的軍事行動をやつたことがあり、冀察政權成立後に於いても、この軍に依つて起された反日的行動は、實に二年間十數件に及んでゐる。實際この軍は、南の第十九路軍と並んで、抗日の經驗を有する軍隊であり、事變の點火者となつたのは當然である。

第二十九軍背後に於ける中共の、かくのごとき年餘の經營が成功して、極東サラエヴォの一彈が投ぜられると、中共は七月八日附を以て左の通電を發し、第二十九軍を擁護するとともに、即時對日決戰のため、國・共兩黨の合作を主張し、同時に毛澤東、朱德等の名義を以て、蔣介石、宋哲元に同様の趣旨を打電した。

七月七日夜十時、日本軍は蘆溝橋に於いて中國軍馮治安部隊に對し攻撃を開始し、馮部隊の長辛店への撤退を要求した。日寇の本挑戰の結果が、擴大されて大規模の侵略戰爭となるか、或ひは外交壓迫の基礎を作り、以て將來の侵略戰爭への導入を企圖せるかに論なく、日寇の平津・華北武裝侵略の危険は極端に悪化した。日本の對華新認識論の空談は、中國に對する新進攻のカムフラージ

に過ぎない。中國共產黨は早くから全國同胞に對しこの一點を指摘して來たが、今やこの煙幕は揭破せられ、日本帝國主義武力侵略の危険は全中國人の面前に迫つて來た。全國同胞よ！ 平津の危急、中華民族の危機は、唯全國民族の抗戰實行に依りてのみ出路があるのだ！ 我等は直ちに日軍に徹底的反撃を與へんことを要求する。同時に即時この大事變に應ずる準備をしなければならぬ。全國人民上下を問はず、日寇と和平苟安の希望及び姑息手段を即刻拋棄せねばならぬ。全國同胞よ！ 我等は馮部隊の英雄的抗戰を讚美且つ擁護し、華北當局の國土と共に存亡せんとの宣言を擁護せねばならぬ。我等は宋哲元將軍が即刻動員し、二十九軍全體が前線に赴き抗戰せんことを要求する。我等は南京政府が即時適切に二十九軍を援助し、並びに全國民衆の愛國運動を開放し、抗戰の輿論を昂揚し、全國海陸空軍を動員して抗戰を準備し、中國内に潜伏する漢奸、賣國分子及び一切の日寇のスパイを肅清し、後方を安んぜんことを期するものである。我等は全國人民の全力を盡して神聖なる抗日自衛戰爭を援助せんことを要求する。我等のスローガンは、武装して平津を衛せよ！ 華北を衛せよ！ 日本帝國主義が寸土たりとも中國領土を占領するを許さず！ 國土保衛のため最後の一滴の血を流さん！ 全國同胞、政府、軍隊共に團結し、民族統一戦線の堅固なる長城を築き、日寇の侵略に抵抗せよ！ 國、共兩黨は親密に合作し、日寇の新進攻に抵抗し、日寇を中國より驅逐せよ！

翌九日には、黨の各級黨部に對して、(一)宣傳工作の積極化、(二)各種抗戰團體の組織、(三)義勇軍組織を指令し、つづいて『華北武装戰略』を擬定し、周恩來をして廬山に蔣介石を訪はしめ、共產軍の北支出動に關する打合せを行はしめた。更に七月十五日、朱德の名を以て『對日抗戰を實行せよ』といふアヂ論文を發表、七月二十三日には黨中央の『抗戰宣言』と同時に毛澤東の『日本帝國主義の進攻に反對する方針・辦法・前途』と題するアヂ論文が發表された。

以上を蘆溝橋事件の應急措置とし、その後も續續指令を發して抗戰を指導した。その主なるものを擧ぐれば左の如くである。

- (一) 抗日救國十大綱領 (黨中央八・一五)
- (二) 中日戰爭の目前の形勢と任務の宣傳鼓動大綱 (黨中央宣傳部八・一五)
- (三) 日本帝國主義侵略の新段階と中國國民奮闘の新時代 (陳紹禹八月下旬)
- (四) 國・共兩黨統一戦線成立後中國革命的迫切任務 (毛澤東一〇・三〇)
- (五) 中國民衆の抗日闘争と蘇聯に於ける社會主義大革命 (陳紹禹十一月)
- (六) 對時局宣言 (黨中央一二・二五)

右の中最重要なのは、八月十五日黨中央の發表した『抗日救國十大綱領』である。その全文は左の通りである。

一、日本帝國主義打倒

對日絶交し日本官吏を驅逐し日本探偵を逮捕し、日本帝國主義の在華財産を沒收し、日本外債を否認し、中日條約を廢棄して華北と沿海各地を保衛するために徹底的に抗戦し、平津と京北を奪回するためにあくまでも血戦し、日本帝國主義を中國より驅逐し如何なる動搖・妥協にも反對す。

二、全國軍隊の總動員

全國海陸空軍を動員して全國抗戦を實行し、單純なる防衛的消極的作戰方針に反對し獨立自主的積極的作戰方針を採用し經常的國防會議を建立し、國防計畫と作戰方針を討論決定し人民を武装して抗日的游撃戰爭を發展せしめて主力軍の作戰に呼應せしめ、軍隊の政治工作を改革し指揮者と戰鬥員を團結一致せしめ、軍隊の積極性を發揚し東北人民革命軍東北義勇軍を援助して敵の後方を攪亂し、一切の抗戦軍隊の平等待遇を實現し全國各地軍區を建立し、全國民を動員して戰闘に参加せしめ傭兵制度を義務兵役に改むるを要す。

三、全國人民總動員

全國人民は漢奸を除く外は總て抗日救國の言論、出版、集會、結社及武装抗日の自由を有す。一切の人民の愛國運動を束縛する法令を廢棄し、一切の愛國的革命的政犯を釋放し黨禁を解放し、全國人民を動員して抗戦に参加せしめ力ある者は力を、金錢あるものは金錢を、銃あるものは銃を、智識あるものは智識を提供することを實行し、蒙古人、回教族及其他の小數民族を動員して民族自決の原則の下に共同抗日せしむべし。

四、政治機構の改革

直に人民を代表する國民大會を召集して民主的なる憲法を通過し、抗日救國方針を決定し國防政府を選挙すべし。

國防政府は必ず各黨各派及び人民團體の革命分子を吸収して親日分子を排撃すべく、國防政府は民主集中制を採用す。國防政府は民主的なると同時に集中的なるべし。

國防政府は抗日救國の革命政策を執行し、地方自治を實行し貪官汚吏を排斥し廉潔なる政府を建立するものとす。

五、抗日的外交政策

領土主權を喪失せざる範圍内に於て、一切の日本の侵略主義に反對する國家と反侵略同盟及び抗日軍事互助協定を締結し、和平戦線を擁護し、獨、日、伊侵略戦線に反對し、朝鮮、臺灣及び日本國內の勞農大衆と聯合して日本帝國主義に反對す。

六、戦時の財政経済政策

財政政策は金銭の有るものは金銭を出し、漢奸の財産を没収して抗日経費とするを原則とし、経済政策の整頓と国内生産を擴大して農村経済を發展せしめ、戦時農産品の自給を保證し國貨を提唱し土産品を改良し日貨を禁絶し奸商及び投機操縦を取締る。

七、人民生活の改良

工人、農民、職員、教員及び抗日軍人の待遇を改善し、抗日軍人の家族を優待し苛捐雜税を廢し、租税を減額し利息を引下げ、失業を救済し糧食を調節し災害を救済す。

八、抗日的教育政策

教育の舊制度と舊課程を改め、抗日救國を以て目標とする新制度新課程を實行し、普遍的義務的にして學費免除の教育方案を實施し、人民の民族的自覺の程度を向上せしめ全國學生の武裝訓練を實行す。

九、漢奸、賣國・親日派を肅清して後方を強化す。

十、抗日的全民國結

國・共兩黨の徹底的合作の基礎上に於いて、全國各黨各派各界各軍の抗日民族統一戦線を建立して抗日戦争を領導し、至誠團結共に國難に赴くべし。

宣傳陣の壟斷

宣傳は中共の専門中の専門で、事變發生するや、黨影響下に抗戰・抗敵・救亡・救國・戰特工作・戰時服務・戰地工作・漢奸狩り等の名目を冠した抗日團體が、四ヶ月くらゐの間に、上海だけで百二十餘も成立した。これらを組織分子から見ると次の通りになる。

(イ) 文化界、(ロ) 教育界、(ハ) 學生、(ニ) 職業界、(ホ) 工界、(ヘ) 農界、(ト) 兒童、(チ) 劇界、(リ) 美術界、(ヌ) 基督教信者、(ル) 紅卍教徒、(ヲ) 海員、(ワ) 各省同郷會、(カ) 青年、(ヨ) 婦女界。

工作の方法は大體次ぎのやうである。

- (一) 文字に依る宣傳。(1) 日報、(2) 月刊、(3) 旬刊、(4) 週刊、(5) 三日刊、(6) パムフレット、(7) 壁報、(8) 傳單等。
- (二) 講演に依る宣傳。(1) 時事講演、(2) 放送等。
- (三) 繪畫に依る宣傳。(1) 繪畫、(2) 漫畫、(3) 寫真畫報、(4) 映畫等。
- (四) 歌詠に依る宣傳。(1) 歌詠、(2) 活劇等。

- (五) 救護。(1) 救護工作團、(2) 慰問品、(3) 傷兵慰勞、(4) 失業者救濟等。
- (六) 民衆教育。
- (七) 捐募(獻金)。

これを人的に見れば郭沫若、茅盾、章乃器、潘漢年、鄒韜奮、王造時、左舜生、諸青來、鄭振鐸、沙千里、錢俊瑞、史良、潘大逵、王曉籟、陶百川、金仲華、顧執中、錢亦石、胡愈之、吳清友、宋慶齡、何香凝、楊虎、杜月笙、潘公展、劉湛恩、王芸生等であり、團體としては上海各界抗敵後援會が最大で、宣傳機關としては郭沫若等の執筆した『救亡日報』が代表的だつた。意外な効果を示したのは、漫畫と寫眞畫報だつた。

コミンテルンの動き

支那に於いて強力なる抗日人民戦線を結成せしめ、依つて以て對日戦争準備の一環を完成しようといふことは、一九三五年以來コミンテルンの一貫せる方針である。同年七月八月のコミンテルン七全大會決議にいふところの、

『もし弱小なる一國が、その民族的獨立を破壊し、又はその國土を略取しようとする強大な一國、

或は數國から攻撃を受ける場合、假令この被攻撃國がブルジョア國家であつても、その戦争は「民族解放戦争」と認むべきであつて、その國の勞働階級は、その國のブルジョアの戦争遂行を妨害してはならない。全共產黨員は、植民地、半植民地的被壓迫國家、特に支那共產軍の日本その他帝國主義者、並びに國民黨に對する民族解放戦争を積極的に支援する義務がある。特に中國共產黨は、この民族解放戦争戦線を擴大し、日本その他帝國主義者の強盜的行爲に對し、抵抗し得べきあらゆる民族的力量をこれに集中しなければならない。』

とは、正にコミンテルンの對支方針の最高指導原理であり、これを頭の中に入れて置けば、爾來今日までの彼等の措置が掌を指すがごとく判るのみならず、今後の動きをも察することが出来る。

この指導原理に基づき、コミンテルンは、その支那に於ける手先きたる中國共產黨を通じて間接に、或は自づから手を下して直接に、周到な措置を講じた結果、抗日人民戦線は現實に結成せられ、更に西安事件に因つて、さきに敵視した國民黨までも戦線に引入れ、人民戦線を民族戦線に變ぜしめた。かく全國的抗日態勢の整備せられた折柄、蘆溝橋事件の勃發を見たのであるから、彼等の欣喜雀躍振りは想察の外でない。果然事變後一週日を

出でざるに、コミンテルンの指令は櫛の齒を引くがごとく中國共產黨に達した。その要點は左のごとくである。

- (一) あくまで局地解決を避け、日支の全面的衝突に導入せねばならぬ。
- (二) 右目的貫徹のため、あらゆる手段を利用すべく、局地解決(例へば北支を分離せしめることに依つて戦争を回避するの類)、或は日本への譲歩に依つて、支那の解放運動を裏切らうとする要人を抹殺してもよい。
- (三) 下層民衆階級に工作し、これをして行動を衝起せしめ、國民政府をして戦争開始のやむなきに立ち到らせることも必要だ。
- (四) 黨は對日ボイコットを全國的に擴大しなければならぬ。日本を援助せんとする第三國に對しては、ボイコットを以て威嚇する必要がある。
- (五) 共產軍は國民政府軍と協力する一方、バルチザンの行動を採るべきである。
- (六) 黨は國民政府軍下級幹部、下士官、士官並びに大衆を獲得し、國民黨を凌駕する黨勢に達せねばならぬ。

中共はこの指令に基づき、代表周恩來をして蒋介石と會見せしめ、國共合作、共產軍改編を主題とする申入れをなさしめた(七月十三日頃?)。その結果として現はれたところ

は、政治犯釋放、共產軍改編等で、最後に九月下旬の國・共合作正式成立となつたのである。その他の工作を示せば、コミンテルンの工作としては左の諸項が擧げられる。

- (一) 中國共產黨に對する諸種の指令。前記、蘆溝橋事件直後の指令を繼續し、機に應じて諸種の指令を發した。
- (二) 中國共產黨を通じ、中共の名を以てする支那民衆への呼掛け。これは第二節に於いて敘述したところである。中共中央、北方局、宣傳部、毛澤東、陳紹禹、朱德等の名を以て發表されるのである。
- (三) 在支宣傳機關の操縦。
- (四) 宣傳員、聯絡員の派遣。在蘇支那人學生の歸國などこの意味である。
- (五) 國際的反日宣傳。米、佛等の國の共產黨員をして、反日宣傳デモ等を行はせた。

ソ聯邦政府の工作としては、次ぎのやうなものがある。

- (一) 在支蘇聯官憲の外交上の助言。
- (二) 不可侵條約の締結。八月二十一日國民政府と駐支蘇聯大使との間に調印。その要點は、(イ) 不戰條約の原則を確認し、互ひに不侵略を約す。(ロ) 双方の一國が第三國の侵略を受くる

場合、他の一國は當該第三國に協力を與へず。(ハ)本條約は以前締結せる二國間及び多數國間の條約に影響を與へず。(ニ)調印の日より效力を發生し、五年間有效とし滿期六箇月前に廢棄を通告せざる時は、更に二年間有效、爾後これに準ず。といふに在る。本條約の背後に武器、人員の供給に關する密約あるべきは想像の外ではない。

(三)顧問、教官、指揮官、將校(砲兵大隊長等)、戰車専門家、醫師、技術員、飛行士等の派遣及びその參戰。

(四)對日作戰指導。

(五)外蒙の軍事的、政治的強化。

(六)武器軍需の供給。各種飛行機、重砲、高射砲、各種火砲、機關銃、拳銃、戰車、手榴彈、彈藥、防毒面、毒ガス、水雷艇、機械水雷、自動車、トラック、ガソリン、モビール・オイル等。

(七)同上購入の斡旋。

八路軍と新四軍

蘆溝橋事件勃發後、中共代表周恩來と蔣介石との間に行はれた交渉に依つて、共產軍が國民革命軍に改編されたことは、すでに前述したところである。中共軍事首領朱德が第八

路軍總指揮に、彭德懷が同副指揮に任ぜられたのが一九三七年八月二十二日、朱・彭が通電を發して就職したのが同二十五日であつた。

第八路軍改編當時に於ける共產軍の兵力に關しては、種種の説があつて一定しないが、大體朱・彭軍が約五萬、これは太原西方地區に集結してゐた。次ぎに上海戦線方面に賀龍軍約一萬が第四路軍に屬してゐた。江西には項英・陳毅軍が約一萬殘留し、福建・廣東省境には張鼎丞軍が第五十七師に屬してゐた。その他浙江・福建・安徽・江西省境の劉英軍、江西・湖南省境の傅秋濤軍、湖北・安徽・河南省境の高俊亭軍、及び陝北根據地留守部隊一萬があつた。合計約十萬、その七割五分が第一期に改編されたのである。

第八路軍は後國民革命軍第十八集團軍と改稱され、朱德が總司令に、彭德懷が副總司令となり、以下政治部主任王稼齋、第一一五師長林彪、第一二〇師長賀龍、同副師長蕭克、同政治委員關向應、第一二九師長劉伯承、同副師長徐向前、同政治委員鄧小平、陝甘寧邊區留守主任蕭勁光といふ顔觸れとなつてゐる。

八路軍の兵力は、前記の通り約七萬くらゐであつたが、抗戰半年後の一九三七年末には、もう十萬を突破したとの情報が當時あつた。それが一九三八年の抗戰二週年當時には、二

十萬以上に増加し、今日では三十萬と觀られてゐる（東日淵野北京特派員の通信に據る。東日一九四〇・一一・一三收載）。これは正規軍であつて、外廓軍隊を加ふれば、約九十萬に達するであらう。草野文男氏の計算に據れば、一九三九年春に於いて、正規・外廓兩軍を合して、河北十萬、山西十二萬、山東七萬、河南五萬、陝北九萬、計約四十三萬とあつた。それから約二年経つてゐる今日、淵野氏の計算も過大ではあるまい。

江西方面に残留してゐた項英軍は、主力軍との間の聯絡が不完全で、西安事件の發生、國・共合作交渉の進捗を知らず、依然討伐軍の攻撃にさらされてゐた。項英が西安事件を知つたのは、一九三七年の六月頃だつたといふことである。

蘆溝橋事件後も、討伐は續行された。然し南京政府が最後の抗戦を決心すると、項英軍をも改編することとなり、九月項英と熊式輝（江西主席）が會見、次いで軍政部長何應領代理と項とが會談した結果、十月二日國民革命軍新編第四軍（新四軍と普通略稱する。）として改編されることになつた。

兵力は五千に減ぜられ、それから出發して編成に着手し、一九三八年一月から五月までの間にそれを終つた。軍長葉挺、副軍長項英、參謀長張雲逸、政治委員袁國平、第一支隊

司令陳毅、第二同張鼎丞、第三同譚振林、第四同戴季英、第五同羅炳輝、隨軍服務團長陳笠雨といふ顔觸れである。

改編後二三ヶ月で二萬になり、今日では少くとも八萬、多く見る人は二十萬といつてゐる。これは外廓軍隊をも入れての計算であらう。

次に掲げるのは、東日淵野北京特派員の通信で、一九四〇年十一月十三日の東日紙上に掲載せられたものである。八路軍と新四軍、並びに中共の動向に關して、最近出色の記事と想はれるので、ここに轉載して本文の不備を補ふこととした。

日獨伊三國同盟後の世界情勢、引つづく日蘇交渉の經過などの客觀的條件を織りこんで東亞政局はただならぬ氣配のうちであり、なかんづく重慶側抗日體制の動向は最も注目されるのであるが、最近の中國共產黨、軍の北支攻勢は特に活潑であり、建川・モロトフ會談をめぐる日蘇交渉とともに、中共のこの積極的活動は將來の一つの動向を暗示するものとして注目に値する。去る七月二日から五日間、四川の山奥で開かれた重慶政權の七

中全會における支配的傾向は、英佛の援蔣力の低下と共に、外交路線の轉換が論議され、「聯米親蘇」方策を決定、すでに米國における宋子文、蘇聯の邵力子の策謀などすでに周知の事實である。かくの如き外交路線の轉換に従ひ、國內抗日體制の轉換もこれもまた必然の勢ひにあり、國共合作の内容に重大な變化があつたことは全支をみなざる具體的な事實によつて明かであるが、最近記者が支那側から入手した確實な情勢によつてその内容と経緯が判明するに至つた。七中全會における國共合作の空氣は、重慶側の著しい傾蘇政策と中共のあくなき進攻のため國共分裂か、抗日體制の堅持か、といふ最後のどたん場に追ひこまれ、蔣介石側は一大讓歩のやむなきに至り、辛うじて局面を轉換彌縫することに成功した。即ち重慶側から何應欽、白崇禧、陳誠、中共側から周恩來等から成る國共問題委員會なる秘密會を開き、國共問題調整辦法九ヶ條なるものが決定されたが、その内容は左の如くである。

- 一、中共の軍、政、黨三機關の北華方面における自由なる活動權の賦與。
- 二、中國共產車の冀、魯、晋、察、陝方面即ち全北支、蒙古における獨立駐屯權を認め、兵力擴大權を許す。

- 三、中共黨下の新四車を魯皖地區より黄河以北に撤退。
- 四、陝西の西安以北における中央軍政機關は西安以南に撤退、從來の陝甘寧邊區政府は廿一縣を十八縣として中共の指令する政權が支配する。
- 五、中共軍の黄河以南地區の自由活動を嚴禁、さらに在重慶の八路軍辦事處は許可す。
- 六、中共は華北各地で銀行を設置し得、その他の地方は許さず。
- 七、中央軍に對する武器彈藥および糧食の輸送に當つてはどこを通過するも中央軍は押收抑留するを許さず。

八、中共は中央の軍事、政治、經濟、外交などに對し意見の陳述は許すも干涉は許さず。

九、中共黨員は重慶政府機關で赤化工作を許さず。

等を中心とするもので、いづれも重大な事項を含み、驚くべき中共の劃期的進出であり、このことは明かに蔣介石の著しき質的低下を意味し、重慶抗日體制の將來を暗示するものである。かかる中國共產黨の飛躍的進出と重慶政權の大轉換により、抗日民衆は今や明かに共產主義か民族主義のうちいづれかを選ぶべき岐路に追ひこまれた。新和平派の擡頭また必須である。今や抗日支那は、これが契機となつて全面赤化への路をスタートしたものと

で、北支は由由しき重大破局に直面することになった。日本の南進政策を見越し、その後工作の意義も多分に含めて北支を中國共產黨に賣渡す暴舉をあへてし、對蘇迎合の政治的ゼスチュアとも見られ、苦悶する重慶の姿がありくと看取出來る。以上の如き中共の北支領導權、兵力擴大、銀行の開設、國民黨中央軍の北支からの全面的撤退等はすでに着着と實行に移され、中國共產黨の機關紙新華日報華北版の如きも連日、その野望の着着たる具體化を傳へ、北支ソヴェート政府建設の近きにあることを強調してゐる。

すでは北支においては事實上國民黨組織は有名無實化し、中央軍は黄河以南に撤退し、中共は僅かに閻錫山、沈鴻烈、傅作義等に對する關係上、統一人民戦線の名においてあらゆる政策を實施し、晋察冀邊區政府、晋冀豫邊區政府、冀察熱邊區政府の外、蘇魯豫邊區黨委員會、冀魯邊區黨委員會等の桃色政權を樹立、この行政區毎に中共第十八集團軍（八路軍）の軍區組織を設定、相當露骨なる蠢動を試みてゐたものである。中共の北支領導權の問題は、その後の諸情報によれば着着と具體化しつつあるもの如く、八月初旬に至り重慶政府命令として偽河北省主席に共產第十八集團總司令朱德、偽察哈爾省主席に同集團軍副司令彭德懷が任命された。現在偽山西省主席は閻錫山であるが、僅かに山西軍を率ゐ

て山西省西部離石一帶にその虚位を擁するにすぎず、これによつて從來共產軍の游撃地區たりし山西、河北、察哈爾の三省は、政治的に公然と重慶側から中共側に讓渡されたもので、従つて北支における抗日政治機關、重慶側の藍衣社、C・C團に至るまで中共側に吸収されつつある。さらに中共その後の實情を見るに、朱德は八月山西に入り、自ら主力を太原南方潞安北方山岳地帯に集結し、主目標を外蒙と直通する赤色路の再建に置き、活潑な行動に移りつつあり、これがため察南東部から滿州國境多倫附近を経て外蒙に通ずる豫定路、晋北西方地區から巴盟、涼城、陶林地區を経て外蒙に通ずる豫定路、即ち晋察冀邊區政府地帯、陝北から連なる晋北、冀北の三北地帯にその蠢動が行はれ、軍、黨、行政の三位一體工作は全面的赤化の危機を昂めてゐる。

中共兵力擴大權の容認は、かつて一九三八年西安軍事會議席上、朱德は八路軍の三個師を三軍に擴充方を要求したが認められず、僅かに晋察冀、陝甘寧、冀熱の三軍區の設定と三十萬元の軍費を承認したのみで今日に至つたが、その軍費を三倍の九十萬元とし、その兵力に至つては飛躍的動員を見たもの如く、第一線において皇軍の交戦せし部隊を見るに新旅團が推定十五個旅に増加せるが如くである。八月以後北支に展開された共產八路軍

の實兵力は約百五團とみられ、しかもこの共產軍が軍力と黨の政治的ゲ・ペ・ウを背景とし、軍、黨、政三位一體の政治工作により民衆蜂起組織が或る程度の完成を見つつあり、八月の百個團（日本の百聯隊）運動に引きつづき九月末から二百個團運動を起し、皇軍の斷乎たる進撃を避けながら游撃に出沒してゐる。かつて國共磨擦の本場としてよく一部人士から今にも國共合作が崩れる一つの理由でもあるものの如くいはれた山西の國共磨擦もパツタリ跡を絶ち、山東における徐向前軍と石友三、沈鴻烈軍との磨擦が取沙汰されるこの頃である。これは山西における中共工作が完全に勝ちを制し、國民黨が總退場したことを物語るにすぎない。山東において徐向前軍に完全に壓倒されがちな石友三、沈鴻烈軍は對抗上やむを得ず對民衆工作において中共と同じ方策をとつてゐる實情にある。中國民族主義を假面にかぶつた中共の何たる滲透力であらうか、事態は一刻の猶豫も許さぬほどに深刻になりつつある。

記者は事變當初毛澤東、朱德、彭德懷等が手兵僅かに三、四千を率ゐて山西省五臺山麓の各部落に潜入、閻錫山や國民黨に遠慮しながら活躍した當時と比べ、現在僅か數年にして中共正規軍卅萬、その他民軍、自衛軍六十萬に膨張し、今や中共軍百萬を目標に民衆動

員に狂奔しつつある事實に直面して感なきを得ない。しかも共產軍の食糧、兵器は自給の域に達し、現在八路军の蟠踞する地區の物資の現地補給の有様は抗日民族意識に訴へる工作を先行させ、『抗日公糧』『抗日公債』等の名において民衆の不滿を押へ、軍需を満たし銀行券の發行、合理負擔の實施、減租、減息等によつて抗日民族意識に訴へてゐる。兵器類は晋冀豫邊區地方の如き迫撃砲、重輕機關銃、手榴彈は殆ど全部を補給製造する工廠廿二に達し、小銃彈、機銃彈のみが洛陽、西安から補給されてゐる實情にある。

現在における實際上の重慶政權の北支に對する壓力は、黄河以南河南を中軸とする第一戰區衛立煌、鄭州附近の孫桐萱軍、順德近傍の何柱國軍、山西西南第二戰區閻錫山軍、五原、寧夏地區の朱紹良並に傅作義の第八戰區、山東の于學忠、魯蘇戰區の沈鴻烈等の外周兵力にすぎず、しかもこの外周蔣系軍の間隙を縫つて、冀南作戦は中共は山東より江蘇南部へと南下の形勢にあり、さきに北上を要求し重慶側より一蹴された安徽、江蘇、浙江、湖北、湖南、福建の中支一帯に蟠踞する新編第四軍と完全に縱斷的連絡を完成するに至り、新黄河縱斷運河等をその兵站動脈とし赤色縱斷面の結成に蠢動、從來虎視眈々として西北に蟠踞、北支に邊區政府を設け赤化の貯水池とした中共が公然と政治的に開放され、中南

支を縦断し、此外蒙赤色路線の再建を狙ひ赤色T字型地區を完成、しかも十月初旬から十四日間にわたり、北支某所において中共北方局と共産八路軍の第一回合同大會を開き、前述の大綱に従ひ細目の暗躍を計畫するなど、北支非占領地區は實に歴史的重大なる危局に直面するに至つた。かつて事變當初北支にあつた記者が三年ぶりに再び中支から北支にやつて來ての印象は皮肉にも「政治的危機」といふ一點において餘りにもその當時と似かよつた條件が刻々と濃化しつつあり、今にして斷乎たる決意をもつて對策を講ぜざる限り東亞新秩序の將來に重大なる禍根を残すであらうといふことを痛感するのである。

總 結

蘆溝橋事件は中共をして一躍支那の立役者たらしめ、爾來ここに滿三年半、その恣にする跳躍はますます加はり、抗日戦線に於ける比重はいよいよ重くなつて來てゐる。かかる地歩に至るまでの中共の動きは、それこそいはゆる千頭萬緒であるが、要約すればほぼ次ぎのやうになるであらう。

(一) 蘆溝橋事件の應急措施として、對日即時開戦を呼號し、コミンテルンの指令を奉じて、支那

を長期抗戰へ誘導した。

- (二) 國・共合作交渉をいよいよ急調に進捗させ、終に合作に成功した。
- (三) かくして、國・共合作を樞軸として成立した抗日民族戦線をどこまでも持續し、且つ補強することに努力し、従つて國・共分裂を避けることに心をを用ひた。
- (四) 共産軍を改編し、それをして抗日戦に参加せしめ、同時にその實力の保全並びに擴大に留意し、國民黨軍と平衡する兵力獲得を指標した。
- (五) 邊區の名の下に實質上のソヴェート區(陝甘寧邊區)を鞏化し、國民黨をして一指をも染めさせず、且つ共産軍の游撃に依つて、所在に游撃根據地(晋察冀邊區等の桃色政權)を創建した。
- (六) 蘇聯の對支援助をますます積極化することに努め、蘇支不可侵條約の締結、武器軍需の供給を引き出すことに成功した。
- (七) 國・共分裂の場合、ただちに社會革命に轉ずる用意を怠たらず、そのために民衆獲得に注意し、初歩的民意機關たる國民參政會に參政員を送つて活躍せしめ、憲政問題に積極的熱意を表示し、尙宣傳陣をも壟斷した。勿論黨勢擴張をも忘れなかつた。

中共の支那事變に於ける行動綱領は、ほぼ右のやうであつた。今後の動きもこの範疇を出でないであらう。

四、邊 區（實質上のソヴェート區）

邊區とは？

現在の支那の共産運動は、黨・區・軍の三位一體を以て推進せられてゐる。區はすなはち『邊區』で、軍はすなはち共産軍である。

邊區といふ言葉の意味はよく判らないが、中共はもとからこの言葉を慣用してゐた。ソヴェート時代、各地のソヴェート區に、例へば『鄂豫皖邊區』(湖北・河南・安徽省境ソヴェート區)といふ風な名を命じてゐた。二省乃至三省に跨がるやうな地域に出來たソヴェート區には、皆何何邊區といふ名がつけられてゐた。

省境ソヴェート區といふ意味に使はれてゐた、この邊區といふ言葉を、少し意味を變へて費用してゐるのが現状である。ソヴェート區を取消したといふ建前に今日ではなつてゐるので、邊區はすなはち『省境地區』といふ意味しか、公式には持つてゐないのであるが、中共實際の氣持ちでは、依然として省境ソヴェート區なのである。

かくのごとき、實質上のソヴェート區であり、支那赤化の總根據地であり、中共側で抗

邊

區

邊

區

日・民主の根據地と稱してゐるところの邊區は、目下幾つあるかといふと、大體六つある。陝甘寧、晋察冀、晋冀豫、冀察熱、蘇魯豫、冀魯各邊區がそれである。就中歴史的に觀て最も古く、地理的には赤色ルートの中繼地點であり、政治的には中共中央の所在地である陝甘寧邊區がその代表的なものであり、且つその内情も比較的知られてゐるので、以下主として陝甘寧邊區に就いて叙述する。

陝甘寧邊區の歴史

現在陝甘寧邊區のある陝西省北部地方は、僻遠の地ながら支那共産運動の一中心地で、同省共産黨の首領、故劉子丹に依つて陝甘邊區、陝北區の兩ソヴェートが、一九三〇年頃創建せられてゐたのであつた。そこへ一九三五年、江西の本據を逐はれた共産軍の主力が移動して來、本據を据へることになつたのである。すなはち同年『中央ソヴェート西北辦事處』が設立され、黨中央の直接指導下に立つこととなつた。

一九三七年三月三日中央ソヴェート西北辦事處が改組され、はじめて陝甘寧邊區政府と名乗ることになつた。これより先、一九三六年十二月十二日の西安事件解決の際、蔣介石

はその生命と引き替へに、中共に對して特別地區の設置を許し、中共も亦土地沒收等の政策を抛棄することを約し、ここにソヴェートを廢止して、國民政府に隸屬する地區に改組することの約束が出来てゐたのであつた。同年五月、邊區中共黨一全大會が開かれ、七月七日の支那事變後、九月六日の行政院會議で、邊區の存在が認められたのである。

但しこれは中共側のいふところで、果して國民政府の承認を経てゐるかどうかは判らない。ただ蔣の默認程度のもは得てゐたらしい。それを根據として、勝手に勢力範圍を擴げ、結局今日の陝甘寧邊區二十三縣をデッチあげ、これを邊區だ、八路軍の駐防區域だといふ風に宣傳し、既成事實を認めさせようとしてゐるものであらう。

邊區の範圍・人口

邊

陝甘寧邊區の範圍は、二十三縣といふことになつてゐるが、その二十三縣が、どの縣とどの縣であるかについては、ハッキリとは判らないのである。然し、推定の基礎となるものはないわけではない。

區

その一つは、一九三九年十二月二十五日附で、第十八集團軍總司令朱德、同副總司令彭

邊

德懷以下の連名で、蔣介石等に宛てて發した電報である。その冒頭に、次ぎのやうな一節がある。

區

『陝甘寧邊區二十三縣は、民國二十五年（一九三六年）十二月、西安事變の和平解決後、蔣委員長に依つて承認せられた區域である。この區域内には隴東（甘肅東部）の慶陽、合水、正寧、寧縣、環縣、鎮原、陝北の淳化、栒邑（別名三水）、鄜縣、洛川、安定、清澗、綏德、米脂、吳堡、葭縣、靖邊、定邊、寧夏省の鹽池等を包括してゐる。』

この電報に掲げられてゐるのは甘肅省六縣、陝西省十二縣、寧夏省一縣、計十九縣である。

その二は、一九三八年六月五日の『新華日報』に掲載せられた記事で、次ぎのやうになつてゐる。

- (一) 直屬縣—延安・安塞・甘泉・安定・延長・延川・古臨・保安・神府。
- (二) 關中分區—新正・淳耀・赤水・寧縣。
- (三) 慶環分區—曲子・環縣・華池・固北。
- (四) 三邊分區—靖邊・定邊・壩池。

(五) 統戰區—郵縣・清澗・綏德。

その三は、國民參政會華北視察團報告で、次ぎのやうになつてゐる（括弧内は原有縣名）。

神府（神木・府谷・葭縣）、靖邊、定邊、靖橫（靖邊・橫山）、安定、子昌（安定縣境）、清水（清澗縣南區）、綏德（清澗縣東區）、秀延（清澗・延川間）、延川、延長、延安、安塞、保安、志丹（保安縣境內）、劉子丹の紀念の意）、甘泉、甘洛（甘泉・洛川）、仁宜（宜川）、固臨（甘泉大東梁）、郵洛（郵縣・洛川）、赤明（淳化縣內）、淳耀（耀縣西北鄉・柁邑底廟鎮・淳化通關鎮）。

そこで私は、この三つの表を突き合せ、赤色首都延安を中心とし、次ぎのやうに推定した。

延安・安塞・保安・甘泉・郵縣・洛川・淳化・柁邑・安定・清澗・吳堡・葭縣・靖邊・定邊・綏德・米脂（以上十六縣陝西）・正寧・寧縣・合水・慶陽・鎮原・環縣（以上六縣甘肅）・鹽池（以上一縣寧夏）。

邊

區

然し中共側で主張してゐる勢圏は、實はこの二十三縣に止まらない。例へば前掲新華日報の表に現はれた古臨とは、甘泉・延川の各一部を合せたものだから、私の推定表に延川の一縣を追加せねばならず、同様に神府は神木・府谷・榆林・葭縣の各一部だから、

邊

神木・府谷・榆林を加へる必要がある。曲子は慶陽・固原・環縣の各一部だから、固原をも添入せねばならぬ。固北（固原・鎮戎・豫旺の各一部）、淳耀（淳化・耀縣の各一部）の解釋から、鎮戎・耀縣を容れる必要がある。かやうにして、

區

延長・延川・神木・榆林・府谷・固原・鎮戎・耀縣・橫山・宜川

の十縣を添加する時は、實に三十三縣となるのである（新華日報の表に現はれた縣名の解釋は、中保與作氏著『最近支那共產黨史』に負ふ。）

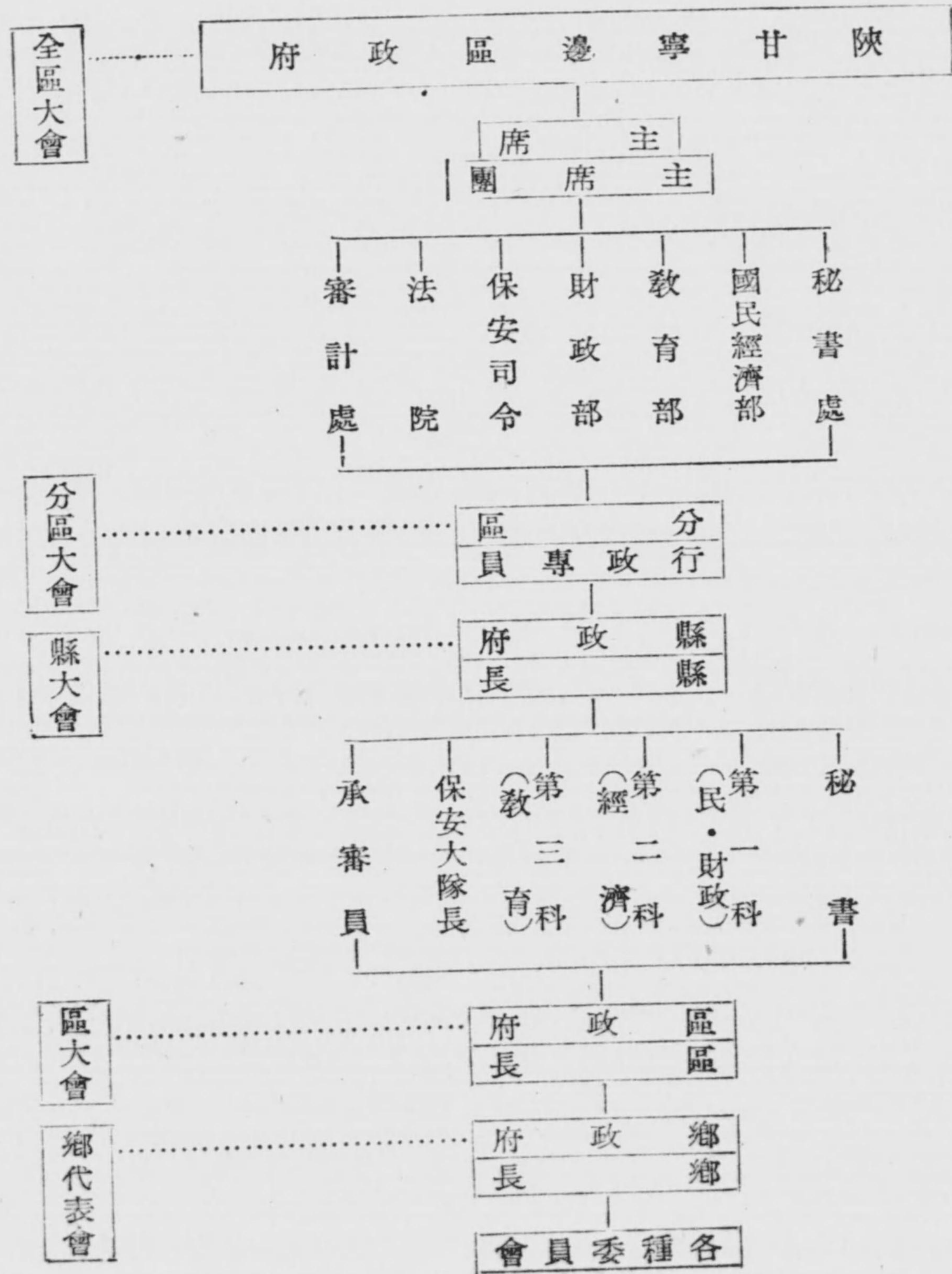
人口は百萬といはれてゐる。一説には二百五十萬とあるが、邊區政府主席林伯渠が、蘇聯誌上に發表した報告に據つて、百萬といふことにして置く。土地の大部分は黄土高原であるが、可耕地は案外廣く、延安を中心とする十八縣の可耕面積四千萬畝と推定せられ、現在耕作されてゐる九百萬畝（一畝はわが二百坪餘）を人口に割當てると、一人九畝といふことになる。

食糧、豆、棉花、石油、食鹽、畜産があり、石炭、鐵も自給に足ると、邊區主席林伯渠が自畫自讚してゐる。

政治機構

陝甘寧邊區の最高議決機關は、邊區全區大會で、その議員は普通平等選舉（十六歳以上、性別を問はない。）に依り、一九三七年十月五百名が選出された。その中の九割が共產黨員及び農民労働者である。

最高機關は邊區政府（主席林伯渠）であり、主席、主席團の下に秘書處、國民經濟部、教育部、財政部、保安司令、法院、審計處がある。地方には分區があり、行政專員がこれを統轄してゐる。その下に縣政府（首長は縣長）、區政府（區長）、鄉政府（鄉長）といふことになつてゐる。分區は數縣を以て形成されてゐるらしい。以上を圖解すると左の通りである（中保與作氏に據る。）。



邊區には中共中央があり、その中央政治局が黨の最高執行機關である。政治局總書記は張聞天、局委員は

毛澤東・朱德・周恩來・陳紹禹・秦邦憲・林伯渠・彭德懷・林彪・廖慶雲・李富春・趙容・何士全・葉劍英・王稼穡・葉挺・賀龍

の十六人である。この政治局の下に邊區委員會（書記高崗）、書記處、組織部、宣傳部、軍事委員會（主席毛澤東）、青年委員會、婦女委員會、工人委員會（書記劉少奇）等がある。財政の方面では、邊區銀行といふのをつくり（行長林伯渠）、その紙幣を流通させ、抗日捐、救國公糧、富戶捐、土地捐等二十數種の惡税を人民に課し、その稅收約百四十萬元といはれてゐる。

各種建設工作の概況

邊 一九三九年十二月延安で開かれた邊區黨二全大會（一全大會は一九三七年）で、邊區委員會書記高崗が、邊區工作に關する總括的報告をやつてゐる。それに據つて、邊區内に於ける各種工作の概況を揣摩して見よう。勿論彼等の自畫自讚であることは頭に置いて。

邊

邊區民衆はその政權参加に對する積極性を發揮し、七割以上が選舉に参加し、九割以上が區大會に参加してゐる。壯丁の八割以上が人民自衛軍に加入し、人民の四割以上が鋤奸組織に加はつてゐる。軍人及び政府工作員遺家族への生産援助も行はれてゐる。邊區周圍から數萬の民衆が移住して來た。

邊區内の留守兵團及び保安部隊は、反共分子の武力的進撃を打破り、邊區を攪亂しようとする土匪四十餘團を肅清した。留守兵團は正規兵團化し、保安部隊も游撃戰中心主義を清算して、正規兵團化の基礎を固めた。

邊區民衆は、ソヴェート時代にすでに地主の搾取並びに苛捐雜稅の重荷から解放せられたが、邊區經濟の立遅れ及び内戰の影響に因つて、大多數の民衆は依然貧窮の中に在る。邊區政府は耕地の擴大、水利の改修、技術の改良、家畜の保護、合作運動の發展等各種の方法を採用し、且つ獎勵競争、展覽等の方法に依つて民衆の生産熱意を刺戟したため、農民の生産力は高められた。戰鬥員、各機關工作員、學生、婦女も生産に参加した。勞働者の生産に對する積極性も増加し、自發的勞働時間延長の現象が見られる。

農業、牧畜業の生産は大いに増加した。耕地面積は一九三七年の八、一五〇、〇〇〇畝

が、三九年には一〇、〇七六、〇〇〇畝に増加（二割三分）した。水利の改修は三七年度の八〇一畝が三九年に八、〇一〇畝に増加（十倍）した。

工業は非常に立遅れてゐたが、ややよくなつた。個人経営手工業は倍加した。生産合作事業は四から一三七になつた。政府経営小規模工場は三から一〇になつた。毎月綿布六百疋、ラシヤ百疋、タオル二百ダースの生産能力を有する毛織綿織工場が出来た（林伯渠の蘇聯誌上に於ける報告に據ると、公營企業は紡績工場一、石油廠一、石炭礦三、印刷所三、機械修理廠一、製藥廠三、農具製造廠二、その他石鹼、セルロイド、麥粉工場となつてゐる。）

邊區商業資本は三七年以後二年半の間に十倍した。四五百元の資本から、八十四五萬元に膨脹した例もある。數十萬元乃至百餘萬元の資本を有する個人商業企業がある。

消費合作事業は各區一ヶ所の合作所が成立し、收支償ふやうになつた。加入者も増加した。

經濟建設發展のために自然科學研究院、農學校及び模範農場が設立された。

店員、手工業者の賃銀は、一九三三年當時に比し二割乃至二割五分騰つてゐる。鑛山労働

區

邊

邊者は三五年に比し三割増加。農村手工藝労働者のそれは二角から四角乃至八角に騰つた。文化水準は元來非常に低く、百人中一人、甚だしきは二百人中僅か一人の識字者しかなくつた。現在は百人中五人（一千字の文字を知つてゐる程度）くらゐまでになつてゐる。小學校數の増加は左の通りで、小學生數は二年半に十倍した（就學率は二割）。

年次	學校數	學生數
一九三七年	一一〇	二、〇〇〇
一九三八年	七七〇	一六、七二五
一九三九年	八八三	二〇、四〇一

中等學校としての魯迅師範、邊區中學は前後六百名の學生を訓練した。邊中附屬學校在學者三百名。最高學府としては抗日軍政大學（抗大）、陝北公學（陝公）、魯迅藝術學院（魯藝）、女大青訓班、中央黨校、馬列學院がある。

民衆の抗戰動員は抗戰建國綱領擁護の宣傳、討汪鋤奸鬪争の展開、國民精神總動員の實行、友軍輸送援助、邊區隣接地域への食糧供給、軍隊慰問等の形で遂行せられた（林伯渠に據れば、邊區内壯丁三萬人が八路軍補充のため動員され、少年先鋒隊への動員二萬八千。

將士への慰勞として靴下六萬足、手袋十萬對、毛織チヨッキ十萬枚を送つた。難民救済のため、重慶政府からの交附金十萬元を基礎とし、三萬元を直接救済に、七萬元を難民救済のための手工業に用ひた。宋美齡寄附の五千元を基本金とし、兒童救済院を設立した。

國民黨側の邊區觀

以上、甚だ不完全ながら邊區の概貌を描いた。晋察冀邊區等は桃色政權であり、中共が實權を握つてはゐるが、純粹の赤區ではないから省略に従ひ、最後に國民黨側で邊區をどう觀てゐるか？ について書く。

先づ、一九四〇年三月天水行營政治部で發表した『中國共產黨之不法行爲及破壞抗戰事實紀要』の中の『一、所謂陝甘寧邊區』の一節を見よう。

邊

中共は民國二十六年（一九三七年）以前に於いては、僅かに陝北の保安、安塞の一部に據有してゐたに過ぎなかつたが、抗戰後自づから擴展を行ひ、陝甘寧邊區の廣大な區域に跨及し、強いて陝北と隴東（甘肅東部）の各縣を劃して邊區とした。ここに於いて中央（重

區

邊

慶政權）及び陝西省政府は、幾たびかこれを劃して行政督察專員區とし、所轄區域に少しく變更を加へ、或ひは縮小し、以て省と關係ある行政・交通・經濟上に困難を發生せしめざらんことを期した。同時に專員區の行政人員は、邊區から推薦させるが、省政府の監督指揮は矢張り受けねばならぬこととした。かくのごとく事實を認め、人情と法律とを兼顧した最大限度の融通をしたのは、行政系統の完整を維持せんことを要求したからである。

區

然るに中共はこれを拒絶し、『邊區は蔣委員長の默認によつて設立したものだ。』と誑かり稱し、『區區たる十八縣を以て争はざるべきである。』とて中央を指責し、該區内の行政施設に對し、自づから體系を成し、中央の命令を奉行せず、省政府の派した縣長は、或ひは着任することが出來ず、或ひは職權を行使することが出來ないやうなことであつた。彼等は又縣名、縣界を勝手に改劃し、勝手に縣長を任命し、一縣に二縣長の對立を見たことも度度あつた。

邊區黨・政・軍の費用は、勝手に紙幣を發行する外、人民から徵發し、ひそかに税關を設け、ほしいままに捐税の名目を立て、救國公糧、富戶捐、房屋登記税、抗日捐、歡迎民糧、鹽税、慰勞捐、營業税、鴉片罰金、人頭税、土地捐證等數十種の多きに及んでゐる。

やや逆ふものがあるれば、漢奸、汪派、托匪（トロッキースト）等の罪名を加へて慘殺する。陝甘人民は曾つて代表を重慶に派し、苦況を泣訴したことがあり、明令を以て邊区政府を取消されたしといふ書面及び電報は、日に數十通達してゐる。

中共はなほ足りりとせず、最近はほしほしに軍隊を調動し、陝北及び毫も敵影なき隴東に兵を進め、特殊化の既成事實を造成しようとしてゐる。

次に、『處置異黨問題辦法』（一九三九年八月制定）中、陝甘寧邊區に言及せる一節を、中保興作氏（東日東亞調査會版『東亞問題研究』第一號）に據つて援く。

邊 陝甘寧邊區といふ非法的組織は、國家の統一並びに行政體制を破壊するだけでなく、力量を分散させ、抗戰を妨害する最大障礙物だから、絶対にその存在を許してはならない。陝西の延安・保安・安塞・延長・甘泉・靖邊六縣を陝西第二行政區とし、必要あれば更に甘肅の慶陽、合水、環縣の一部を劃定して一行政區とし、甘肅省政府に隸屬させ、その專員及び縣長は、第十八集團軍から推薦して、省政府の認可を経て任命することとする。

邊 區

これが實行困難ならば、目下邊區教府の實際占據してゐる區域に陝北特種行政機構を設置して、陝西省政府の管轄に屬せしめ、該行政機構の人選は、第十八集團軍から一部分推薦して、省政府の許可を経た上これを任命する。

上記區域内の一切の行政は、ことごとく確實に中央の命令を遵奉して處理すべく、特殊狀態の存在を許してはならない。

左記の諸區域は、必要に應じて軍事力量を増大し、以て地方の治安を維持する。

- (1) 陝西省府谷・神木・榆林・橫山・定邊。
- (2) 橫山から米脂・綏德・安定・清澗を経て延川に至る一帯。
- (3) 寧夏省鹽池・豫旺から甘肅省慶陽・西峰鎮・正寧・寧縣に至る一帯。
- (4) 陝西省長武から柞邑・淳化・耀縣・宜君・中部・洛川・鄜縣・宜川に至る一帯。

陝西省府谷・神木・榆林・橫山・定邊・米脂・綏德・安定・清澗・吳堡・葭縣・延川を陝西第一行政區とし、專員公署を榆林に置き、宜川・洛川・鄜縣・同官・宜君・中部・耀縣・淳化・柞邑を第三行政區とし、專員公署を耀縣に置く。

第十八集團軍の勝手に任命した河防司令、警備司令は、正式に取消すやうに命じ、わが

側より河防司令を任命して宜川から延長・延川・清澗・綏德・吳堡・葭縣・神木を経て府谷に至る一帯の河上警備を擔任せしめる。

第十八集團軍の募補區（補充兵招募區）を取消す。

陝甘兩省封鎖線内各區行政員及び縣長は、國民黨同志中から選抜任命する。右區域内に於いては地方自治を適切に實行し、縣は縣長に、區は專員に集權し、各區内の一切の黨務・政治・保安武力は、ことごとく該區專員の指揮支配を受けるものとする。

各區は現有武力の外、更に中央の規定せる編成に依つて、保安團二團宛を増加せよ。その經費は中央から補助する。

各區の保甲經費は中央から補助する。

邊

區

五、毛澤東—支那の赤い旋風

東亞の公敵

『水滸傳』を腰斬した罪人(?)ではあるが、然し警拔な批評家として、水滸を讀むほどのものがどうしても忽略することの出来ない金聖嘆が、傳中の一人物、小旋風柴進に就いて、その、小旋風といふ綽名の由來を、次ぎのやうに解析してゐる。

『旋風者惡風也。其勢盤旋自地而起。初則揚灰聚土。漸至奔沙走石。天地爲昏。人獸駭竄。故謂之旋。旋音去聲。言其能旋惡物聚於一處故也。水泊之有衆人也。卽自林冲始也。而旋林冲入水泊。則柴進之力也。名柴進曰旋風者。惡之之辭也。』

梁山泊に百八人の豪傑が聚まるやうになつたのは、豹子頭林冲が最初であるが（嚴密にいへば、朱貴等の三人がゐるが、百八人が聚まるやうになつたキツカケからいへば、林冲だといつてもよからう）、その林冲を梁山泊に紹介したのは柴進である。それで柴進に小旋風といふ綽名を與へたのだと、金聖嘆はいふのである。後に、黒旋風李逵が出て來るが、これも同様の意味で、宋江等の大量の水泊入りの機縁に、李逵がなつてゐるからだ。

——金聖嘆が推測した、施耐庵の命名の意味を今日の支那にあてはめると、毛澤東に、赤旋風といふ綽名を附けてもよささうである。梁山泊ならぬ延安（この延安も、花和尚魯智深の活躍の地として、水滸の一舞臺であるが）に支那の赤い惡物を聚めて、抗日の禍源となつてゐる毛澤東——支那の赤い旋風。

彼の共産黨員としての活躍は、もう二十年に亘つてゐる。さうして今日では、水滸に於ける小旋風、黒旋風の地位でなしに、宋江のそれに該當し、名實ともに中國共産黨の總帥である。

従つて彼に關して書かれたものは、すでに相當の量に上つてゐる。私自身も、曾つて『赤豹・毛澤東傳』といふのを、一九三六年の六月に書いてゐる。然しそれは不完全なものであつた。信憑するに足る材料が少なかつたのだ。で、その冒頭で、次ぎのやうにことわつて置いた。

『毛澤東は、支那人ぢやない。渡邊政之輔だ。』筆者に、かう眞面目にいつてきかせた人がある。「姓は朱、名は毛、彼の率ゐる共産軍は……」などと、——これは、ほんたうの話だ。ウツカリすると、本場の支那でも、何も知らぬ民衆は、さう考へてゐたかも知れない。

今日、支那共産軍の主力として、朱・毛軍の名は世界的に知られてゐるが、數年前までは、神秘的な存在、ときでは行かなくとも、それに近いものであつたことは争はれない。従つて毛澤東の経歴なども、サツパリ判らなかつたものだが、その後、共産軍の勢力増大に連れ、彼の一舉一動が、全世界の注目を惹くやうになり、彼の輪廓も、大體ハッキリして來てゐる。もともと國・共合作時代には、代理宣傳部長をやつたり、農民運動講習所長を勤めたりした男だから、決して素性の知れぬ筈はないのだ。そこで、その時代に、彼を識つてゐた人間が出て來て、彼の逸話を書いたり、人物を論じたり、この二三年に、さうした記述が、五ツ六ツ現はれた。それを材料にして書いて行くつもりだが、いづれもうしばらくしたら、又書き直さなくてはなるまいと思つてゐる。といふのは、これらの材料中、まだ少し腑に落ちぬものもあり、彼の寫真についても、二年前に見たのは、やせて頬骨の飛び出た奴だつたが、ごく最近見たのでは、眞丸に肥つて、肺病患者らしいところはちつともない、まるで別人のやうだ。こんな具合ひだから、取り敢へず、今得られる限りの材料に據つて書いて置く。

太平天國の亂を、『洪楊の亂』といつたのになぞらへて、共産軍の游撃を、『朱毛の亂』な

どと名けて、何だかバケ物扱ひにした傾きさへあつて、支那側の資料に據つたものでは、私の書いたものが關の山だつた（『世界知識』一九三六年六月號拙稿参照）。私も、書き直さうと思ひつづけながら、新材料を得ないので、手も着けないでゐた。ところが、この憾みを、エドガア・スノウ氏が補つて呉れた。氏の西北赤區踏破の産物である“Red Star over China”に、毛自身から聞き取つたのが出てゐるのである。氏は精密な調査表をつくつて、——例へば、『君は何回結婚したか？』といふやうな項目まで入れて、毛の回答を求めたのださうだから、これ以上正確な材料はあるまい。

そこで私は、スノウを標準にして、私のこれまで調べてゐるところをつきあはせて書いて行くつもりである。

少年時代

毛澤東字は潤之、湖南省湘潭縣下の韶山といふところに、一八九三年に生れた。今年四十八歳の男盛りである。父が毛仁生、母が文其美——嫁して毛文氏といふわけだらう。

彼の生れた年に就いては、これまで色々の説があつた。一八九二年説があり、一八八〇

年代説があり、定説がなかつたのであるが、スノウ氏の御蔭で、正確なところが判つたわけだ。

父は貧農出身で、多くの負債があつたため、若い時大分長く兵士になつてゐたが、後に故郷に歸つて小さい商賣をし、大分貯め込んで、土地を買つて小地主になつた。なかなか勤勉家で、金を貯めて土地を買ひ足し、澤東が十歳の頃には、十五畝の土地を持つ中農であつた。十五畝の田地から六十擔の穀物が取れ、一家五人で三十五擔を喰ひ、二十五擔を剩す。それを貯めて、又七畝の田を買つて、都合二十二畝（八十四擔）の收穫の富農になつた。

澤東は六歳の時から野良仕事をさせられた。八歳の時村の小學校にあがり、十三歳までそれを繼續した。讀んだ書物は四書、孔子家語等であつた。教員は亂暴な男で、時時學生をなぐる。澤東が十歳の時、叱られるので、學校を逃げ出して、三日間も山の中を迷ひ歩いたこともある。

學校から歸つて來ると、帳面付けと算盤をやらされる。父親は商才もあり、穀物の運送と販賣をやつてゐたからだ。

母親が優しいのに似合はず、父は嚴格過ぎるほどだつた。節儉過ぎて、吝嗇に近いところもあつた。利かぬ氣の澤東は、十三歳くらゐの時から、十分父親に反抗したらしい。學校では四書などは放つたらかして、精忠傳、水滸、三國志、隋唐演義、西遊記などに讀みふけた。然し小學校卒業後は、讀書の傾向も少し變つたらしく、『盛世危言』などを讀むやうになつた。この書物は、毛に最初に影響した書物で、支那の弱い所以は、物質文明に遅れてゐるからだといふやうな、一種の洋務運動派の述作だつたらしい。ともかく、この書物を讀んで、もつと學問せねばならぬと、父親にネグつたが、許す筈もない。たうとう逃げ出して、或る法律學生の家に居候をして、そこにあつた新しい書物を貪り讀んだ。そのうちに、湘潭に一つの新式學校が創立された。毛は、従弟と一緒にコッソリ入學の手續きをした。父親も、然し後にそれを許したので、毛は銅錢一千四百枚を納めた。五ヶ月間の學費と食費とである。これは彼の十六歳の時であつた。

この學校にゐるうちに、彼は康有爲と梁啓超の崇拜者になつた。これは梁が横濱で出してゐた『新民叢報』といふ雑誌の影響だつたらしい。この外、『世界英傑傳』などを讀んだといふ。ナポレオン、カザリン女皇、ピーター大帝、ウエリントン、グラッドストーン、モ

ンテスキュー、リンカーン等の傳記が、この中に入つてゐた。

長沙に行く

彼の向學の志尙は、ますます、高まる一方である。たうとう、長沙に行かう、と思ひ立つやうになつた。長沙は湖南の省城であり、文化の中心であつた。そこには、湘潭人のために建てられた私立中學があつた。大した困難なしに、彼はこの學生になることが出来た。そこで、彼の最初に見た新聞紙が、有名な『民立報』であつた。

辛亥革命前後に於ける『民立報』の役割は、周知の通り、相當重要なものであつた。陝西省三原の學人、于右任は、革命排滿の説を發表して御尋ね者になり、上海に奔つて『民呼報』を起したが、これが發禁になると、今度は『民呼報』とした。又發禁になつて、再變して『民立報』となつたのである。于を社長とし、『漁父』の筆名で知られた宋教仁が主筆、その下に馬君武、景耀月、呂志伊、范鴻仙、徐血兒等がゐて、堂堂の筆陣を張つてゐた革命新聞である（筆者も當時上海の學窓にゐて、この新聞を愛讀したものである）。この新聞を通じて、毛は孫文の運動を知り、中國同盟會の綱領等を知つて、忽ち革命黨に同

情を表するやうになつた。そこではじめて筆をとつて、學校の掲示板に、政治意見書めいたものを書いて同學に訴へた。その中で、彼は、孫文を新政府の總統とし、康有爲を國務總理に、梁啓超を外交部長とすべしと書いた。保皇黨——君主立憲主義者と、革命黨——民族革命派との區別が判らなかつたのである。

そのうちに、四川に鐵道國有問題の風潮が起つた。毛のゐる湘潭中學の學生間にも、排滿の情緒が充満して來た。毛がその急先鋒だつたことはいふまでもなく、彼は眞先きに辮髪を剪つた。十數人の同學がこれに倣つた。間もなく武漢で革命が起る。長沙には戒嚴令が布かれる。黎元洪の部下の一人が學校へやつて來て、革命演説をやる。興奮した毛は、數人の同學を糾合して、黎元洪の革命軍に投じようとしたが、その間もあせす、長沙にも革命が勃發した。最初の都督が焦達峯、暗殺されて後譚延闓がこれを繼いで、大いに軍隊を組織した。學生たちもこれに参加した。大抵は學生軍に入つたが（唐生智もその一人であつた）、毛は本當の軍隊に入つた。月給七元、半年間兵士生活をやつた。この間、『湘江日報』といふ革命新聞や、江亢虎（當時中國社會民主黨の首領）の社會主義に關する著作を貪り讀んだ。

辛亥革命の騒ぎが終ると、いつまでも兵士をしてゐるわけに行かないので、どこかの學校に入らうと、新聞の廣告を見ると、色々學校がある。警察學校、法政學校、商業學校等。父親が喜ぶので、商業學校に入學したが、毛の苦手の英語の課目が多いので、一月で止めてしまひ、省立第一中學に轉じた。毛が二十歳の時である。

この學校には半年ゐた。後の半年は、省立圖書館で書物を讀んで暮した。アダム・スミスの國富論、デアウインの種の起原、その他ジョン・スチュワート・ミル、ルッソー、スピノザ等。

父親からは、學校に行かないならば學資を送らぬといつて來たので、省立第一師範に入學し、二十一歳から六歳まで、滿五年間在學し、『確實に』(彼自らかういつてゐる。)卒業證書を握つた。

新民學會

一九一三——八年の湖南省立第一師範在學時代は、毛に一生の方向を與へた時機である。彼はここで遙かにロシア革命を聴き、更に、北京大學に起つたその反響——陳獨秀、李大

釗に依る『マルクス主義研究會』の組織——を聴いたのだ。さうして彼も亦、一つの組織を想ひ立つた。一九一五、六年頃から同志を物色し、一七年には準備いよいよ成つて、『新民學會』といふ形でそれが成立した。これが従來、支那共產運動研究者の間に、『マルクス學會』といふ名前前で知られてゐた學會である。本當の名前は新民學會だったのである。

會員は七八十人あつた。その重なるメンバーとして、毛がスノウに語つたところに據ると、左の諸人である。

羅 邁 (現中共組織委員會書記)

夏 曦 (第二方面軍政委だつたが紅軍西遷中死す)

何叔衡 (中央蘇區最高法院高等推事、一九三五年逮捕銃殺)

郭 亮 (労働運動で有名、一九三〇年逮捕銃殺)

蕭子璋 (作家、蘇聯在住)

蔡和森 (黨中委、一九二七年逮捕銃殺)

易禮容 (黨中委、後轉向)

蕭楚女 (黨の有名な領袖、煽動家、病歿)